

様に、日本の社會が諸般の事を自治的にやる力に乏しい時代には、矢張政府の力を假りるが得策である。醫者の改良、法律の改良、教育の改良、皆政府の力で出來て居る。民間の事業として放任して置くならば、連も今日改良を見る事は出來ない。米國の如き自治の力の發達して居る國ならば、放任しておいて善いのです。日本の社會が自ら其點に氣が附いて、自ら改良を謀ると云ふに任せておくならば、幾十年の後の事が分りませぬ。そして、一方に益々宗教を腐敗せしめ、社會に害毒を流さしめては、國家の爲に大なる損害である。政府も宗教家も共に省るべき點である。

併し宗教改革と云うても、別に大なる問題があるのではないです。改革と云ふのは、畢竟僧侶の智識道德の程度を高める事にある。差當り一ヶ寺の住職たる者は、中學以上の普通教育を授け、其上に各宗専門の智識を修めしむるので、す。そうすれば、諸般の弊害も自然に消滅し、迷信の如きも段々無くなるです。それで其教育の程度を高めるに就いて、政府が干渉すべきです。例へば學校の如きは、設備が不完全であるとか、規則通りに授業が行はれて居ないとかと云ふ事があれば、文部省は學校の閉鎖を命じます。今日の寺院はどうです。内務省から幾多の保護を受けて居る、而も年

中一度も説教も開かず、何一つ布教らしい事をせず、唯法事とか葬式とかを以て來れば、夫は取扱ふ。しかのみならず、俗人ですらせぬ程の不道德を盛んに行つても、夫れでも政府は少しも干渉をしない、まるで制裁がない。政府が此の如き者に保護を與へつゝ、其の不埒を大目に見ておくと云ふ理由は、毫も無いです。夫れでどうしても一ヶ寺の住職たる者は、中學以上の教育、特に中學の普通教育が必要である。先年内務省が、中學以上の學力を有する者でなければ、住職を許さぬと云ふ訓令を出したが、そうすると、無住の寺が多くなるとか、何とか種々の情實を述べ立て、各宗本山が之を無効にしてしまつた。元來本山などには、教育の方針と云ふものもなく、人物養成と云ふ様な考もないです。試に本山が立て、居る諸方の學校を見ても、規則ばかりで何も實地はやつて居らぬ。實際上行はれて居る事は、僧位を賣り、僧官を賣る事である。住職の許可は試験制度になつて居つても、其試験は賄賂で手加減をする。甚しきは公に献金で許す。本山一般の施設は、地獄の沙汰も金次第と云ふ有様で、布教勸學とは口實で、金を集めるのがその目的である。そして夫れまでにして集めた金は、どうなるのやら一向分らぬ。本山は野僧俗物の巢窟、此の如き本山に宗教家

の教育などを一任するのは、泥坊に金庫の番を頼む様なものです。神道とても同じ事です。夫れで先づ先年の内務省の訓令を復活するが急務です。一旦無住の寺の多く出来るは喜ぶべき事です。經濟上からも、今日は寺院の合併を迫られて居る。維持の困難なる寺の坊主等は、ろくな事外しないです。教理の改革ですか。夫は宗教社會が改革されて、人物が段々養成されるに從ひ、種々の實際的宗教家も出来れば、又純粹の専門的學者も出来る。其専門の學者が教理上の問題を解釋して行くのです。今日世間で教理の改正をせねばならぬと申します。が、夫は學者や書生の少數の人間の云ふ事で、田舎でも一村に二人や三人は、ある併し多數は、今日其必要を感じて居らぬ。宗教は多數を目的とせねば行かない。又今日學生が一般に懷疑に陥りて居るのは、是は一時の病氣です。元來今の書生は小供の時から、少しも宗教的教育を受けた事は無い。唯學校で色々理窟を覚え、又雜誌などを讀み、雜誌には懷疑の論が出て居る。其感化を受けて、懷疑になつてしまつたのです。小學時代から、宗教的教育を授けて行けば、決してそんなに懷疑に陥るものではないです。今日のは、一時の病的現象である。丁度維新の頃、政治的訓練のない者が、自

由とか民權とかの説を聞いて、騒いだのと同じ事です。從來の如く、地獄極樂の論から、宗教を説いて居つても、善いかと云ふのです。か夫は今日はまだ此問題が最も強く人心を動かして行きます。併し今日以後は、道徳より入る者もあり、やうやう又阿彌陀佛と云ふに就いても、其觀念に幾多の變化も出来て来ます。やうやう罪業を感じて、救済を求むると云ふ方を、重に説く者もあらう。佛の攝理と云ふ様な事を主として喜ぶ者も出来、やうやう人の氣風は色々あるから、宗教にも矢張り色々方面があるのが、善い將來でも、直心を本とする方が面白いと云ふ人もあらう。因果の理法を推し通して、夫が面白いと云ふ人もあらう。夫は今まで、の如く色々仕掛があつて、種々の人を網羅して行く方が、善い一面に限つては、善くない。併し宗教は段々發達するもので、佛教ならば種を蒔いたは釋迦である。之を培養する事に就いては、何處から肥料を取つて来ても、更に差支はない。耶蘇教から善い處を取らうとも、マホメット教、モルモン宗、何でも差支ない……要するに、人物養成が急務で、目のあたり、宗教家の普通教育を盛んにせねばなりません。段々改革し、宗教が進步するに從つて、其結果色々立派なものが出来、やうやう新佛教も其

時確立致しましやう。改革の結果は同じ事ですが、宗教家の教育の方から改良して行くのが順序です。

……はい、成るべく早く片付けて、来月十五日以前にも出發し度いと思ひます。自分の生活位ならば苦みませんが、どうも學校と云ふ大きな飯食ふものがありますから……。(十月十二日、此の篠井上氏の校閲を経ず)

賤か屋の軒にたてたる長棹の手向の花に

朝日かゝやく

灌

み佛のみあれの今日の手向にと野に立いで、花手折りけり

浴佛の儀をとなへつゝみ佛に今日の産湯

をあみせたまつる

み佛のみあれの姿おろかむと百八十人は

佛

こゝにつとひぬ

百花の八千花ふきのはなとのにたゝす佛

の尊きるかも

茂

百草の花をりふきし御佛の花の御堂に朝日さしけり

御佛の生れまし、日と貧し屋の佛の花も

あらたになしぬ

鏡なす三つの心のとこしへにけふの佛に

花たてまつる

たゝへたる法の産湯にかりふきし百草花

の影うつりけり

御佛の遊の産とこしへにうこくことなき

今日にしありけり

子

三



おとさむね

近頃段々東京の工合、それから地方の様子なども考へて見るのに、どうも耶蘇教は日本に望がない様に

思ふが子、存外耶蘇教の勢力が揚がらない様だ……先日も『毎日新聞』の記者が来て、色々話を聞いたのだが、あの新聞などは、表面にこそはそう言ふまいけれども、耶蘇教主義でやつて居るのだから、中々賣れるだらうと言つたところが、そうは行かない、そうだな、せかと言ふと、矢ッ張り耶蘇教は、そんなに盛ではないので、信者が少いのだから仕方がないと言つて居る、何でも耶蘇教の方でも、牧師といふのが、眞實に信仰があつて、精神から熱心に布教をしたらば、どうか知らないが、そんな人は、先づ少い、つまり衣食のための布教なのだから、とても信者の殖え様がないといふ様な

話だつたが、佛教の方ばかりではない、耶蘇教の方もつまり同じことなのだ。佛教の方には内輪喧嘩が始終あつて、耶蘇教の方には、ちつともこれがない様に思つて居たが、近頃はそうでもないさうだ。なんだか、そろ／＼そちこちに内輪もめのことが外に現はれる様ではないか、今まではどうやら上べをつくるで、外に見えない様にして居たが、それに随分教師の中にも、不品行のものが居る様だ。新聞などで見ると……

耶蘇教が望みがない、そんなら佛教が望みがあるかといふと、これも覺束ないものだ。此の僅かの夏休暇中丈でも、佛教の代表者ともいはれる本願寺の騒動やなんかで、佛教といふものゝ價值をどれほど落したものが知れない、こんな有様では、とても佛教が盛にならうとも思はれない。耶蘇教もいけまい、佛教もいけまいと言つてしまつて見ると、どうも困つたものだが、何となるといふものか……

それは實際上、人を得ぬからといふ方からの話で、人を得たときには、どれが望みがあるといふのか、そこになると、私は自分がそれで来たからか、何か知らんが、矢ッ張將來一番望みのあるのは、眞宗だと思ふ。何せ佛教が歴史的に發達して来た歷程が

ら見ると、其の歸結はどうしても、浄土門に來るより仕方がない、敢て發達して高くなつたといふ點ではないか、實際上、宗教としての方面の發達から歸結となるべきものは、眞宗だと思ふ。

私は眞宗の教理は、今日の通りで、少しも差支がないといふ考だ。唯制度上のことや何かについては、色々都合なこともあらうが、教理としては、今までの通りで、都合なところは、はないと思ふ……然し今日の眞宗は、祖師の考と丸で違つたをして

居るから、これは勿論同意は出來ない。法主の不品行などのとは言ふまでもないこと、第一この貴族主義階級主義な今日の有様といふものは、まるで祖師の平民主義に正反對なことになつて居るのだから……全躰祖師の説でも、あの時代の關係から來た點もあるだらうし、祖師が今日の世に生れられたらば、吃度また今日相應に説かれたに相違ない。それを今日の眞宗では、祖師の通りにもして居らんし、祖師が今日に出られたら、こうするだらうといふ様にもして居らん。今の平民主義の様などは、祖師時代にも、勿論必要などであつたに相違はないが、今日となつては、益これが必要になつて來て居る。それに平民主義に正反對の状態であるといふのは、ま

ことにわからんことではないか。
眞宗の教理について阿彌陀様が西方極樂に御座るといふ考かといふのか……。それは先づそう言ふのだナ、矢張り……。そこで其の阿彌陀様が客觀的に實存するといふとは、どうして説明が出来るかといふと、それはとても證明が出来ないけれども、宇宙の實在といふものは思慮を超絶したもので、その實在が佛教の發達の上で見ると、段々人格的に寫象する様になつて來て居る、それでその實在は既に思慮を超絶したものだから、其の事實以上はもう説明や證明はとても出来ないといふより外はない。

説明が出来ないと云つて仕舞へば、そんなものは無いと言ふ人があつても五分五分の水掛け争論になつて仕舞ふと言ふのか、然し經驗以上の議論はつまりみんなそうなるのではないか……。佛教の發達の歷程がそうなつてると言ふのは、客觀的に彌陀の實存を説明することは出来なくつても、心理上に根底がある、即ち漠然たる實在といふのでは満足が出来ない、人格的に寫象するといふことを、人の心が要求するのだといふ事實を示して居るといふのではないかといふのだナ……。或はそ

う言つてもよいかも知れない。

私は禪宗は大變好きで、自分でも坐禪をやつて見様と思つて居る位だが、然し宗教としては、將來どういふものかな、そりや一二の僅かの人には大に好からうと思ふが、然し何分どうも禪宗を説教したり、何かするといふのは、己に禪宗の本意に背いてくるのだから六ヶしい、何でもこの宗教といふものには、普遍的で廣く弘めるもの出来るものでなければならず、殊に下層社會まで感化の及ぶものでなければならぬ、禪宗には此の性質が缺けて居る、道元禪師の様に、簡人、が其の道を修するので、其の徳が自然に周圍に感化の及ぶといふとは、勿論あらうが、之を弘めて行くといふのは、禪の本來の性質には違つて居るだらうと思ふ。

今年あたりも、鎌倉などは書生やら何やら、大分參禪者が多かつたそうだが、たとひいくら多くても、其の大部分は何をしに行くや、膽力を養ふとか、何とか、丸でわけがわからず、いはゞ半分玩弄になつてるといふ趣きがある……。先日専門學校の生徒が、坐禪をして膽力を養はうと思ふがどうだらうと言ふから、番からうと言つた所が、其のものが言ふには、どうも坐禪をした人間を見ると言ふと、以前より

も却て花柳界に踏み込んだり、不品行などをすると平氣になるのはどういふものだらうと言つて居つた。若しこんなとがあるとするれば、まことに禪宗の弊害にも困つたものだ。昔時の高僧大徳には、よく道徳や何かの束縛を脱したといふ見識の人があるものだが、今の禪宗のものは、そんな見識も悟りも何にもない。公案悟りの安賣りをやるのだから、そのために空見識ばかりついて放縱になるのをよいとにして居るといふ風がどうもある様だ。無やみに酒を大飲みしたり、不品行をやつたり、丸で懺悔心といふものがない。眞宗房主の方は、そこになると悪いとをしても、まだ恥かしいといふ懺悔心があるのでナ……。

日蓮宗か、おれは教理の方はよいが、何分どうも御祈禱といふ迷信があつて困る。それにおの宗旨は兎角破邪的だから、おれが盛になると喧嘩ばかり盛になつて困るナ……。教理か、教理の方はあの萬善萬行を南無妙法蓮華經といふ七字の中へ込めてしまつたところは、大に取るべき點だと思ふ……。そうサ、淨土門の南無阿彌陀佛と同じことなのサ、唯人法の違ひ丈のことだ。淨土門では阿彌陀如來といふ人の方によせて南無阿彌陀佛といふのと、一方では法の方によせて南無妙法蓮華經といふ

次のことだ。一、法華念佛同時の教といふとは能くいふとだが、『無量壽經』といふのも、『妙法蓮華經』といふのも、人と法との差別がある丈で、理に二つはない筈なのだナ……。日蓮宗には本尊論といふのが、八釜しくて、法本尊とか人本尊とか争ふのだが、然し淨土門の方から見れば、つまりどちらにしても法本尊なのだ。なせかといふに、人本尊と言つたところが、其の人と指すのは法身で、つて淨土門の様な報身ではないのだからナ……。源信僧都などもそう言つて居るが、佛法僧の三寶に分けて見るといふと、佛の上から言へば南無阿彌陀佛法の上から言へば南無妙法蓮華經、それから僧の上から言へば南無觀世音菩薩といふので、つまり一つとだといふのだ……。源信僧都是一つだとまで斷言してないが、『空觀』にも、此の南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經、南無觀世音菩薩といふことが出て居るし、『往生要集』にも、歸依三寶のところ、これが出て居る。して見れば、三寶も同躰三寶の上から之を一ツだといふことになる。といふのは至當であらう。『無量壽經』といふのも、『妙法蓮華經』といふのも、『大般涅槃經』といふのも、みんな同じとなので、つまり大乘佛教の極理を、印度人が色々な方面から説いたものだと思はれるナ。

日蓮宗の法身を立てるのは、眞言と似て居る、尤でばとした眞如とか一如とか言ふのでなく、人格的の様な、それで理なのだから……。そうだと、勿論日蓮上人は法華を主として慈覺や智證を大變駁撃して居られるけれど、其實は密教を大に取つたものだ。あの曼荼羅など、いふものは、密教の思想からでなければ出て來るものではない。そこだから御祈禱の思想も、自ら密教から附いて來たものだ。唯『大日經』によつて密教を説くか、『法華經』によつて密教を説くかといふ丈が、眞言と日蓮宗の相違なのサ。

それでも日蓮では眞言こそ『法華』を盗んだものだといふではないかといふのか、その意味も無論幾分がある。十一行阿闍梨の『大日經疏』といふものは、全く天台の教理で説明したもので、天台大師は『大智度論』『中論』などを主として用ひられたものだが、一行も矢張主として此等の書によつて説明して居るので、阿字本不生といふ様な、でも、尤で三諦圓融の理で説いたものだ。全躰密教といふものは、其の最初は支那一般の民間信仰であつたのを、それを一行が『法華』の理で説明をし、それを弘法大師が日本へ持つて來たものだ。ところが日本には既に傳教大師が盛に天

台法華の教を弘めて居るから、そこで更に一行とは方面を變へて華嚴で以て密教を説明したのが今の眞言だ。そこだから眞言は『法華』『華嚴』の上にあるといふ様になつて來たものだ。

まア日蓮上人は、新發明の點があるといへばある様なもの、天台と密教と淨土とを合併したので、これが新機軸といふ點がないといへば實はないのだ。尤も天台では理の三千と事の三千とを説くが、重きを理の方に置いて、事の方を輕んずる。そこで日蓮上人は事の方に重を置いて、之を本門の法華とし、理論の高尙な方は却て之を迹門として斥けてしまつた。丁度南無阿彌陀佛と言つて往生が出來る、其の外に六ヶしい觀法は入らぬといふと同じ様に、南無妙法蓮華經で成佛が出來るといふ風に言ふためには、どうしても理の三千の小六ヶしい觀法は入らぬことになる。これが上行菩薩から傳はつた釋迦上行、日蓮といふ相承の法門だといふので、日蓮上人發明の點といへば先づ此の點丈のことだ……。佛敎が人格的の傾きを示したのは、密教がはじまりで、密教は理を事の方に寄せて總べて人格とか曼荼羅とか言ふ様なもの、一方にもつて來たが、然しまだ其の人格といふのも、主觀的人格とでも言

ふ様なもので、法身我々の心だといふのだから矢張り理の方に重きを置いて居る。これが一步進めば淨土門の様になるので、人格中の人格なのだ。日蓮はまだ眞言と同じ法身説なのだと思ふ。そこから佛教が宗教としての發達の歸結は眞宗だといふわけなので、これはいづれ『統一論』の第二編で詳論するつもりだが、定めて非難も多いとだらう。然し可成局外者の地位から、佛教の發達を觀察した歸結であるつもりなのだから……。

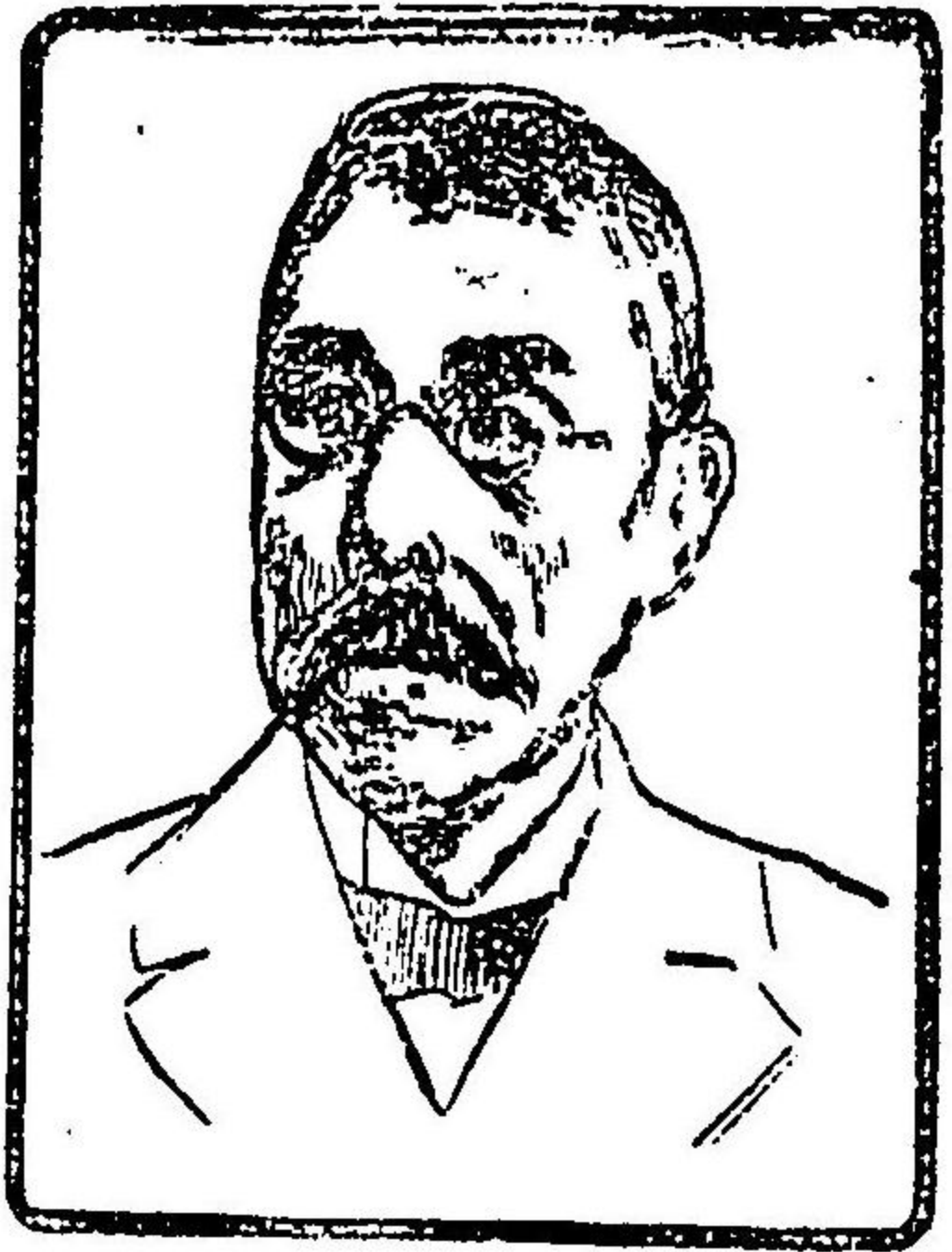
天台宗や眞言宗か。これはもう到底仕方があるまい。第一今日の時勢に一番必要なのは教育の振はん様子を見ても、とても宗旨を背負ひきれまいと思ふ。天台は言ふに及ばず、眞言にしても、音羽などには中學林よりない、大學林はないのだ。そうだ、中學林も普通の中學丈のことをするばかりだといふが、これで眞言宗が背負ひきれぬのか……。

教育といへば眞宗でもそうだが、京都の眞宗中學は、去年から見ると今年は五十名も入學生が少い、東京の中學は廿名も少い、巢鴨の大學は去年は入學生が五十名もあつたのが、今年は卅名ばかりだといふが、段々殖えなければならぬ筈なのが、減るといふのはどういふものだらう……。何分眞宗大學へでも這入るものは國へ歸つて寺の御住職にでもならうといふものだが、此の頃では學問をしようといふものは大抵獨立をしようといふ氣があるで、おんまりこんな學校へは這入らなくなるで……。(九月十四日)

● 汎神教と一神教の一節

境野黄洋

人の精神作用を以て、感情と智識との二方面となす時は、感情に對するものは美にして、智識に對するものは理なり。世界人世的に認取するものは詩人にして、理的に認取するものは哲學者なり。若し宗教が人全体の統一と調和とを目的とするものとせば、宗教は詩と哲學とより組織せられざるべからず。宗教は能く道理に合し、又感情を満足するものたるべからず。吾等が朝暎將に曉を破らんとするの時、渺々たる青海原に對し、遠く無窮のかなたをふりさけ見る時は、吾等は必ずや一種雄大な壯なる、しかも艶美莊嚴なる美感到打たるべし。然れ共其の美感に、迷信なるべきか。理窟より之を見るに、太陽の出づるは地球の自轉に因るのみ。渺々たる大洋は、水素と酸素より成れる水に、鹽分などが加はりて、低い所にたまりしに過ぎず。波瀾の運動は一定の規則によりて、彼に動き此に動く。朝暎の赤きは光線の反射なり。水空の青きは、其の層々の上に生ずる自然の結果なり。分拆し去るに、畢竟世界は機械的組織に過ぎず。然れども之をして一種言ふべからざる美感を生ずるは、面白きことにあらずや。人間生活の現狀に於て、美と理、感情と智識は、甚だ矛盾するものに似たりと雖、實際上相一致して疑はざること斯くの如し。吾人の世界觀人生觀も、畢竟かゝるものに過ぎず。吾人の生活は常に詩と哲學とによりて成れり。(新佛教三卷の六號)



佐治實然

私は眞宗の寺に生まれましたが、次男でしたから別に僧侶になる考はなく、幼少より漢學を勉強しまして、それに數學が極好きでありましたが、住職になつた後も、色々の便宜を得て、高等代數微分積分まで造りました故、私の頭は全く數學的の模型に箝まつて仕舞つて、狐を木馬に乗せた様な、お經などは中々頭へ這入り悪くありました。

夫から兄がなくなつた故、止むを得ず十九歳の時に寺の後を繼ぐ事になりましたから、初めて教校に這入り、少しく宗學を習ひ、尋いで京都に出で、本山の教師教校で、三、年間普通學を勉強して、芽出度卒業し、夫から多少本山の事にも關係しましたが、維新以來、寺内で權力の爭奪をやつて居た、渥美と石川との軌轢の爲め、多少望のあ

る者は、双方より引張風になると云ふ有様でありまして、私も渥美から度々挑まれましたけれど、到頭私より渥美に離縁狀を打付けて、夫より獨立して佛教演説をやりました。所が本山からは別に故障もせまなうだが、京都邊では大分悪く言はれて、夫から東京に来て見ると、眞言宗の高志、日蓮宗の新井、淨土宗の福田、夫から今の大内先生などは、存外可愛がつて呉れまして、大内先生と一所に各宗連合の高等普通學校を設立して、其幹事を遣て居た様な譯になりましたが、學校の方は種々の事情の爲めに廢校する様になつた時分に、同校の編輯課から出して居た普通學講義録が秀英舎に四五百圓の負債があつて、其責任者が私になつて居た爲め、私も止むを得ず、一か八かの考で、一生懸命に講義録を引受けて引續き發行しました所が、都合能く打當て、夫れで一萬圓餘の財産を造りました。夫からも其以前に眞宗の僧籍は脱して居りまして、初期の衆議院選舉の節には、尊皇奉佛大同團の爲めに引張られて、伊勢で選舉競争などもやりますし、彼此して居る内に、只今惟一館の幹事をして居る神田佐一郎氏がやつて來て、ユニテリアンの仲間へ這入らんかと云ふので、教規の上でも思想の上でも、束縛さへなければ這入ても宜しいと云うた

所が實は君の演説は時々聞いて、君の考は能く分つて居る、ユニテリアンの主義と全く違はぬのだ、一切拘束など云ふことはない、と云ふので、夫ではとて、彌々同會に這入り、爾來今日迄、十年計り相變らずやつて居る次第であります。

私はその宗教をどういふ工合に考へて居ります、第一宗教的宗教之は種々の奇蹟を信じたり、或は鬼子母神を拜むとか、或は腐水を戴き符咒を以て利益を求むるとか云ふ信仰で、之は中々其勢が盛で急に撲滅することは出来ませぬ、が教育を獎勵普及せしめて、民智が進めば、是等は漸次に滅亡します、其次は宗教的宗教と倫理的宗教とが細の如く組み合つた宗教で、佛教とか耶蘇教とか云ふのが之であります、之は其宗教的部分を取て捨て、又其倫理的方面をも時代思想に順應するように發達させねば、後來に勢力を維持する事は出来まいと思ひます、夫れで私の信する所又將來の宗教と云ふべき者は、どうしても倫理的でなければいけません、と思ひます、其倫理的と云ふことは、鬼に角吾々は如何なる場合にも如何なる人にも爲てはいけぬ、又爲さねばならぬ、即すべし、すべからずといふ法を固有して居ります、所謂良心とでも云ふべき様な、一種の法の力が備はつて居りますから、其すべしといふと

を進んで働けば夫で好いのであります。

そうして、其すべしといふとは種々ありまして、政治的にも、道徳的にも、經濟的にも、働かねばなりません、單に一方面以外には働かぬと限るのは、狭い量見であります、夫から又其働く方法は、どうしても、其時代々々で尤も進歩した思想に従ふ外はないので、倫理でも、政治でも、教育でも、今日で尤も進歩した學說方法を執て、之を應用するのが必要で、教權や教義に依頼し、又は之等を墨守するのは、愚の極です、要するに自己の精神を安し、其精神を安する爲めには、身體の健康に注意せねばならぬ、夫から又家族に對し、又知友隣間に對し、更に進んで區内、或は市内の公務に關係して居れば、其關係の範圍内に於て、夫れ々々忠實に懇切に働き、小さくてもよい、一人前の、人則ち比較的完全の人になり生れ、死に、する間に修行して、絶對的完全なる人になるのが、私の主義であります、最初から獨立さへ出来ないのに、知らぬ人關係せぬ事まで強ひて平等に、博愛的にやらねばならぬと云ふことは、不合理であるのです、豪傑になるの、大臣大將になるのと云ふ事は、私は野蠻時代の思想であると思ひます、えらいものになりたいと云ふのは、權力を求むるので、權力の半面には、

壓制と云ふことが附隨して居りますからな。
 私の考では將來の宗教家と云ふものは尤も社會問題に注意し、社會問題の爲めに働かねばならぬと思ひます。先づ第一に此の貴賤、貧富の階級懸隔と云ふものを打破せねばなりません。夫れには一方には教育の力を以て貧民の智識を進め、一方には貧民の味方、即貧民の爲めに働く人が澤山出来ねばなりません。此貧民の味方になるものは、宗教家の外にはありません。貧民の爲に働くのが即ち宗教家です……井上君や姉崎君の様に、六ヶ敷研究に従事して、深遠の智識を求むるのも、二人は必要であります。夫よりは、此實際社會の爲め、即社會の弊習と戦ふ人物が、今日尤も必要なのであります……此社會問題の爲めには、一神教も、無神教も、汎神教も、教義の異同等を問ふべき必要もなく、又乾燥なる理論上の争に汲々たる暇はありません。何教でも、何宗でもよいのであります。此問題の爲めに働くのが、眞の今後の宗教家であります……私は此社會問題の爲めに、一切の宗教が、一致一團となつて、活動する様になりたいものと熱望して居ります。
 私は靈魂問題や、本輪論等に、腦髓を勞するのは、今日では愚の至であると思ひます。

是等の問題は、古今の大哲人が色々研究して見ましたが、其結果はどれでも決して満足なのはありませぬ。夫で吾々は是等の問題を研究するには、未だ幼稚であると思ひます。併し吾々には吾々丈の法があつて、吾々を支配して居ることは前申した通りであります。此法に従て行けば夫でよろしく、又過去は既に去り、未來は未だ至らず、在るものは現在ののみですから、吾々は死後の考などは持ちませぬ。但死ねば再び人間に生れ、今日よりも一層進むと云ふ様な、不可思議なる因縁所生の法は有るべきものと信じて居ります。そういふ譯ですから、私は今日では理窟上の研究はよしまして、餘裕があれば、花を愛するとか、詩歌を見るとかして、美と云ふ方、文學と云ふ方に傾いて居ります。
 私は先年區會議員になりましたが、夫は私の知らぬ間に、二三の人が推選したので、折角當選した事故、辭するにも及ぶまいと考へ、最初に區會議員の協議會に出て見ました所が、丁度市街鐵道の市有と私設との可否問題で、星亨が私設を主張した時分でありましたが、私はこう云ふ獨占的利益ある事業を、一二の人が壟斷するのは不都合であると主唱しましたれば、區會議員は、星の子分一人を除く外皆賛成し

ましたから、夫から政治の方でも、矢張働けば働く丈の効能は有ると云ふことを感じ、政治上に大に興味を覺えました。孰れの方面でも、人生の爲に働けば働く丈の効能はあるものですから、宗教家でも、別段政治を毛嫌するにも及びませぬ、唯忠實に宗教的の考で遣り通せば善いのであります。若し政府に新な法律でも出来て、吾々の如きものは政治に參與する権利がないと云ふようになれば、ユニテリアンは宗教以外に立ち、社會教育を目的としてやるまで、米國でも大抵さういふ事になつて居ります。全躰宗教家とか、政治家とか、同一人民に區別のあるべき筈のものではありませぬ。どうも日新の世の中です。餘程見越して見當を付けて置かぬと直ぐ後れます。さうさまた四五十年の内には六ヶしいか知れませぬ。百年とたぬ中に、本願寺の境内も、淺草の觀音を見たように公園にでもなりましようかい。どうも其の人間の終生の運命とでも謂ふものは、不思議なもので、こうやり度いと思つた事は、存外都合能くゆかずに、不意な事が却て甘く當るもので、各宗連合の高等普通學校の如きは、私と大内先生とが、福澤の慶應義塾に於けると同じ考で、身命を抛つてやる積りであつたに、甘く行かず、止むを得ず引受けて發行した、普通學講

義録が却て能くゆき、又ユニテリアンでも、私より進んで這入つたのでなく、總て私のは受動的の方面が成功して居ます。夫から私は、曾て日蓮宗の優陀那日輝の書いた、學佛具眼抄などを見まして、其法華經を解釋するに、神秘的部分を排斥して、極めて常識的に論じてあるので、痛く感服して、一時は日蓮宗の僧侶に爲りかゝつたともある。又禪宗の流義が大好物で、いつそのと禪僧になつて、小田原最乗寺に住職しようかとまで話が進みましたが、大内先生が、眞宗から出て、禪宗坊主になるのも可笑なものだと云ふので止めました。が、新井日薩が今暫く生きて居れば、日蓮宗の僧侶になつたかも知れませぬ。が、今日から見れば、随分可笑な事でした。ある人が私に、折り、君でも死際には考が變りはせぬかと尋ねます。が、私の考では、所々に不義理があつたり、死後に妻子が路頭に迷ふような恐れがあれば、色々な迷も起るか知らぬが、さういふ心配がなければ、死ぬると云うても眠ると同じに別に大したことはないと思ひます。私は區や市の政治にも、又銀行等にも關係して居ますが、矢張ユニテリアンの講壇

に立つて居ると同一な考で仕事をして居ります。勿論銀行などの事は利益を棄てる様な事をしてはなりません。第一出来得る限り利息を廉くして、其代りに充分確實な者でなければ、貸出さぬと云ふことを何時も申します。夫から又賞與金でも、重役の方を減じて、十圓や二十圓の薄給の者に多くやるが宜いと主張して居るのです。

私は色々な事に關係して居ます。故宅が手狭でならぬから、座敷を二間程建増す積りで、計畫して居りましたが、先達て下谷萬年町などの貧民窟を巡視しましたら、彼等の住居に比較して見ると、之れでもまだ、御殿同様の心持がしますから、増築は中止しました。

夫から先頃、二三の有志と共に、寒氣に向ひたる事ですから、区内貧民六十餘名に、被服料を施しました時に、區長が姓名丈でも貧民に知らそうかと申しますから、夫には及ばぬと云うて斷りました。全躰個人が個人を救ふと云ふのよりは、慈善救濟の事業は、國家公共事業とせねばいけぬと思ひます。要するに政治の眞意義は慈善に外ならずと思ひます。私は市會議員でもあり、又市學務委員もやつて居りますから、

区内の市立及び代用小學校などを巡視しましたが、代用小學校の不行届は眞に御話にならぬ次第で、野蠻の餘習なる軍隊には幾千萬の金をかけ、文明の根本たる教育は見る影もないので、誠に歎かほしい次第です。全躰戦争と云ふ者程、馬鹿氣た事は世にありません。私は新聞でも大演習の記事などは、目を掩うて見ぬのであります。どうでしょう。大演習と農作物……

私は日誌と云ふものは書きませぬが、金錢の出納は、一文も相違せぬ様に極めて明細に記してありますから、出納帳を見れば、私が如何なる生活を爲して居たか、従つて又如何なる人物であつたかも、大概は推知せられます。夫に私は、金錢の事は極めて嚴格で、縦令夫婦兄弟の間でも、書付なしに一圓の貸借出入をした事はありませぬ。又友人に用立てるにも、返済の見込の十分なものでなければ、決して承知しませぬ。其かはり五十圓かせと云うた時には、五圓位只でやりまして、夫を利子にして他で借るがよいと申します。夫から金でも貸した禮に、菓子箱などを持つて來ますが、夫は私は嫌ひで、其代を現金で利子として持つて來るがよいと申します。そこで他から、或は守錢奴の拜金宗のと申しますが、決して其の様な譯ではなく、全く双方の

便宜であるからです。私は二萬圓まで金を貯へる考ですが、夫れ以上は一文も必要はありませぬ。夫れ以上の収益のある時は、皆公共事業に抛つ積りです。全躰今の者は大概意思が薄弱でいかぬです。そこで僅の金を持っては氣が太くなる。と申しますが、金を持つて氣が太くなれば、金のない時は氣が小さくなるので、夫れは丸で金の爲めに左右されるので、意思が強固でないから、そう云ふことになるのです。従て浮薄虚飾と云ふことが、流行する様になります。

私などは、衣服などは別に持ちませぬ、外出用の洋服が四着ある斗りで、和服は外出する様には揃つては居りませぬ。其代り食物には多少贅澤して居ます。先づ垣根よりは壁壁よりは疊疊よりは夜具夜具よりは食物と云ふ風に、佛教に所謂依報よりは正報外より内を重ずるのが私の家憲で、世間躰を繕うてゆく人の仕方とは正反對です。夫で私の所の勝手は何人が出入しても、餘り耻しくないのです。家内などが、今日あの鯛を買はねば肌着の袖が出来たものにと、こぼすことなどがあります。故其度毎に酷く教訓を加へて居ります。

私は初めての人でも舊友でも、同様に交際して居ります。どんなものが尋ねて來て

も留守を使ふと云ふことはありませぬ。又受合つた事柄で、自身に關係して居る事務は、決して輕忽に附して置くこと云ふ事はありませぬ。可成的期約前に、夫れく處理して仕舞ます。それ之が其の公務に關した書類です。之れが普通の用務で、之から處理するのが之れくで、此方に積んであるのは、もう濟んだのです。そうして暇があれば、あの床に在る様な花をいぢつたり、又こういう類の書物を見て居ります。どうです、貴殿は社會主義の研究をなさいましたか、別に研究と云ふ程の事はやつたことはないかと云ふ譯ですか、少しおやりになつては如何です、未だお年も若い様です。此から此方面に十分御運動なさる様に希望します。

●「新佛教の一周年」の一節

杉村 縦横

僕等素と清淨無垢の聖者に非ず、半點の名利心だも之なしと告白し得る勇氣あることなし。僕等は右に此に宣言す、僕等豈に利を欲せずといはんや。僕等豈に名を好まずといはんや。然れども同時に僕等は宣言す、僕等利を欲すとも、之を求むること豈に「新佛教」の上にてせんや。僕等名を好むとも、之を追ふこと、豈に「新佛教」に依りてせんや。僕等同志事業開始の當初に於て互に相戒めて曰く、「同志會の事業を以て斷じて生計の資に供することを許さず」と。僕等は名利の問題は生活問題の中に於て解釋せんとす。主義の問題を之と混同し去らんことをせず。此故に僕等の「新佛教」及同志會に對する、渾身の精力を傾けて、其の求むる所あるなし。獨立自由の精神としての体面を保つが如きは、僕等思と雖も、之を自己の獨立生計に求めて、更に何等の不自由あるを感ぜず。何を苦んでか、又區々道般の文筆に衣食せんとせんや。(「新佛教」二卷の七號)



志を考ふ

どうも失禮……、今朝もお出で下さつたそうで……、
 毎度御苦勞……、エ、貴所の雑誌は、毎號拜見いたし
 て居ます……、境野君などが盛にやられて居る様で
 すなア……、別に之といふ考はおりませんが、何か問題でも出して下されば、夫れに
 就いて單見が有れば申上げましょう……、成程將來の宗教として有効なのは、井上
 さん方の云ふ様な倫理的のものか、將又一神教的のものかと云ふことですか、それ
 に就いては、學問上の六ヶ敷議論は暫く措きまして、私は實際の宗教とはどんなも
 のかと云ふことから辯じましょう、全軀實際の宗教と云ふものは、極めて俗なもの
 で、又極めて廣いもので、單に倫理的とか哲學的とか云ふ様なものに限つて居りま
 せぬ、又佛教とか耶蘇教とか云ふものに止まる譯のものではなく、殊に佛教と云ひ

基督教と云ふも畢竟釋迦や基督が自覺せる宗教觀の僅の部分か、傳はつて居る計
 りで、勿論釋迦や基督などは、宗教を開くの教派を立つると云ふ考へでやつたの
 ではなく、たゞ其時代人民を救済したいと云ふ大慈悲大同情より出でたる活動の
 餘瀝が門弟等の手に由つて教派と云ふものに形成されたので、釋迦や基督の眞髓
 は決して教理論議の上で得られるものではなく、考へます、元來宗教と云ふ
 ものは人間の思想精神上の不調和を整理するものであるから、愚婦愚夫より學者
 智者に至るまで信仰し安心を得られるものでなくてはならぬ、夫で倫理的方面か
 ら信仰を立て安心を得るものもあり、やう又哲學的方面から信仰を立てるもの
 のもあり、科學的信仰から入るものもあり、やうから單に何的と限るのは狭い
 最見で、夫は實際的宗教の一部分に過ぎないので、又學者の宗教論の如きは、それは
 其人の宗教觀と云ふもので、宗教觀は個人的もので、人々に由つて異なり、すれ
 ば又實際の宗教となつたものではないから、宗教論と實際の宗教との間には聊か
 隔りがあります、要するに時代の要求に應じ、自覺を有し、熱誠燃ゆるが如き靈的の
 人物が出で、救済の爲めに其時代社會の情況に應じ、種々の方法を以て、大なる活動

を爲します。そうすると其遺業と云ふものが硬化して一の教派となり、然るに其教派なるものは久しきに亘るに従ひて教祖の精神を没却して種々の形式に趨り、幾多の弊害が醸出します。そうなるに破壊の時代が起ります。又破壊に繼いで、は懷疑の時代が出て來ます。そうして夫から漸く建設的になるので、其建設には先づ種々の方面から幾多の建設者が現はれて、一區一區の割據的建設をやりました。後更に之を統一するものが出るので、我國の如きも維新の初めは全く破壊的で、夫から稍々暫く懷疑的に陥つて居りましたが、近來は信仰を求めたいと希望するものが多く、所謂建設の時代に向つて來ました。そこで種々の建設者も現はれ、其部内へに多少の信仰を興へつゝあるのであり、まして六雄八將割據の有様ですが、秀吉や家康は必ず最後に出るので、割據的建設の次には是非統一的の建設がなければなりません。夫をやるのは所謂偉人で、靈的の人物でなければ出來ませぬ。私はそういふ偉人が出でねば、將來に有力な有益な宗教を建設することは出來ぬと思ひます。又、そう云ふ人物が必ず出るであらうと思ひます。そうして夫から其の將來の宗教の主義とか方針とか云ふものは、其人物の眼力次第、やり方次第で、

今から吾々が何とも推測することは出來ませぬ。若し其人物が現今の我國勢を達観して、宮内省や貴族方に向て宗教の革新をやり出し、其結果が一種の特質を有する教派となることもあり、或はアイヌの衰退を救済するといふ方面から着手して、夫が段々成功して、意外の大勢力を有する教派となるが如き結果を見るやも計られませぬ。そこは總て天地の秘密で、不用意な所に大成功者が出で、意外の成功を見るもので、夫は當人と雖も知ることの出來ないものである。夫であるから、倫理的とか、何的とか、豫め定規を極めて置いて、その通りに行くべきものでもなく、又そんな狭いものでもないのです。只自覺自信と熱誠とで成功を見るのであります。ア、そうです。結局私の説は宗教的偉人が出で、其の靈的勢力と感化力でなければ、宗教の大改革も六ヶしい。又將來有力の宗教となることも、難いと云ふので、其のやり方は、其人物の考一つで、何々のものでもなく、云ふことは豫定も出來ねば、又豫定して、夫から着手するものでもないのだから、と思ひます。そうして、又實際の宗教は、何々のと云ふ様な範圍に制限のあるものではなからうと信じて居ます……

エ、私にどういふ考で、現在の社會に對して働く積りかと申すのですか、それは一言で御答へしますが、私は目下修業中であり、そうして修業修業で一生終るかも知れませぬ、けれど其の修業も結局一つの事業ですから、それで果てたとして決して遺憾などはありませぬ、修業すればする程釋迦や基督などの眞面目が次第々に現はれて来るのは、丁度讀書するに一枚一枚と紙を繰り返す様に感ぜられます、勿論多少の自覺自信する所がないではありませぬ、から時期が來れば何事かやらぬとは限りませぬ、併し其時機と云ふのは、外部から來るのでなく、私の頭の中でやつてもよいと云ふ考、即ち内部の命令のおつた時には、直ぐにやる積りです……其時には現在の業務などは何とも思ひませぬ、悉皆打捨てることも出來ます、いや現在の事業と云ふ程の事はないので、之も父や母の様にして居た人が死んだ爲めに、是非跡をやらねばならぬ様な始末になつて、やつて居る様な譯ですが、そうで、別に此事業を打捨てるでも、やらねぬ事もありません、それが兎に角、其時にならねば分らぬことでもあります……いや之に就いて御話して置かねばならぬことは、私に決して社會に對して不平を抱くとか、又自身の不遇を歎くとか、云ふ様な考は、

毛頭ないのであります。

全躰不遇とか不平とか云ふ事は、文士などが文學上の興味に用ふる詞でありまして、實際に不遇など云ふ事があるべきものではありませぬ、尤も世には不遇のものもある様には見受けれます、その不遇と云ふ標準が定まらねば、容易に不遇であると否とは決しられぬ譯で、爵位を標準とすれば、夫は不遇なもの、澤山ありますが、人爲的に制限のある爵祿官位が標準になるべき筈はなく、兎角宇宙と云ふものは、至て經濟的に出來て居りまして、人々の修業して得た所は、夫れくそれを活用せしむる様に出來て居るので、修業さへ出來て居れば、不遇と云ふことは決してありません、せぬ、どんな野邊でも花が咲き實が結んで居れば、何ものにも見出され何事にも利用されるのに、極まつて居ります、それで不遇と云ふのが眞實ありとすれば、夫は未だ自分の修業の足らぬのと判定するより、他に法はありませぬ、各自に力の有る限り、社會人類の爲めに盡すと云ふことが、人生の眞意義とすれば、何所に居ても何事をしても盡されぬこともなければ、又不遇と云ふ譯もないのです……

夫から又事業と云ふことになつても、長くかゝらねば成功せぬとか、社會の表面に

現はれて活動せねば事業ではないと云ふ譯のものではなくて死ぬる前の半歳で非常の大事を成就することもあれば又死際の一言葉でも天下を動かすに足る様なともあるのであるから自分に修業さへ出来て居れば何も其他に離脱することはないので又修業が出来て居れば何時かは活用の時機が来るに極まつて居るのである……夫から又何人でもやれる事柄や一定の制限があつて併も夫を希望するものは多いと云ふ様な事柄を無理に競争してやると云ふ様なことは甚だ不経済否寧至愚であるから吾々はそういう方面をば夫れ相應の希望者に譲つて自身は可成他人の希望せんで併も制限のない未開墾の土地に向つてやるのが得策でもあり又社會に對する吾々の責任と考へて居るのであります……いや随分煩悶もし不平や厭世觀念も起した事があるのですが今日ではもうそう云ふ境界は通り越して全く自分の未熟即まだ修業の足りないことを覺つて今日は修業を積むと云ふことが頗る趣味を感じられ決して離脱することもなく又不平不遇をかこつべきものでないと云ふことを信じて居ります。

いや別に校閲には及びませぬ……今日お話いたしましたことを後日記憶して居ぬか

も分りませぬ……貴殿のお書になつた儘で御載せになつてもよいこと、信じて居ります……姓名を書くのですか、いや誠に愚筆で……寫眞は獨りで撮つたのはありませぬが何時か實業社で關係者一同を石版摺にしたのがあります……いや學資を作る爲めに實業社に筆を採つて居た事がありません……誠に失禮、どうも毎々御足勞で……何分多用なので……夫れでは失敬いたします……

灌 佛

花つゝし高挿す空に色雲のなひかふ見ればたふとくもあるか。かしこくもあるか。諸人のつとひなるがむ寺の御佛灌きにはしくこそ。あふげもろく。あめつちを指さしまして小さ殿花の御殿に佛立たせり。ふみてたせり。御湯中に立たせる見れば御子佛産湯めしけむ時。しおもほゆ。たふさくもあるか。花殿の湯中に立たす御佛に御湯灌がんと子等はいつとふ。子等はあらそふ。

秋 水

佛生會 小鳥を放つ家例哉
牛に死し人に生れて佛生會
瓶さげて甘茶もらふや佛生會
佛生會 虫も殺さぬ親ばかり
湯に入りて佛顔なり佛生會
神つれて後家の來にけり佛生會
とばしりば人にかゝりし甘茶哉
灌佛や市場に近き門徒寺
甘茶あびて小便する世尊哉
お釋迦様運參三杯と甘茶哉
坊 五 一



徳下止

宗教と云ふものに對する私の考は、疾より定まつて居りますが、茲に一つ注意を希はねばならぬのは、宗教と云ふもの、解釋、即宗教と云ふものは如何なるべきものか、又如何になければならぬものかと云ふこと、自己の信仰とを混同しては困るのです。

全体宗教と云ふものは、オーソリチー即權威と云ふものが無くしては成立ぬと思ひます。夫で宗教成立の根底は權威であつて此權威と云ふものが人心を支配して之に安立を得しむるものであるのです。そして此の權威の根源は何かと申しますと、夫は不可思議です。不可思議と云ふとは決して無道理でも非道理でもありませぬ。全く超道理で認識や解釋の範圍を超越した者であります。之が宗教の第一

義で此は永遠不變の者です。決して改革し得べき者でもなく、又改革する必要もないものであると思ひます。夫からその第二義に下つて宗教と社會との關係所謂宗教の社會的方面です。之は無論倫理的でなければなりません。其倫理的と云ふものは、孰れの宗教でも皆戒律と云ふものがあつて實行上の標準になつて居ります。此戒律と云ふものは變更すべきものであるや否やと云ふ事に就きましては、丁度倫理學上の道德と云ふ者は、方古不變なものか、將又時代場所によつて變遷するものかと云ふ問題と同じことであらうと考へます。私考では無論時代思想に相應せねばならぬものと思ひます。尤も時代思想に相應するといふことは、全然變化してしまふのではなく、統合へば十善と云ふことが戒律道德の全體であるとすれば、其十ヶの内に、釋迦の時代には、ある一ヶ條若しくは二ヶ條が尤も主なる標準になつて居たが、中頃は以前に主となつて居たものは寧ろ第二流に下つて、夫よりも他の條項が比較的に主なる者になり、現在では、從來餘り緊要と認めなかつた條項が、却て主なるものになり、以前の必要として居たものは、強ひて固守するに及ばぬと云ふ様になるので、要するに道德戒律の標準たる條項が、時代に由つて其の位地を變するの

で換言すれば、道德戒律の標準條項に、主従の位地、價値高下の交替變動があるので、わつて昔の道德や戒律は全くいかぬ、一切放棄して、新なものを作り出さねばならぬと云ふ譯のものではなからうと思ひます。夫ですから、宗教の第二義は、時代思想に順應して刷新して行かねばならぬは固よりであるが、其革新と云ふことのみに眩目して、在來の總べてのものを破壊し去らんとするが如きは、随分無謀の甚しきものと云はねばなりません。

私の考では例へば宗教上の談話や説教でもするのは普通の人家や寄席等でやるより、矢張寺院や會堂でやる方がよく、従つて寺院や會堂の建方は古來の方法を保存して之に倣つて行く方がよろしく、其他の僧侶や牧師等の衣服生活の方法より禮拜等の儀式に至るまで有害の者を除く外は、可成古風舊慣を保存して行く方が利益であると思ひます。尤も眞言宗などで、加持をするとか九字を切るとか云ふようなとは、あれは未だ醫術等の發達せぬ以前、宗教と科學と混合し、精神の病を治するものは、肉牀の病をも治療が出来ると思つて居た、宗教万能僧侶万業時代の遺風で、又あア云ふとは、佛教の本意ではなく、全く波羅門より傳染した者でありましよ

うが、今日の如く、各種の科學が發達し、醫術も進歩して、分業の世になつては、あア云ふ危険なことは、無論排斥し改革せねばなりません。が、聖晚餐式とかクリスマスの別、に左した害のないものは、強ひて之を廢止するに及ばぬのです。要するに、後來の宗教は、僧侶でも基督教でもよいが、其宗教の第一義と云ふものは、無論變更することは出来ぬもの、又變更の必要のないものであるが、其第二義は、時代思想に應じて有害なものを排斥して有益なものを引き出して來て、之に代へねばならぬので、革新は必要であるが、全然破壊的の革新は却つて危険であると云ふことに歸結するので、……新佛教等のやり方は、私は革新の動機とか輿論とか云ふべきものになつて、舊來の佛教を提醒せしむる端緒になるものであるから、大によろしい事と思ひます。併し夫が爲めに舊佛教が全然破滅し去るような事はないでしょう。

私の宗教と云ふものに對する考は、大略此位のもので、私の信仰と云ふ者は、多少別に御話をせねばならぬのです。……全體私は、儒教主義の家庭に生れたもので、幼少の時から、論語孟子で頭を練られて居たのですが、御承知の如く、儒教には、宗教上の所謂第一義と云ふべき點は殆んど説いてないので、大抵第二義ばかりの事柄

を繰返してあるのでありますから、なんとなく物足らぬ様な心地がする時がありますので、夫れから私が十三の時でありましたが、新島さんの懇意を受けて同志社に這入り、一二年たつ中に其の儒教を有神教化したような、基督教を儒教的に解釋するような宗教主義に感服しまして、遂に籍を基督教の一派即新島先生の教下に列する事にしました。夫れから二年か立ちまして、或時聖書考證と云ふ書物を見まして、大に疑念を起し、其後先生に乞うて、基督信者の籍を削除して貰ひました。之が丁度明治十三年で、爾來宗教上にては全く無籍者で、何教何派にも關係はありませぬ。夫れから段々社會の方面に手を出す様になりまして、次第に考も廣くなり、殊に人間が社會に立て働く標準と云ふような事は、儒教の説くような位の事で充分であると思ひまして、茲に再び儒教的主義をも收拾する事になり、夫れに又私は最初佛敎の如きは、どうしても國家を益毒する有害物であるから、成るべき事なら、どうか之を撲滅したいと云ふ様な考を持つて居りました。此の五六年來は、佛敎に對する考も大に寛裕になりまして、其悪い點さへ改めれば、決して全體を破却するに及ばぬのみか、或部分は是非保存して行かねば、却つて國家の不利益であると考へ

て居る次第であります。

併し茲に一言して置かねばならぬ事は、政治と宗教との關係です。私は宗教と云ひ僧侶と云ふものを尊重することは、誠に結構なことで、是等は必ず其大切にせねばならぬものであります。茲に一つ注意すべき事は、宗教と政治の混同で、彼の奥國や西國等に行はれたところの僧侶黨など云ふ如きものが出来て、政治上に暴威を振ふ様な事が出来たなら、夫こそ大變な國家國民の不幸であると思ひます。……はア先年の宗教法案の如きも、われは國家が十二分の讓歩をした法案であります。然らば宗教家の方では決して彼の案に不服を容るべき理由はないのです。夫れから私共は大體に於て無論政府案を賛成して居たのであります。夫れを種々と宗教家が運動して否決になるようにしたのは、兎に角穩かならぬ舉動と云はねばなりません。ア、成程私は無論所謂宗教家になると云ふ考はないのです。若しも私は私の天職が宗教家に在ると信すれば、尙種々研究もし、佛敎の精しい事や、回々教なども調べて見ますし、猶所謂宗教の第一義と云ふ者に就いても、深く考へて見るのであります。が、私は唯今やりかけて居る仕事、矢張私の本職で、直接に社會に働くべき者

であると信じて居りますから、宗教上の事は、別に深く考を盡しませぬ、第二義の所に由つて働けば、夫で十分であると思つて居ります。つまりスピノザやコントの説だけで澤山なのです。夫で私は宗教と云ふものゝ實質を解釋するには、第一義超道理の點があると思つますが、私の信仰として實行する所は、第二義に止まるのであります。そうして今日では、私は、各教派に向つて別に愛憎と云ふものは持つて居りませぬ、所謂一視同仁であります。唯其第二義、即社會的實行的方面に多少の革新を加へて、時代の思想に順應すると共に、卒先して現下の社會を濟度し矯正する様になればよいと思つて居るのです。

宗教と教育との關係ですか、……今の教育當局者の遣り方ですか、夫は決して無理でないのです。若し宗教を教育と混合して、學校等で宗教的の事柄を教授し、又は宗教的の禮拜などを遣ると云ふ事になりますと、どうしても國教と云ふものを設けねばなりません。目下我日本の宗教の有様では、到底そう云ふ事は出来ませぬ、英國でも國教と云ふものは定まつて居りますけれど、實際には國教以外の教派も勢力を有して居ります。夫で宗教と云ふ意味の動作を、一般の教育の上より排除する

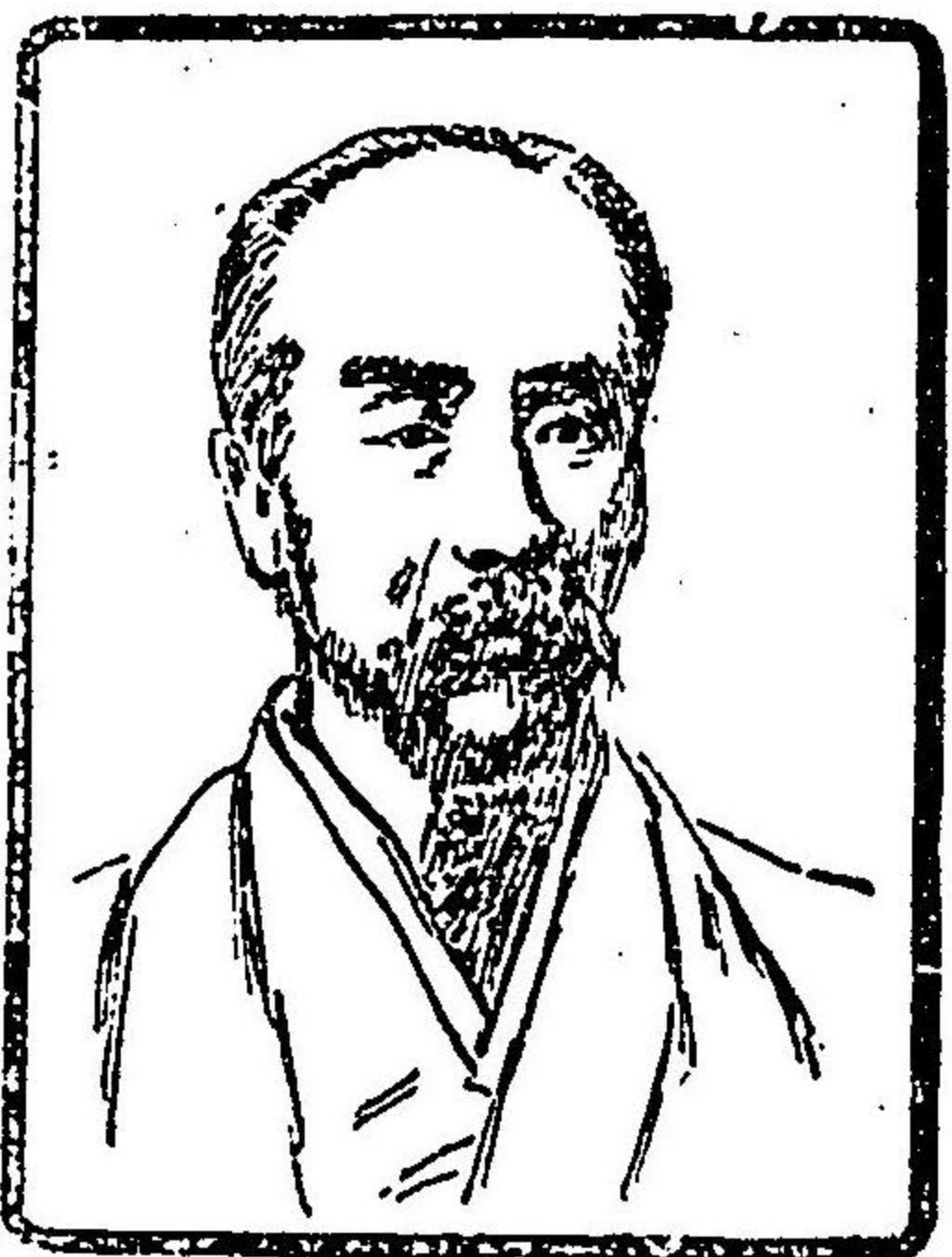
のは宜敷くありまして、別に不都合とは思ひませぬが、宗教家と云ふは普通の國家の手でする教育の他に、日曜學校と云ふものを設けて、自分の信者、檀家の子弟を毎日曜に集めて、朝夕二回各一時間宛位、小供は小供相應の事を、夫れ〴〵説き聞かして、自然に宗教的趣味を催誘するのが尤も必要であります。……ハ、ハ、小供に宗教的觀念を注入するのは危険だと云ふ説ですか、決して危険ではないのみか、一昧宗教的趣味を注入するのは、小供の時分からでなくてはならぬのです。若し夫が危険であるとするれば、遺傳や家庭はどうしますか。有名な話であります。或小兒に、お前は何しに教會に行くかと問うたれば、祖父母もお父さんもお母さんも兄さんも行くから行くかと答へたと申しますが、趣味と云ふものを自覺せしめ品性でも陶冶するには、不知不識の間に、自然の慣習を付けるより他に仕方がないのです。……夫から猶宗教家は、自己の教義を相續せしむる爲め、其徒弟を教育せねばならぬ事は申す迄もありませんが、其他に今一つ肝要な事は、國家を放棄した貧民ですな、此貧民をば是非宗教家の手で拾ひ上げて、教育せねばなりません。所謂貧民學校と云ふものは、どうしても宗教家たるものの責任として成立せねばなりません。今後の

宗教家は必ず其此の三つ即ち宗義相續の爲めの徒弟教育と貧民教育と日曜學校とこの三つのものを遣らねばなりませぬ。基督教の方では日曜學校と云ふものが段々設けられてあるようですが、佛教家も是非一つ之を遣つて貰ひ度いものです。

◎「實際信仰の表白」の一節

境野 黄洋

余は信仰といへる感情は、差別の宇宙に對する敬虔の情なるが如く感ずるなり。實在は人格的のものか、人格以上のものか、然らずんば人格以下のものかとの難問はあれども、余は之を人格以上とも、以下とも定め兼ねるなり。何となれば、絕對は此等の言辭を越絶したるものと考へざるを得ざればなり。されど宗教的對象として之を見るときは、人格的のものにせざれば、余が心を満足し得ず。人格的のものと言ひても、耶穌教の神の如く、人の大なる如きものが、何處にか居るといふことにはあらずして、差別の萬有箇々の現象か、悉微妙の意匠を含み、悉く絕對の光榮を負へるが如く、人格の力の現はれぬ如く感ずるなり。是に於て吾人の敬虔の情念が、萬有に對して何となく傾けらるゝと感ずるが、宗教的感情なるべしと今も思へり。斯くの如き余が感情は、何物も尊く見ゆ。我身の精神が尊きと共に、我身も尊く、我の尊きと人の尊きと同じ度合に尊し、個人の權利義務自由を尊重し、同情慈悲愛念の芽も之より生ずべしと信ず。鉅萬の富を担げれども、汗みづくの勞動は之と同じく尊く神聖に覺ゆ。強者の權利はさることながら、余は弱者、心の貧しき謙虛の兒女はいと尊きの念に堪へず。余は此の情を押し擴めて故なく、絲鮮に茂れる葉をむけたる樹木の枝を打ち折り、或は軟なる可愛の草を踏みじり、深紅色流なる可憐の花をむしるの殘酷を惡む。宗教上には無情物に對してもなほ遺憾あることを知れり。(「新佛教」一巻の三號)



江原素六

まアこちらへお上り下さい。唯今お湯に往つて來た所です。先達ては留守中お出で下さつたそうで、失禮いたしました。ウム、新佛教と云ふのは、余が變う云ふ方々のお都合ですか、成程夫では僧侶の變化したのでもなく、又所謂僧侶佛教者の遣り方とも違ふのであります。杉村君や境野君などのお名が雑誌上に多く見える様ですが、誰れが主任とか會長とか云ふのですか、ハ、夫では先づ同志の共和團とも云ふべきものです。ア、惟一館で毎月一回づゝ演説をなさるのですか、夫は結構です。そう云ふ進歩した主義で、下らぬ迷信を打破したり、又宗教の必要なることを鼓吹することは、目下誠に必要の事柄であります。……イヤ私は神學や、比較宗教學などやつた事もなく、將來の宗教と云ふやうな大問題には一向考もなく、又一言の口を開くべき資格はありませぬ。ハ、

私の基督教を信する因縁ですか、夫は先達て佐治君の依頼に由つて、惟一館で其経歴談をしましたが、……兎に角其宗教と云ふことになる、私は神と云ふ信仰がなく、てはいけぬと思ひます。ハイ、いにかも私の所謂神と云ふのは、一神教論上の神で、汎神論はどうも漠然として居て、神と云ふ信仰を確立するに六ヶ敷様に思ひます。佛教などでは基督教で云ふ罪と云ふ様なものを、どう解釋して居ますか、十悪とかいふ様なことを聞きました、が其の十悪の根本は何所から出て来るのですか、成程不知の惑と云ふ無明論ですか、そう、何時か南條博士の演説に、尤も克く貯へられた實は智識であると云ふことを聞きました、が眞正の智識が第一の實であると云ふことは、學者や研究家に向つて話すには尤も必要のことと、また夫丈で宜敷いりますが、宗教否全體人と云ふものには、智識の上に位するものがなくてはならぬと私は考へます。智識と云ふものは、死ぬるとか、また發狂でもすれば、一向役に立ちませぬが、狂になつても、死んでも、無くならぬ實、則智識以上のものが必要であり、ます……全躰、近來の學者は倫理的宗教とか、倫理即宗教とか云ふことを申します、が私は一向それに感服することが出来ませぬ。宗教と云ふものは、人間社會相互の間

を律する倫理法に止まるものではなく、倫理よりも宗教は餘程に深いもので、宗教的信仰の結果の一部として、倫理なるものが發生することはあり、ますが、倫理が直ちに宗教の代りになるものとは思へません、そうです、實際の事は克く存じませぬが、ユニテリアンなどのやり方、佐治君等の方針も、どうも倫理的宗教主義を執つて居るらしいです、村上博士などは、祈禱即ち己を捧げて無限に接すると云ふと、どう見て居られますか、又實際祈禱と云ふ意味の、とを遣つて居られますか、どうでしょう……先般村上博士に、私共のやつて居る教育會に演説を願ひましたが、大變有益のお話を聞きました、どう云ふ者が基督教の者が演説でもすると云ふと、反動を起して、克く成功しませぬ、が佛教家の演説は、氣受がよくて、大に都合が宜いのです、どうも基督教と云へば、學者や譯の分つた人でも、無暗に嫌ふのは、驚き入ります……明治二十九年頃でありましたか、條約改正準備會と云ふ者が組織されました、之には教育家政治家學者實業家等、朝野有名之士が澤山會合しまして、内地雜居に就いて種々準備をせねばならぬ事などを議して居りましたが、或時伊澤修二さんが、非常な大問題を提出すると云ふ前觸があつて、其次に到頭内地

雜居後は基督教を撲滅せねばならぬと云ふ問題を持出しまして、基督教はどうも日本の國家に有害であるが、既に憲法で信教の自由を保障されて居る上は、今更その會堂を閉鎖せしめたり、宣教師を追放する事は出来ぬ、又會堂に出入する信者は、大抵無智の者共だから、夫は捨置くとしても、基督教主義の學校はどうかして之を潰す手段を執らねばならぬ、殊に内地雜居後は、此種の學校が非常に増加するであらうが、誠に險毒であるから速に掃蕩の法を講ずべきであると云ふ説明でありましたから、私は三つ程の理由を擧げて大に之に反對しました。第一に内地雜居になると、外國人が堤を切つた様に、一時に澤山這入つて來ると云ふ考が間違のみならず、治外法權撤去の爲め、却つて暫くは、従前よりも外人の來ることが、減少する傾があるであらう、なせなれば、日本では法典は縱令立派に出來て居ても、之を取扱ふもの、從來の慣習として、格別の事もないに、人を拘引すると云ふことを何とも思はぬのみならず、一旦拘引した者は、よし目指す犯罪は無いにしても、折角拘引したものだからと云ふ譯で、苛酷な眼で種々の事を搜索せられ、神ならぬ凡人の身の上には、多少の缺點なきものなければ、其缺點に何等かの罪名を附せられ、やがて公判に

附せられ、一審二審上告等、久しき時間と手数を費して、終局無罪放免となるに至ると云ふ有様で、貴重の人權を蹂躪して、無辜の民を永く未決監に苦むるなどは、何とも思つて居らぬ、權利思想に乏しく、自由名譽などの考の低き日本人は、夫でも甘ずることが出来るが、西洋人は、到底此有様を恐れずには居らぬから、險毒だと云ふ考から、却つて暫くは來るのを見合せると云ふは、火を見るよりも明である。夫から第二には、此上基督教の布教俄に盛になつて、其方面の學校等が續々出來ると思ふのは、全く歐米宗教社會の實情を知らぬ誤解である。何れの國でも同じ事で、如何に文明に進んでも、愚民は割合に多いもので、従つて真正の宗教信仰は行はれ難く、迷信の流行は甚しいものである。夫から又何處でも同じく、金と云ふものは、何時も不足勝のものだ、夫で彼地の宗教傳道の會議などでも、年々苦情が出て、他國の傳道に金を出す程なら、先づ内國の愚民を救濟するがよいと云ふのを、内地の者は、周圍の感化で、自然にどうかなるから、幾分にも、他國の憐むべき同胞に福音の種を蒔いておくがよいと云ふ譯で、漸く多少の海外布教費を支出するようになるよになつた次第で、夫から又近來は、日本よりも猶未開の支那印度などに布教を勉むる方が寧

必要であると云ふ説に傾いて来て、日本には却つて漸次手を收むる有様であるから、條約改正實施後と雖も、爾後の筈の様に、基督教者の手から、學校を續々設立する様なこととはあるまい。夫から第三に、若し不都合と認むる教育を施す時は、文部監督權の下に、如何様にも處分し得るものであるから、信教自由を保障される今日、何宗教の者は、教育事業を企つる事は出来ぬと云ふ様なことがあつては、不法の極と云はねばならぬ。要するに宗教と云ふ者は、國家社會の上に裨益する所はあるも、決して有害なるものではなく、従つて基督教に對しても、しかく杞憂するに及ばぬと申しました所が、夫で其時は濟みまして、夫から其次の會の時に穂積さんが、日曜學校だけは是非廢止せねば、兒童の未熟な脳髓に神學的哲學めいた小六ヶ敷事を注入するのは、第一に生理上有害であらうと申されましたから、私は日曜學校の實情を陳べて、之を辨駁しましたが、全躰日曜學校と申しますのは、一時間かそこら、小供相應の談話をして聞かせ、漸次宗教的趣味を薰育するまでの事である。然るを之をしも廢止せねばならぬと云へば、小供が祖父母のお伴をしてお寺參りをすると、禁せねばなるまい。又家庭で宗教的行動や談話も禁せねばならぬではないか。苟

も人間と云ふ者から假りに宗教的觀念を奪つてしまつたならば、全く野獸の群團と異なるなきに至るであらうと申しました所が、澁澤や益田等の實業家は、夫はそうだ、吾々の如く幾千と云ふ職工を使役する者は、第一職工共に宗教的の考へがなかつたなら、到底制御は出来ぬと云ふ様な事實上の利害問題を擔ぎ出して、此問題は到頭採決を見合する事になりましたが、夫から間もなく、高等教育會議に此問題が變形して、學校では總べて宗教的の談話や神と云ふ様な詞をも用ひてはならぬと云ふ題で出て來まして、其時岡田總務長官の説明に、縱令へば、君に忠に親に孝にとあるのは、自然神の御心に叶ふから善事である、と云ふ様な解釋をして聞せてはならぬ、忠孝と云ふことは、我國躰の精華であるから、と云ふ工合に説き聞せねばならぬ、と云ふ様なことを申しましたから、私は學生に宗教的觀念を促すのは、決して危険でなく、寧ろ必要なる所以から、宗教的信仰と云ふ根柢がなければ、何事も浮萍の如きものである、人間としての活動を全くすることは出来ぬ、品性の陶冶も出来ぬ理由を辨じまして、宗教を恐るゝの恐を説破しましたけれども、中々皆が承知しませぬので、私の説に賛成したのは、鎌田榮吉、島田三郎の二人しかありませんだ。

私は始終こう云ふ工合に、宗教を代表して排宗教者と戦つて居りますが、學者とか、なんとか云ふものは、中々頑固なもので、仕方ありません。否、頑固なばかりでなく、又宗教そのものを全然排斥すると云ふ譯でもなく、全くの所は基督教を嫌ふので、否々基督教排斥と云ふ聲の下に、世に阿ねるのであります。夫から縣費とか官費とかで、即ち一般人民の負擔に由つて成立つた學校で、或宗の宗教的動作を行ふのは、悪くありません。或宗のものが出資して學校を立て、父兄も之を信用して出校させるのに、其宗の所執の宗教的行動をやらせるのは、些とも怪しい譯でもなく、又咎むべき理由もなく、之が信教自由の本旨である。夫を彼此干渉するのは、非立憲の行動で、歐洲などであれば、無論文部大臣や、又は政府全株の信任問題であります。どうも文部の方針にも、解せぬ點が澤山あります。……そう、何時か私が名古屋で高等女學校を參觀した時に、二年かの生徒の作文に、迷信を排斥して云々と云ふ文句がありました。が、着物も自分では、碌に着れない位な十二三の小娘が、堂々無神論を唱ふると云ふ譯で、そうして其の學校の歸りには、金比羅様にも參らう、御圖も引かうと云ふ有様には、驚かざるを得ぬです。なア、今この教育のやり方は、大概こ

んなものです。……夫から何時かでした。静岡で中學校の教員が、基督教主義の演説をやると云つたら、夫は父兄に對して受が悪いからよせと云つて止めました。辨に、佛教演説をやるのは、大に喜んで居た事がありました。……全株宗教と教育とを區別するのは、宜敷ありません。ようが敢て排斥とか撲滅とか云ふ考を起すには、及びますまい。せめては、互に相助長して、一向乖離せぬ様に致したいもので、そうして國民の頭に信仰と云ふものを確立させねば、所謂皮相的の文明で、到底國家の安全社會の進運品性の陶冶は出来ぬと思ひます。……どうも水天宮や不動様の流行するには、驚きます。な何時ぞや有名の銀行の重役の寄合た事がありました。が、夫等の人々の話す事が、利益問題の他は、方角がどうとか、日柄がどうか、祈禱がきくとか、何様は驗があるとか、さう云ふ事で、持ち切つて居るので、誠に呆れました。よとて、も商法的の宗教家や、布教師では、仕方がありません。な隨分有名な高地位に居る僧侶方の不品行も、甚しい様です。……其點では、耶穌教の宣教師の方が、多少善いようです。……どうしても、真正の布教師が出て、充分に活動するより、他に救濟の道がありません。……イヤ私は、教育事業が本職で、所

謂宗教家を以て自任するものではありませぬ……イヤ別に政治家と云ふ譯ではありませぬ、單に市民の希望に由つて選出されて、其任に在る間は、誠實に其役目を勤むる迄で、私共のは丁度一般兵卒の現役と同じで、現役中は嚴然たる兵士でありますが、一旦歸休兵になれば、又直ちに本職に復するので、終身を兵事に委ぬる士官とは譯の違ふので、尾崎や松田等は議員であらうがあるまいが、政治運動が本職で、所謂士官出身でありますから、終身的の政治家であります、私共はそう云ふ側では、政治家の中には這入らぬのであります。

全幹私は幕臣でありましたから、維新の際に當つて、どうか政府の飯を食はないで、陛下の良民として、獨立に暮す工夫はあるまいかと思つて、結局青年教育に終身を委ぬ、清貧に甘じて、決して榮華を求めぬと云ふことに決心しましたので、其後朝廷からも度々召されましたが、到頭素志を變じませぬでした。どうも官の飯を食ふと云ふことも、随分面倒な者と聞きました、之を斷るのも中々骨の折れる事でした、夫から教育事業でどうやらこうやら今日迄推して參りましたが、議員の歳費を貰つた時以外には、一ヶ月に百圓以上の収入をしたことは全く有りませぬ、見掛の通り

の貧乏であります、尤も金を貸すと云ふ人はありますが、到頭借はしませんでした、……私は始め沼津に居りましたが、其時使つて居た男が、おはたしくやつて来て、若松屋と云ふ沼津一等の富家の旦那が、あなたに要談があるから、一寸某料理店の二階まで来てくれいと申しますから、おれは人に酒を飲まして貰ふことは嫌ひだ、料理店でなくても話は出来るから、用があるなら拙宅に来るがよい、夫とも又都合次第では、拙者が向へ往つてもよいと申した所が、實はあなたの御爲めになる話で、若松屋が銀行の支店を東京に出したいと云つて、段々其方面の有名な人々に相談した所が、沼津なら江原を知つて居るかと云ふので、江原と云ふ人は沼津では左程でもなかつたが、東京ではそんなに名高いものかと思ひ、夫からどうかあなたを頭取に願へば、双方の利益だらうと云ふので、御會見を希ふ譯ですと云ふから、私は夫はあんまり可愛そうだからよしてくれい、おれはこんな汚い形態をしては居るが、これでも銀行家の集會の場所に往つても、濫澤などでも、先生こつちへと云ふので、一番上席に着くが、若し十萬内外の銀行の頭取になると、資本額の順で並ばねばならぬから、一番とん尻に据わる譯で、夫では此の老爺もあんまり可愛そうではない

か。と話して笑つた事がありました。……左様さ。どうも人格は金ばかりでも位地ばかりでも造作は出来ないものですな。……
ハ。私。は。學。校。に。毎。日。出。て。倫。理。を。受。持。つ。て。居。ま。す。ど。う。も。完。全。な。倫。理。書。が。あ。り。ま。せ。ぬ。の。で。……ど。ん。な。の。で。も。や。つ。て。見。る。と。な。か。く。甘。く。や。ら。れ。る。の。は。あ。り。ま。せ。ん。と。う。し。て。も。中。學。の。下。の。方。で。は。孝。即。父。子。の。關。係。か。ら。先。き。に。教。へ。ね。ば。工。合。が。悪。く。あ。り。ま。す。な。夫。婦。の。關。係。が。根。本。で。あ。る。と。し。て。も。中。學。の。二。年。や。三。年。に。は。其。の。方。は。説。か。ぬ。方。が。宜。敷。あ。り。ま。す。併。し。も。う。五。年。級。に。で。も。な。つ。て。サイ。エ。ン。ス。即。倫。理。の。學。を。少。少。知。ら。せ。る。と。云。ふ。時。に。は。夫。婦。の。事。な。ど。も。後。日。の。參。考。の。爲。に。一。應。は。や。つ。て。置。く。か。よ。い。よ。う。で。す。……ど。う。も。日。本。人。は。結。婚。と。云。ふ。と。を。至。て。輕。忽。に。取。扱。ふ。惡。い。癖。が。あ。り。ま。す。な。ア。……先。日。も。某。銀。行。に。出。て。居。る。者。が。來。て。家。内。を。持。つ。た。ら。ど。う。も。經。濟。が。困。難。だ。か。ら。何。ぞ。夜。業。に。語。學。の。教。師。で。も。や。り。た。い。と。云。ふ。か。ら。私。は。大。に。反。對。し。ま。し。た。大。抵。な。人。は。夫。は。殊。勝。な。考。と。稱。揚。す。る。で。あ。り。ま。し。よ。う。が。全。休。暮。し。の。困。難。に。な。る。か。ど。う。か。と。云。ふ。と。を。考。へ。ず。に。妻。を。持。つ。と。云。ふ。輕。忽。な。事。は。な。い。又。既。に。夫。婦。に。な。つ。た。以。上。は。暮。し。が。困。難。で。あ。れ。ば。お。湯。に。三。度。行。く。の。は。一。度。に。し。髪。を。人。手。で。結。ぶ。の。も。束。髪。

でよし、白粉なども塗るには及ばぬ、そうすれば立行かれぬ譯はない、夫を妻に威張らせようとか、自分に紳士ぶりたいから暮らせぬのだ、晝は銀行に出で、夜は内職をする、と云ふような精力を分つとは、双方に對して不忠實と云はねばならぬ、總べて人と云ふ者は、一事業に力を集めて、忠實に働く、と云ふことが必要で、夫が却つて成功の捷路である、又信用を得る基であるから、妻を貰つた爲めに、精力を分ち、成功を犠牲に供するのは、愚の極だと申しましたが、どうも結婚と云ふことに注意して、慎重の考を持たぬのは、頗る危険です、左様さ、人間は榮華を貪る考さへ止めれば、どうか遣つて往けぬ事はないのです、乏しきに安じて、働ける丈働くと云ふのが、どうも一番好い考らしいですな……
イヤどうも取りとめた話が出来ませぬで、わさ／＼、毎々どうも失禮でした、なに本郷から、夫はどうも大變遠方で、余程お早く……、イヤ誠に失敬。

偶 横目而望鼻。人面而默心。口中含糖蜜。肝裡藏毒賊。樹蔭相傍陷。暇則事荒淫。土風日墮落。古道不可尋。
成 何以消罪業。佛陀傳福音。如何歲月久。梵天靈霧陰。鯨神擲法水。魅魅滿細林。白毫光已滅。所拜唯黃金。



内村鑑三

私は豫め断つて置かねばならぬのは、全躰今時異宗
 教者の會合即ち佛教家が基督教者に遇ふとか基督
 教の者が佛教家をでも訪ふような事がある時は、大
 抵の者は佛耶兩教を甘く調和してとか、或は佛耶兩教の粹を抜いて、之を基礎とし
 て、更に兩教を超越したものを作る事が必要で、夫が即ち將來の宗教として、勢力を
 得べきものであるなどと申してお茶を濁したり、又或は互に接近しよう云ふよ
 うな傾がりありますが、私は決してそう云ふ曖昧な握手は好みませぬ、又好加減な自
 己の所信を模糊の中に葬る事は出来ませぬ、夫で私の話は随分貴下方の耳には好
 い響のせぬ點もありませうが、夫は悪からず御承知を願ひ度い。
 夫から今一つ断つて置くのは、井上哲次郎などが種々な事を云ふものですから、私

共が全く金でも貰つて基督教の爲に働いて居る位に思ふものがあるかも知れま
 せぬが、金など貰つて働く様で、何が出来ましよう、一人一人でも働かす事は出来るも
 のではありませぬ、私は自分に少し信する所がありました、過去二十六年の長日月
 間、相變らず此の通りに遣つて居るので、其間には、食はずに居た様な場合に遭遇し
 た事もあつたのです、夫を米基督教信者、所謂生活の爲めに表面丈信者となつて居る
 もの共と同一視されては随分迷惑に感ずるのです、全躰私の目指す敵は佛教では
 なくて、所謂ライスクリスチアンなのです、夫で始終そう云ふ輩と戦争して居るの
 ですから、私は所謂基督教信者から、非常に悪まれて居る次第です。
 一、躰將來の宗教と云ふ問題に對して、私の考は極めて簡單で、又尤も明白なもので
 す、即ち我國に於て否、全世界に於て將來真正の宗教として、社會人心を支配して行
 くのは、他にはない、基督の基督教である、と確く信するので、基督の基督教と云ふ
 のは、現今我國などで、會堂など建て、種々の儀式を遣つて居る所謂基督教とは、大
 に其意味を異にするのです、夫から又英國や亞米利加や獨逸などに、現に存在して
 居る基督教とも同一ではないのです、現在の所謂基督教は、種々に變態化装して居

るからいけなないので。私の基督教の基督教と云ふのは基督教の所信其儘のもの。聖書其儘の者を指すのです。夫で御覽の如く、此所にも此通り幾百の解釋書や批評書があつて、見は見えておりますが、ほんの参考に供するまで、決してどの説どの書を読むと云ふ譯ではなく、又現在日本に傳はつた教派も澤山あり、未だ傳來せぬのもあつて、幾百と云ふ派が分れて居りますが、私は其何れの派にも屬しては居らぬので、私は後人の勝手に變態させた所謂基督教では満足する事が出来ぬので、基督教の本色を握つて、基督その儘の基督教でなければならぬと思ふのです。此の考は今に始まつたのではなく、始め聖書を讀んだ時、即十九歳の時分から起つたので、其後洋行した時も、丁度此の考と同じ話を、米國などの宣教師の餘程眼識の高い人達から聞きましたが、結局歐米では、多年の慣習があつて、容易に基督の精神に立返つた基督教にする事は出来悪いが、日本ではどうでもなる場合だから、成るべく立派なものにした、してもらひたいと云ふ事でありました。夫から日本人には、之を立派にする伎倆があるかないかと云ふ事に就いても考へて見ましたが、之が支那や印度では到底出来ませぬ、夫は實際彼地の傳道の有様など見ますと、信者でも表面丈、使

宜上の信仰で、何れも仕事の出来る者はなく、本國の宣教師が形斗りの布教をやつて居ると云ふ有様ですが、日本では、之と大に其趣が異つて、最早外國宣教師がいらぬのみか、我國人でも、米的宣教師は形式ばかりで何等の効績をも收むる事はできぬが、基督の精神的の信仰は、次第に健全なる思想を有する我國の中等の社會に暗潮を漲らして、大潜勢力を有しつゝあるのです。之と云ふのも、全く我國人が眞理を尊び、虚偽や化装でない、眞正の愛國心の輩があるからです。其譯は、佛教渡來の時代と、又之を容れた聖徳太子の御心を解剖して、今の有様と比較して見るが尤も早道です。内外交通文化開發の上より、國家將來の發達を促し、民心の統治を保つ者は、佛教でなくてはならぬと云ふ見識を立て、在來の慣習に逆ふ點あるにも關はらず、斷然佛教を容れた聖徳太子は、其眞理を愛する點に於て、又國家を愛する點に於て、どうしても反對派より數等勝れたるものであると云ふより外はありませぬ。私共も聖徳太子の御考と同じく、眞理を愛する念で、眞正に國家を愛する念になり、どうしても我國に於て、將來國家の發達をなさしめ、民心を振作せしむるものは、純粹の基督教でなくてはならぬと信じ、幾多の反對、偏狹阿世の妨害あるに關せず、之が宣布

を圖る譯であつて、佛教の如きは千數百年の間、我國家の開發を助け、民心を維持し來たつた其功勞は實に感謝の他はありませぬが、今日は時勢が一變して、最早佛教では國家の開發を助け、民心の統治を計ることは覺束ない、否、覺束なくないにしても、夫よりも一層上等のものがある以上は、夫に由り、夫に譲るべきが當然であると思ふのです。

夫から我國將來の宗教が眞正の基督教でなければならぬと云ふ事は、澤山の理由があります。先づ手近に事實上の現象から歸結して見ますと、大畧左の二つの理由になります。第一は、御承知の如く、社會開發の根底になつて居るものは、宗教で西洋文明の由來する大本は、全く基督教であります。そして此文明を保持漸進せしめ、社會民心の壞亂を支へて居るのも、矢張基督教です。どうです、カントや、ヘーゲルに神と云ふ信仰がなかつたならば、其哲學も其人物も、何等の價値のないものになりはしますまいか。夫から又全體の歐米人に神の信仰がなかつたならば、其結果は、世界に如何なる現象を生ずるでしょう。か我が國では、維新以後一切の文明を西洋から輸入しました。彼の憲法の如きも、欽定憲法で、日本で拵へたものではあります。

が、矢張伊藤さんが西洋から眞似て來たので、此通り一切の文明は歐米から輸入しながら、其文明の種であつて、しかも其文明の支柱となつて居る宗教を容れぬと云ふのは、誠に譯の分らぬ話、否、寧ろ危険な次第であります。全躰文明と云ふ者は、器械の如く、一時に製作し得る者でなく、生物的に漸次生長したものであることは申すまでもない所であつて、西洋の文明を生長させたものは、基督教であるから、西洋文明を持つて來て我國に植ゑ付け、之を枯死させずに益々發達させようとするには、是非基督教の力に由らねばならぬのは、尤も見易い道理です。彼のリンコンやグラッドストンの如きは、眞正の基督教信者で、尤も確固たる信仰を持つて居た人ですから、あれ丈の活動が出來たのです。夫を世間では、動もすれば彼等の信仰は政略的で、國民の意を迎へる爲めであるなど申しますが、吾々は、リンコンやグラッドストンが、虚偽や政略的に動いて居た、阿世家とは信ずる事ができぬのであります。迷信は固よりいけないが、信仰と云ふものがなくては、何にも出來るものではありません。……ハ、そうです。私はどうしても汎神論的の信仰ではいけない、一神的の信仰が尤も必要と信ずるのです。……兎に角西洋の文明を持つて來た以上は、其種であり、又夫を支

持する大綱である宗教をも入れねばならぬと云ふのですが、其宗教が所謂基督教ではないかぬので、真正の基督の基督教でなくてはならぬ……まア世界の地圖を開いて御覽なさい、文明國は皆基督教國で、佛教國で文明國とも云ふべきは日本ばかりですが、最早佛教の力で、日本の文明を支持開進せしむる事は出来ぬと云ふ現象が段々事實上で發見される、ではありませぬか、佛教も古の文化には大に力があつたものに相違ありませぬが、今日の文明はどうしても佛教的でなく、基督教적であると思はれますが、夫れとも將來佛教國が、其力で基督教國を壓するようになるかも夫は分りませぬ、夫から又日本で佛耶兩教に超越した新な一大宗教を作り出し、其力で世界を壓伏し、日本が世界の統一者となるかも知れませぬ、そう云ふ事になると眞に結構で、誠に壯快な話ですが、吾々の常識では、歐米の諸國が亡び、基督的思想が斷えて、新な思想が人類を統一し、日本が世界の王になると云ふような事は、どうしてもまだ信じて得られぬのであります。

夫から第二は、こう云ふ事實です、全躰眞理と云ふものは、學者の重箱を積んだような議論に有るでもなく、夫れかと云うて、無智の細民や器械の如き貴族社會の思想

に在る譯でもなく、全く常識を有する中等社會の人々の多數の信する所に在るの、貴族や細民の思想は概して迷信で、學者の議論は多く偏僻に失し、健全なる思想、眞正なる信仰は常に中等社會に在つて、是等中等社會の多數の信する所が即ち眞理で、最終の審判最後の勝利であるのです……私は貴下方に、眞正の基督の信者が、どれ丈の品格を持つて居るか、又將來どれ丈の信用を社會に得て、どれ丈の影響を國家に及ぼすか、否及ぼしつゝあるかと云ふ事實を調査して貰ひたい……其處に働いて居る大工は、彼は埼玉の者で、最早二週間私の所に來て居りますが、朝は日が出る、と仕事にかゝりまして、夕方は日の入るまで働き、酒も煙草も吞まぬから、午後の休みもなく、仕事の捗取る事は、彼の堀内の御祖師様などへ、威勢克く參る大工等の二三倍も出來ますし、夫れから野卑な言語や俗歌など、諸ふこともなく、時々は讚美歌の聲を聞く位で、つまらぬ事を言うて子供にからかふ様な恐れもなく、日曜には朝から休んで、悠々として居るのです、私の知つて居る者に、このやうの者が二三百人はあります、先日、あの大工が、黒岩さんの靈魂不滅論を見て、私共にはどうしても、斯う云ふ深い理窟は分りませぬと申しましたが、理窟以上の事を理窟で説明

しても分る筈はありませぬ。理窟の説明は分らぬでも、自分には確な信仰を持って居ると云ふ事は、宗教は哲學でもない、學者の議論で左行し得るものでもない、と云ふ反證です。そうして夫が迷信かと云ふに、迷信であつたやうに悠々と着實に働いて居れるものではありませぬ……要するに常識を有する中等社會に多數の信仰を得るのが將來の宗教で、夫が實際の勢力を有するものであると同時に、將來の文明を支持累進せしめ、眞正の愛國者、眞正に社會を活動させるのは、素行の嚴正な着實に働く中等の人々であるので、そう云ふ人々が眞正の基督信者に段々現はれて來ると云ふ事實は、頗る研究を要すべき問題であらうと思ひます。

……佛教でも、君等のような主義でやつて往つて、着實に働くものが澤山出來たらよいではないかと言ふのですか。成程夫はよいです、そうなれば理想的になつての交渉で、丁度釋迦と基督と出遇つたやうなもので、決して野卑拙劣な争はありませぬ。併し又好加減な曖昧な折合もしますまい。どちらか一方が一方に譲つて服従する事になるでしょう。其時釋迦が基督に譲るか、基督が釋迦に服するかは、随分疑問であります。が、將來の事實は、着實な信者の澤山、即一人でも多い方が、矢張勝つ

事になるのです。

成程現在會堂など持つて居る所謂基督教は、將來どうなるかと云ふのですか。彼等は遠からず消えてしまひます。全株わア云ふ教派は、一時的の感情又は直接間接の利益上から得た信者が多いのであります。から會堂建設の當時は、さしも繁昌を極めて、牧師などにも澤山な手當を給して居たのが、今では堂内雀羅を張り教師の手當も有るかなしかと云ふ次第になつて居るのが多いのです。

此内も、或佛敎家に話して笑つた事ですが、全株耶蘇敎の事を佛敎者等が攻撃するは間違で、決して其急所を衝き正鵠を射る事は出來ぬのです。其所になると、耶蘇敎の缺點は、吾々耶蘇敎信者が尤も善く知つて居るので、否知つて居るばかりでなく、一方には之と戦ひ、一方には現在社會の罪惡と戦ふと云ふのが、私共日常の本色で、之を吾々の天職と信じて居るので、すから別に諸君の手を煩はすの必要はないと申しましたのです。ア、儀式の事ですか。私は洗禮は心を洗ひ眞の信仰に入る事であると信じて居るので、別に其他の手續をせねばならぬとは思ひませぬ。又聖晩餐式などは、貧者と共に食を分つ事であると思つて居ます。尤も自身の祈禱や、毎日曜

の聖書の講義は集まつて来る者の爲めにして居ります。

◎「信仰變遷の事實」の一節

田 中 治 六

古來宗教にて、尤も變動せし部分に、其の根本的教義、即ち吾人の智的信念に在るを知るべし。此の變動によりて、或宗
教は全く根柢を失ひしもあり、或は然らざるも根柢の動搖によりて、夫より續續せられし實踐的教理にも變化を來し、
動しとせざるなり。然らば如何に成立宗教の如何に我徒は其の古來幾多の變遷を経、綱紐に關係を重れて今日に至りしな
知る、而かも其根本的教義に於て我徒を満足せしめざる點多し、隨ひて實踐の教義に於ても變改補正すべきものなしとせ
す。加ふるに社會上にては方に多數の信念動搖し、成立宗教の極めて無力なるを示せり。乃ち現代宗教の大變遷は決して
避くべからざるなり。

或者は信仰の不變不動を確信し、信仰の變遷とは自家撞着なりと主張すれども、斯かる不變信仰の存せざるは明かなり。
而してかく信仰變遷せば吾人は如何にして克く安立すべきかと、論者の尤も疑惑する所なり。されども是れ思はざるに
出づ。蓋し變遷は妄動亂舞と同じからず、其中自ら一條の脈絡貫通せるあり。即ち變遷は歴史的發達にして、突忽として
激變するにあらず、又一方には進歩と保守、理性と情性の對立するありて、自ら穩健の行動に出でしむ。吾人吾人の總
神は諸種の資料を同化して變遷發達するも、之を非とするものなきを。又夫の學術は古來常に變化せしむる爲に熱心なる研
究を應ずるものなきを。是れその秩序ある發達にして、大要その方向を一にすればなり。特に信仰の原理は學術の研究と
異なりてしむる容易に變ずるものにあらず、學術は日進月歩すとも、信仰に至りては此に如く考察し來れば、信仰の變遷は
人生を指導し得べきなり。況んや他方には尤も常住の相ある實踐的教訓あるをや。此の如く考察し來れば、信仰の變遷は
決して吾人の安立と相容れざる者に非ず、却りて此變遷によりて吾人の進修不息の念に大満足を得るなり。(「新佛教」
二卷の一號)



田中治六

私は神經痛で、昨日より臥床して居たのですが、御遠
方から折角のお尋ねゆゑ、一應押してお目にかゝり
ますが、とても十分のお話をすることは出来ませぬ
から、其邊は豫め感しからず御承知を乞ひたい……

全○私○の○考○は○新○佛○教○の○綱○領○と○其○輪○廓○丈○は○大○躰○同○じ○な○の○で○新○佛○教○の○綱○領○は○至○極○同
感○で○あ○る○の○で○私○が○従○來○の○佛○教○が○腐○敗○に○腐○敗○を○重○ね○形○式○の○末○に○奔○り○迷○信○の○淵○に
沈○ん○で○一○方○に○は○未○來○的○厭○世○的○の○端○極○に○陥○り○他○方○に○は○新○禱○的○や○動○物○崇○拜○的○な○の○
甚○し○き○邪○道○に○墮○した○の○を○見○て○是○非○共○之○を○革○新○せ○ね○ば○な○ら○ぬ○と○思○ひ○立○つ○た○の○は○最
早○二○十○三○年○の○昔○で○爾○來○今○日○ま○で○引○續○い○て○こ○う○や○つ○て○居○る○の○で○日○蓮○宗○の○者○共○か
は○謀○反○人○と○云○は○れ○諸○宗○か○ら○憎○ま○れ○世○間○か○ら○は○あ○だ○ま○れ○て○種○々○の○困○難○や○追○害○に○も
遭○遇○し○て○居○ま○す○別○に○之○れ○と○云○ふ○成○功○も○あ○り○ま○せ○ぬ○け○れ○と○漸○々○私○の○主○義○を○信○じ○て

献身的に働く者が出来て、間断なく活動して居るのです。私より後に北島道龍や水谷仁海等が革新を企てましたが、今では音も沙汰もなく、水谷の如きは死んでしまつたそうです。夫から大道長安が新佛教と云ふものを開いて、観音様を拜むとか申しますが、随分妙なものですなア……私の革新と云ふのは、迷信や腐敗を勦絶して、眞の宗意を發揮しようといふので、此點では他の宗派は固より日蓮宗そのものを排斥するので、今日の所謂日蓮宗が、迷信に陥り形式の末に奔り祖師の本意に背いて居るのは、争はれぬ事實で、他の宗派より腐敗が甚しいとも決して劣りはせぬのであります。夫で、其の腐敗の點は總て革新せねばならぬと、共にその固有の宗義に至っては却て大に擴張せねばならぬ宗義に於ては全く復古を執るので、佛祖の主張は千古不變の眞理であるから、之を革新するの餘地もなければ、吾々の力でやり直した所で、夫れ以上のものが出来る筈はないのですから、種々の撥入的腐敗や後からくつゝつけたつまらぬ形式を取除いて、釋尊や祖師の本意に復すればよいので、現在の形式に流れ腐敗して居る佛教に對しては、頗る猛烈の革新主義を執るのであるが、宗義の上では純然たる復古主義なので、一方から見れば新佛教ですが、其實は

全く眞正の古佛教に歸るのであるから、私は現在の佛教をば舊佛教とは謂はずに、偽佛教と名づくるのであります。あなた方の迷信を勦絶し、佛教の健全なる根本義を執ると云ふのも、或方面から見れば、全く之と同一意味でしよう。又祖師が四箇格言を提げて立つたのも、矢張此意味で、形式に流れ、迷信に陥り、腐敗せる偽佛教を排斥して、佛教の眞髓根本義に歸らうと云ふので、四箇格言は決して立教開宗の方便手段として、殊更に唱導したのではなく、今日あなた方が舊佛教は迷信的だ、厭世的だ、祈禱的だと云ふのと同じく、形式で實質を亂り、迷妄で眞理を隠して居る諸の愚論妄見を訓誨したので、今日では日蓮宗もやゝ其の仲間入をして、五箇格言を作らねばならぬ様になつて居るので、すから私は現在の日蓮宗をば改革して、祖師の本意に回復し進で佛教統一の標準を世に與へたいとおもふので、日蓮宗ではなくて、全く日蓮主義なのであります。あなた方が佛教の根本義を尋ねて、之に據て立たうと云ふのは、大に結構ですが、今一步を進めて、此日蓮主義と云ふものを一つ研究して見たならば、大に得る所があらうと思ふのです……元來合理的と云ふことは、祖師の毎に唱道された所で、日蓮の云ふ所と雖も、道理に協はぬ事は決して用ゐ

るに及ばぬと申されてあります。尤も其の合理の標準と云ふものは、あなた方の所謂標準とは異なるので、あなた方は、科學や哲學を研究し、あなた方の力で立てた標準であります。そこになると日蓮主義の標準は、世界空前の偉人が、あれ丈の研究に由て得たのを真理と信じ、普通の人間で少々の研究位をしたとて、到底追いつくものでないと云ふことを自覺して、直ちに佛の言説そのものを以て、合理不合理を判定する標準と爲すので、人間が何程研究して見た所が、佛の所論以上に真理を見出すことは、殆んど不可能と云うてもよいのです。安全だと、私共は思ふので、所へ迷ひ込むよりも、佛の言を其儘に信する方が却て安全だと、私共は思ふので、而して佛の言説はお經で、經にも段々高下があります。其尤も高い道理を言ひ現はしたのは法華經ですから、法華經が即ち最高の真理、最終の審判者と云はねばなりません。それは佛の自判を秩序的に辨認すれば、何の苦もなく解かることでもあります。夫から又大乘非佛説論などは、言ふに足りません。且つ全く別な事になります。又大乘佛説非佛説に對する私の考は、疾くに定まつて居るので、追々發表する積りですが、今假りに大乘を非佛説と見ても、こう云ふ方面から見れば、法華經

の價値には少しも變動はないのであります。先づ佛敎が宇宙の真理を究め得たもので、其佛敎の内では、法華經が尤も高い道理を説いたものであるとすれば、最高の道理は、作者説者の誰たるに由つて變ずる譯のものでないから、法華經が龍樹の作であらうとも、劇史であらうとも、些とも構はぬ理窟になるのです。……夫から法華經が佛敎中で最高のものであると云ふ事は、四十餘年未顯眞實、十方佛土中唯一乘法無二亦無三等の語でも分りますが、夫よりも、天台大師の判釋の通り、元來宗敎と云ひ、最高眞理と云ふものは、何れにも順應し得る所謂普遍的で、しかも統一的でなければならぬ者で、或者には適し、或者には適しないと云ふようではいかぬ者です。すから淨土門にせよ、大日經にせよ、或一類の機根の爲に必要な所説ですから、統一的とも普遍的とも云はれないのです。夫から難を厭うて易きに就くと云ふ事は、人情の常ですから、兎角淨土門には入り易くあります。困難を堪へ忍ばねば、人間らしい人間になる事も出来ぬのです。況して成佛などは思ひもよらぬので、淨土門が引入の方便であると云ふ事は、誰れが考へても直ぐ分る事です。此點は、祖師も切言せられてあるのです。夫で法華經の所説が、佛敎の最高なる道理であると云ふ

ことは極めて明白な事であなただ方の尋ねんとする佛教の根本義と云ふのも、甘くふつつかれば茲に歸着するのです。法然や親鸞は宗教家としては眞に立派でしようが、道理と云ふものを軽く見たのは甚だよろしくないものであります。そこで又其の合理的と云ふ事は尤も必要ではありませんが、單に乾燥な理窟ばかりでは仕方がないので、道理の中に血が通って居らねばならぬ、所謂生きた道理で、實際に活動せねば役に立たぬのです。……一方には道理の旗を押立て、邪偽の徒と戦ひ、一方には熱血を濺いであらゆる迫害と争つたのは、日蓮上人が佛教固有の智と慈とを圓満に成功せられたのであります。……道理と熱誠之が私の所謂日蓮主義の根本表帳です。……祖師の出所迫害主張時期等が法華經中に豫言してあるのと一々符合するのは、畢竟上人が法華經即ち眞理の活現たるの證であります。夫で私の希望は、此日蓮主義を世界に流布させると云ふので、一天四海皆歸妙法の目的を達し、日蓮主義で世界を統一し、さうして我日本は最高道義の護持者となり、中心とならねばならぬのです。……夫から序に一言注意して置きたいのは、あなたの方でも、世間でも、現在の日蓮宗と日蓮上人そのもの、主義とを混合同一視して、やれ祈禱的だ

とか、全く迷信的だとか云ふのですが、あれは甚しい誤解である。祖師は病氣の時には、自身醫者にかゝられたこともあり、又弟子等の病氣の時に、醫者にかゝれとて勧めたことも確な事實であつて、病氣を祈禱で直すなど云ふ様なお考はなかつたのである。夫から今一つは、祖師が各宗の高徳方に向つて、對決を求めたのを、己の名を貪る爲めに喧嘩を賣りかけたのだなど云ふものがあります。夫は全く當時の事情や祖師の人となりを知らぬからである。祖師の時代には、政權も教權も幕府に在るので、一宗を開くとか、舊慣に異なつた説を唱ふることは、眞に困難であつたのであるが、さりとて、他の誤つて居るのを黙々に附し、自分の意見を其儘になすも、道の爲め、法の爲め不本意であり、遺憾であるから、一片の誠衷止むなく對決を求めて、其眞偽正邪合理不合理を明にして、天下に嚮ふ所を知らしめたいと云ふ、斯道に忠實なる熱誠より出たのであるから、唯今流行する好奇的の立會などは、全然其動機を異にして居るのである。然るに當時各宗の高僧方が、痛く其對決を迷惑がつて、遂に實行の出来なかつたのは、眞に遺憾であつたのです。……ハ、日蓮主義をばどう云ふ風に實行してゆくかと云ふのですか、夫は私は既に二十年前から立正安國會

と云ふものを設けて同志の者を糾合して居りますが今日では真正に献身的のものも大分出来ましたが之から追々に之を擴張して行くはこう云ふ信徒を築いて一つの模範的の社會を造つて見たいと考へましてその殖民用の土地を得たいと思つて先年豆州駿州地方を捜しましたが何分適當な地がないので困つて居りますが富士の裾野に可なりの所があるそうですから一つ實檢する積りですが先づ大約一里四方位の一村を設け其中に種々の工場も農場も作り學校なども設け實業を中心として政治經濟衛生教育等一切の方面に日進主義を實施して行くので夫が甘く往つたら第二第三と漸次に増加して全社會に標本となつて行くようにする考へです就中教育の方面に力を入れて幼稚園より今一層根本に立入つて乳兒の時よりの養育に氣を付け生れて二ヶ月位たてば之を規律的に乳兒園にて養育し哺乳の時間分量まで一定の法に従ふようにしたいと思つて居るのです夫と又猶進んで一つ政黨即ち日進主義の政黨を造り大義名分を主義とし尤も進歩したる社會主義と尤も健全なる愛國主義とを融和した方針に由て大に運動したいと思ふのです政治と宗教は全く別物だと申すものもあるかも知れ

かんが日進主義の信者が政黨を造つて日進主義を政治の上に實行するのは些とも故障はないので、爾師も我信者は政治の方にも働いて完全な政治をせねばならぬと説かれてゐるのです私の雜誌「妙宗」も其内に保證金を納めて之から政治教育經濟等社會の時事問題に就いても充分意見を陳べる積りです……要するに私の説は宗法に於ては復古的態度即ち佛教最上の根本原理祖師の眞髓に立歸り制度の上に於ては時代思潮より今一步を超越した最進歩の態度を探りて常に社會より數歩先登に立ちて進み而して全躰の實行手段に於ては全く退嬰主義を破して進取的否寧侵略的態度を探り且つ又政治教育實業あらゆる方面に向つて活動しようと思ふので此社會的方面の實行殊に慈善等の事業に就いては宗派教派の異同を問ふか如き狹隘の考を頑守する必要はありませぬから教義は格別が社會的の事業に就いては基督教徒でもなんでも構はぬ手を携へてやるのです……

イヤ宗教の雜誌も澤山出ますなア幾百位あるか知れませんが私の見るのは「無盡燈」と「精神界」「信仰界」夫から「新佛教」まアこの位なものです「無盡燈」は研究的で成功に幾く「信仰界」は布教的で熱心な處が貴く「精神界」は千篇一律ではあります

に角確に主義と云ふものを持つて居るから見られるのです。……他の雑誌はどうも……兎に角私は新佛教の綱領は賛成なので、私の従来からの考と其輪廓は同じなのです。唯其のあなた方の執る所の根本義と云ふのと、私の信ずる真正の佛教の本義と相一致するや否やは疑問でありますから、十分討議して見ねば分りませぬ。成程一言に謂へば普遍的汎神觀であります。其解釋の仕方には種々ありますから、之は孰れ後日の事に譲つて置きましょう。願ふ所は、あなた方に、誠實をこめた研究を日蓮主義に試みてほしいのです。あなた方の意氣は、誠に敬服します。定めし口蓮主義の研究によつて、他のものよりも一層大なる獲物があらうと信じますから、是非にお勧め申します。……折角のおいで之處、生憎病中であつたらぬ話で、誠にすみません……。

七字唱法華。六字念彌陀。執若十字架。縱橫張網羅。
浮屠談地獄。耶穌說天堂。小兒雖無智。猶且笑荒唐。
小兒所笑。八十翁信之。是故謂老頑。守株不能移。
迷信不知理。悟理心便遷。信心與真理。相契金石堅。

無憂樹下彩雲開。師子一聲轟似雷。
白馬駭過過管漢。青龍護法到蓬萊。
慈恩廣大治溟海。妙相端嚴現瑤臺。
灌頂醍醐流不竭。真如月照日東來。

釋宗演



元來宗教の立脚地と云ふものは絶対界ですから、言説の及ばぬ所、理窟以上のものであります。或程度までは之を解釋し得るもの、否、解釋し説明せねばならぬものです。既に解釋する以上は、合

理的でなくてはならぬのは勿論です。そこになると、一神論ではどうも満足の出來ぬ點があります。どうしても汎神論でなくてはならぬと思ひます。夫から又汎神論にも種々あります。佛敎で云へば、唯識も三論も、矢張汎神論ではあります。が、まだ完全でない、完全なのは統一的汎神論で、一神論と云ふも、畢竟汎神論の一部と見做して差支ないかも知れませぬ。世間では一神論と汎神論とを調和して、新なるものを作らうとか、或は一神論汎神論以上の根底を詮鑿して、新宗教を立てようとか云ふものもあるようですが、調和と云ふ事は、随分曖昧なもので、又汎神論から見れ

ば、調和の必要はないのであります。殊に汎神論以上に根底を求めると云ふ事は、出來ぬや否や、頗る疑問であります。夫で教義の方で言へば、將來何時まで往つても、佛教の根本義即實大乘の教理の根元たる統一的汎神論で差支ないと思ひます。又此統一的汎神論は、現在でも將來でも如何に科學哲學が發達しても、矢張合理的のものであると考へるのです。

夫から其の信仰ですなア、信仰と云ふものは、全く直覺的ですが、矢張合理的に自ら求めて得た信仰でなくてはならぬので、左もないと迷信と云ふような事になつて來ます。夫で信仰を求むる方法と云ふものは、どうしても他力的で頭から注入的に傳説などを信するよりは、自力主義で靜慮に由り真理如何と自問自答する方がよいと思ひます。なア自ら覺悟して信仰を求むると云ふ事は、困難のようですが、夫も決して今の所謂座禪などの様な形式に由る必要はない。前に落着いて常識的に考へればよいので、誰れでも出来る話です。……全躰人生と云ふものは、自ら求めて得た確乎不動の信仰を基礎として働かねば、なんにもならぬもので、働いては居ても所謂盲動で、活動ではないのです。夫ですから、醒醒したり、失望したり、つまらぬ事に

不平を起したりして、自分も苦み、人をも苦めるような事になつて來るのです。

大躰私共の考は、新佛教の綱領と餘り異なつては居らぬのです。佛教の根本義を執ると云ふ點は、固より自由討究と云ふことも、元來教權主義を墨守せぬと云ふのが禪の本旨で、自己の力で信仰を求め、真理を覺悟すると云ふものは、全く自由討究主義であるのである。

要するに宇宙は一大神秘で、鳥の飛ぶのも、花の開いては落つるのも、皆神秘である。萬事萬物皆神秘ではあるが、此現成の神秘を神秘と覺るのが必要で、之を覺るには、自力的で併も合理的の者を指導とせねばならぬは、勿論だが、されど道理そのものが直ちに信仰ではないので、信仰は矢張直覺的で神秘的であつて、真理以上のものであるのです。

どうもその迷信の流行と云ふ事は、實に困つた者ですなア、そうして殊に高貴の上流社會に甚だしい古風な咒咀など云ふような迷信の、猶盛に行はれて居るのは、驚くべき次第で、此迷信と云ふものを一つ剔絶せぬと、どうしても健固な社會は組織されないもので、或は投機的になり、或は厭世風になり、或は陰險になつて不健康な

病的の社會になるので、安全と云ふ事が期し得られぬのであります。私は其の將來の布教上に就いては、こう云ふ考を持つて居るのです。まづ假りに教會的方法とでも云ふべき者で、過去及現在の如き本末制度とか師檀の約束とか云ふ如き關係をば脱出して各自に自己の信ずる所を傳道して、夫を信ずるもの丈が自然に其人の下に集まると云ふ様な風にするので、今までは寺院の方が主で、人が附屬物になつて居り、僧徒と云ふものも家の關係から來たもので、眞正の信仰と云ふものは殆んど成立して居らぬのであります。併し今急に此の本末制度等を打破しようと云ふのではありませぬ、全躰こう云ふ習慣的の者には、惰力と云ふものが起つて却て社會を攪亂する恐れがありますから、夫は其儘にして置いて、自然に自ら倒れるのを待つようにし、自分の方が抜け出で、自分の所信を實行せねばならぬのです。から、私も相當な後任を得た暁には、獨立でやつて見る積りです。勿論現在でもそう云ふ考でやつて來てるのであります。が、矢張り本山の事務とか、僧堂の世話などがあつて、思ふやうに往かぬ事があるのです。……夫から其新佛教徒

のような所謂優婆塞と云ふものは、家庭を造ると云ふ事が即ち佛法で妻帯せぬのが却て違法だが、此僧侶と云ふ専門的の宗教家と云ふものはどうしても妻帯してはいけません。ア、どうも家族と云ふものがあると、充分に布教など出来るものでありませぬ、全躰繫累と云ふものが一番宗教家の大敵で、宗教家を墮落させるのは全く繫累です。そうして繫累の尤も大なるものと云へば、妻子に越すことはありません。せぬ。或は妻子があつても、夫に繫累されぬ位にならねばゆかぬと申すものもありません。が、夫は人間で出来る事でもなく、又人間の道ではありませぬ。既に妻子と云ふものが有る以上は、愛情をも盡し、面倒をも見て世話をせねばなりません。が、その云ふ事をして居ては、眞正に宗教上の活動は出来ぬので、つまり佛教家には、妻子をもち團欒の家庭を作ると云ふ餘裕がないのであります。から、夫を強ひてやれば墮落するより他にしかたはありませぬ。夫からその眞正に活動し得る宗教家、即將來の僧侶の養成法に就いては、私はこう云ふ考であるのです。唯今では各宗共、廣うて學林を設け、普通學と宗旨の學問とを併せて教授して居りますが、われは大なる考へ違ひで、殆んどためです。ア、全躰宗

教家と云ふものは常に世間よりは數等進んで居らねばならぬのであります。今のやうなやり方では普通學の方は普通の學校には及ばず、夫がといつて宗旨の方もかちりかけて十分にはやれず、殊に強制的に注入的に一定の授業を受けて、或程度を卒業すれば、夫で直ちに寺をもたねばならぬ、既に寺をもては可成檀信徒の機嫌を取つて寺の維持をせねばならぬと云ふ次第で、大事の布教傳道は思が自分と寺とを持ち扱ふに困つてをる宗教家と云ふよりは、寺の番人と云ふ風になつて來てをる。夫では眞に仕方がないのです。ですから私共の方では、出來もしませんが、別に學林などは一もないのです。其のかはり見込のある者は世間の學校へ出す、又自ら進んで研究しようと思ふ者は、此僧堂へやつて來るので、夫等は、大抵一通の學識も備へて居るものです。ですから決して拒まずに開放主義を執て、自由にやらせて居るので、現に此寺に居るのも六十五名斗りあります。中に外國人も居ります。夫で私共は普通學の方は、全然之を世間の方に任せて仕舞つて、其方で十分素養があり、猶自ら進んで宗教家になりたい、研究がしたいと思ふ考のあるものが、自ら信する所、自ら信する人に就いて勉強すればよいと思ふのです。そうすると或は宗教家になるも

のは少なくなつて、住職のしてもなく、寺も廢れて仕舞ふと云ふものもありません。夫は些とも構はぬので、つまりぬがらくた坊主が千人あるよりは、眞正の宗教家が一人ある方がましで、もちあぐむような寺は廢れた方が却て得策なのであります。本山一つを維持する爲め、又本山の役僧等が、我儘をする爲めに、吸收主義を執つて、金を集めると云ふ點には、末寺や信徒の關係などは尤も大切なもので、一ヶ寺でも守り立て、行かねば不利益であります。宗教の能事即宗教の目的主義と云ふものは、本山維持、寺院の壯麗などと云ふ事とは、自ら異なる點があるのです。現在の本山や其他の寺院僧侶等が滅亡したり、減少したりしたとて、夫で宗教の不振、佛教の衰退と云ふべき譯ではないのです。

此の間も、先日迄東京大學の講師であつた英人がやつて來て、どうも科學の方は益々進歩するのに、宗教の方は却て退歩する傾がある、宗教の必要と云ふ事は分つて居るが、其退歩的なのは感心せぬ、全株宗教の退歩するのはどう云ふ譯だらうと云ひますから、私はこう答へたのです。元來宗教殊に佛教などは古き以前から最早其達すべき頂點まで進んで居るので、もう夫れ以上進みも退きもせぬのであるが、科

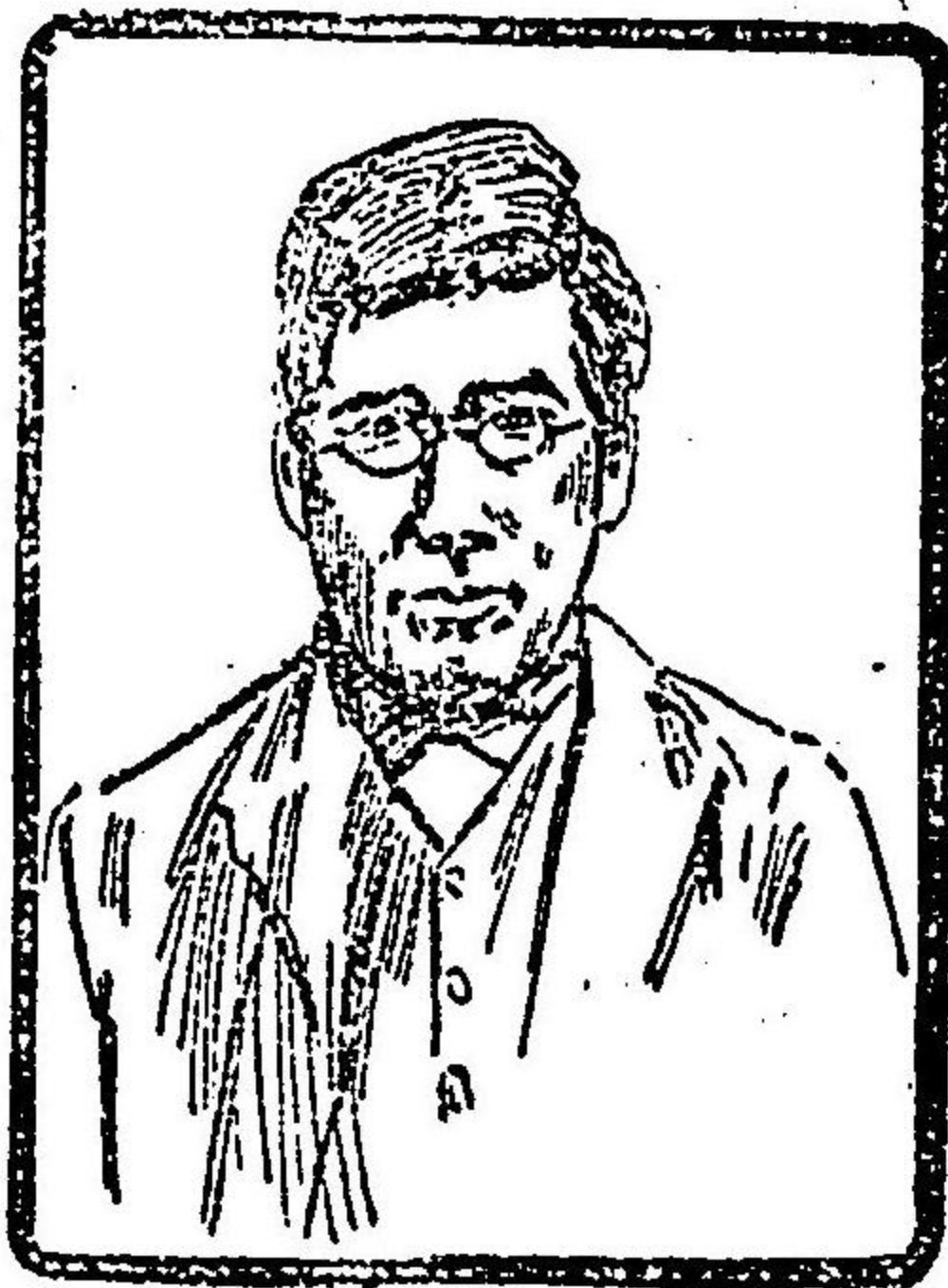
學の方はまだ途中であつて日々進みつゝあるから其の進む方の側に立ちて見れば一方は退く様に見えるのは當然だが其實決して進みも退きもせぬのである又科學が幾ら進んでも宗教以上に進むことの出来るものではなく結局同一の頂點に達するか夫れ以下に留まるかに過ぎないのである尤も宗教そのものは既に頂點に達して居るとしても其解釋の方法は昔の思想に順應して居たものであるから今日より見れば少し可笑な點もあらうが其は時代思想に合はして改正してもよい又改正すべきものであるが解釋の方法は改正しても宗教の實質には決して影響するものではないと申した所が先生も左様であらうと云うて歸りました。夫から其の宗教と教育との關係ですなども教育の根底に宗教と云ふ考がなければ随分怪しなものになりますなア夫から又倫理を以て宗教に代用しようなど申すものもありませんが所謂倫理と云ふものは世間で人間相互の間を連絡せしむる法則で倫理即宗教と云ふ事は宗教を餘り淺く見たもので宗教が倫理の根底になつて宗教の内に倫理があると云ふ事は云へるが倫理以外に宗教を認めぬのは間違であるぞうして又倫理と云ふものゝ根底はどうしても宗教から出て來ねば

浮草のようなもので一向倫理の倫理たる功績を奏することが出来ないものと思ひます。

◎「進脩不息」の一節

田中治六

進脩不息の精神は如何なる眞理を根底となすものなるかを一言せしめよ。惟ふに吾人が理想によりて永遠に進脩開展すといふ上は、世界には道德的秩序あり、特に善因善果の法則森嚴に成立せることを信せずばあらざるなり。吾人は實にかゝる世界に於て、自己の天分を全うするが故に、大安心の地に住することを得るなり。否せば自己の本分を盡くすといふことは、畢竟無意義に歸せざるを得ざるなり。特に個人の短生涯は、眞に電光石火の間のみ、若しその事業にして此生涯と共に終らんか、吾人の爲し得る所幾何かある。然るに個人は社會の進歩開展と密接の關係あり、前者の進脩爲する所は、實に後者の大潮流を成す所以のものなり。是に於てか個人の所業は決して零散零消することなく、自然の法則によりて綿々連続し、彼は茲に永遠の生命を得るに至る。更に進みて此種の社會は則ち汎神の實在の顯現にして、その秩序法則は實に宇宙の光輝たり眞理たるを知らば、吾人の進脩不息の精神の根底が那邊に存するかは明瞭なるべし。抑々生々化々ば世界の道理にして、殊に生物は皆に身体上のみならず、亦精神上も、皆此理に動く、然らば吾人人類も亦此則の外に出でんや。但し彼等は知らずして然り、吾人は之を自覺するを異なりとするのみ。進脩不息の精神は洵に此自覺に基けるなり。(新佛敎「四卷の一號」)



中村新次

全躰何事でも自分で親しく實驗せぬことには、それが果して如何なる性質のものであるかと云ふことは分り難いもので、従て其れに就いて他より話をされても、其眞味は到底解し得らるゝものではありませぬ。丁度盲者に色を説くことの出来ないやうなものです。宗教と云ふものは特にそうである。宗教に秘密的方面があると云ふのは、この意味合から申すのであります。夫で自身親から宗教的態度を實驗し、その神秘的消息を窺うたものでなくては、宗教を談ずる資格がないと云うてもよいのです。我邦の學者は大抵宗教には門外漢で、宗教の事には殆んど容喙するの資格がないと云ふ有様であります。それで、偶々宗教を説くものがあつても、どうもその肯綮に中らぬ、恰も群盲の象を評すると云ふ所爲に類するのは、誠に止むを得ない次第であります。そこにな

ると、西洋の學者は頗る異つた點があるので、小供の時分より、内は家庭で、外は教會及び社會で、宗教的に感化教育されて居るから、宗教的趣味を有して居るのであります。殊に英米の學者の多數は、安息日は總てその事務を抛り、研學を廢して、教會に行き、其の心を清淨ならしめ、四圍の物情は、悉く其態を改め、寺院の鐘聲を始め、蒼穹の色に至るまで、彼等に安息日風の特色を感受せしむると云ふ工合で、其感化が如何に深く、心魂に徹して居るか、と云ふことは、申すまでもないことです。夫で、こう云ふ工合に、宗教的雰圍氣の中に教育された人は、縦合後日に墮落して、不道德のものに爲つて、又敢て德義を顧みないやうになつても、日曜になると、矢張往時を追憶して、現在の境界を悔恨するの情が自ら禁じ難いと云ふ有様があるので、宗教を以て一般人心を感化しよう、と云ふには、どうしても此境まで進まねばならぬのです。夫からその宗教的信仰の對象たる絶對は、如何なる性質のものであるかと云ふことと、夫は洵に宗教上のみでなく、哲學上の大難問であるので、かゝる難問は一言で答ふことは出来ないのですが、先づ其大要を申しますと、彼の唯物論です。なア、あれは物質を以て一切を説明しようとするのです。すけれど、其の物質其のもの

、何たるかは唯物論では到底解釋が出来ないので、それから又進化論は自然の法則や自然淘汰の方法で以て萬象の次第に進化した順序を説明しますが、何故に斯種の普遍なる法則に由りて、又何物に向つて、萬象の進化するかは、矢張説明が出来ないので、殊にこの進化説で、尤も困難なは無機物から有機物を發生せしめた所以で、此の點はどんなに討究しても、無生物から生物を生せしむると云ふことは出来ないので、夫れで現代の公平な學者は、大抵生物には物質以外の生活要素の存することを許すようになって居るのです。全躰進化論と云ふのは、自然現象を説明するには、有力な説ではありませんが、是れのみでは決して、吾々の宗教心を満足せしむることが出来ないのです。ですからスペンサー流の不可知説は、現今歐米では到る處に反對せられ、今や孤城落日と云ふ有様であるのです。

要するに、唯物論や、實驗哲學や、不可思議論は、一切宗教の仇敵で、議論が成立すれば宗教はなくなるのです。夫であるのにも拘はらず、或宗教家は、こう云ふ論を自分の味方の如く考へて居るのですが、寔に憫笑すべき次第であるのです。それなれば、絕對的實在は、之をどんな性質のものとして解釋したならば、人心の全躰即ち智情意に、尤

も満足を與へることが出来るかと云ふに、先づ注意すべきは、その智情意の全躰と云ふことで、縱令人智に満足を與へても、その情意に満足を與へねば、完全の解釋ではない、人性は智一邊のものでないからです。元來人性と云ふものは、眞善美の満足を要求するものですから、眞を満足せしむることが出来たからとて、善と美とを満足せしむることが出来ねば、之を完全な解釋とは云はれないのです。古來絕對の解釋には、先づ二大別があるのです。第一は、之を人格的、或は人格以上のものと見るので、第二は、之を人格以下のものと見るのであります。絕對を人格的に解釋する説は、基督教の專有物の如く思ふ人が多いのですが、決してそうではないので、猶太教、回教、教は固より、儒教も、波羅門教も、或意では絕對を意識的人格的に解釋して居るのであります。夫から又神、或は絕對を個體的人格として、宇宙の何處にか主座を占めて居るかのよう考へるのは、是は人智の未だ進まぬ時の事、固より取るに足らぬので、今日では普遍的實在と解せねばならぬのです。又之れを倫理的、要求から考へれば、儒教の如く、天帝と解するのが満足であり、之を宗教的要求から見れば、天父と解するが高尚なるようである併し、此等の解釋は、今日の科學的研究の結果と並立

する觀念なりや否や若し科學の研究が絕對を人格的或は人格以上のものと解するとを許さねばどうしても之を人格以下のものと解する外はない隨て其説は唯物論的不意識的のものと考えねばならぬ若しそうなれば今日の宗教や道德の上に大影響を及ぼすであらう之が實に大問題で古今學者の苦む點である以上兩解釋で孰れが尤も満足であるかと云ふとは勿論人々の氣風で異なるのであつて一概に斷言することは出來ぬが強ひて其標準を求むれば人心全體の作用眞美の要求を尤も満足せしむるに足る方の解釋を以て人は誰も眞理に近いと見做す外はないその他に絕對の解釋の道はないのです

夫で將來宗教に關する研究をやる人は此問題を第一に攻究せねばならぬ宗教が社會に何等の實益があるか將た妨害があるか等は勿論注意すべきとではあるが夫は第二の問題である況して之を全體として其根本問題を忘れてはならぬ其根本問題と云ふのは即ち宗教は眞なりや否やでぞうして其眞と否とは我に對して有益なるか如何の満足を與へるかによりて決すべきものである全躰宗教はもと安心立命のことで個人的自己に關する事である宗教の社會的影響慈善事業の如

きは是れその結果で第一の問題ではない所が實利的方面を先にして根本問題を忘るゝものが多い又或は宗教とは客觀的制度や教理を謂ふものと思ひ其主觀的人心に存するとに説及ばぬのであるが宗教は人心生命精神の光明で其生命光明が發して教理となり制度となるのであるのを單に其外殼ばかり見て主觀的光明に浴することの出來ないのは未だ宗教の何たるかを知らざるのでありますそんな事では宗教と云ふ深遠の意義を味ふことは出來ぬのです今の宗教論に素人論の多いのは實に遺憾であります夫で佛教でも基督教でも何宗派でも深く之を講究して悟道の境に達した人は何宗何教の差別は没却して言語の及ばざる眞味妙理を默契し脱俗超邁其高風歛すべきものがあるのでそこまで行かねば宗教の價値もなく又宗教の何たるを語ることは出來ないので云ふ點まで到着すれば最早何宗教とか將來の宗教とか云ふ穿鑿はいらぬので云ふ工合にならねば宗教は外表的に過ぎぬのであります



浮田和氏

折角のお出ですから、お目にはかゝりますが丁度試験の採点中で、極めて多忙なので一向考へて置

く暇もなく従つて別に之と申して、お話する事もないのです。是迄澤山御訪問の様
子ですが、皆どう云ふ模様ですか、何か面白い意見でもありませんか……
私はその將來即ち此の二十世紀の宗教は大概どう云ふ具合になるであらうと思
ふので、先づその佛教とか儒教とか基督教とか云ふ現在の宗教が互に接近し融
和して結局統一調和せる新な進歩せる宗教が自然に出来るであらうと思はれる
ので、此新な宗教は佛教の方面から見れば佛教の進化したので基督教の方から見
れば基督教の發達とも云へるので、又儒教から見れば儒教の完成したものとも云

ふべきものであつて決して相衝突する者でもなく、又一が他を倒して己れ獨りの
天下になるのでもなく、殊に全然新なのが湧出する様などはあらぬので、三教と
も各々特色があり長所があるのので互に其長所を吸収しつゝ、遂に渾和して仕舞ふ
のであります。併し特色長所は相反的の者で、互に融和は出来ぬと云ふかも知れま
せぬが、夫は未熟な舊思想で、第一現在の事實が明に融和の傾向を現はして居るの
です。御承知の如く、古來日本支那で、儒佛二教が互に同化した様に、現今でも基督教
が次第に儒教化し、佛教が漸次基督教化し、或方面では頗る接近して來て居るでは
ありませんか……元來宗教の要素、即ち第一の根底と云ふものは、超自然であつて、
超道理超倫理的で、スペンサーなどの哲學的方面から推詰めた歸結になつて居る。
所謂不可思議實在なので、基督教で神と云ひ、儒教で天と云ひ、佛教で真如とか佛性
とか云ふものは、皆此超自然の不可思議實在を指すので、其寫象の仕方には、多少の
巧拙はあり、相違はありとしても、超自然と云ふ觀念は同一なので、此超自然と云ふ
觀念、即宗教の根底要素は、後來何時まで経つても決して變化し、又は消滅せぬのみ
でなく、却て益々明確に自覺さるゝ様になるであります。夫で宗教の第一要素

は、既に現在の宗教に備はつて居るのでありますから、多少其外形制度は變じても、現在の宗教が全然消滅して新なものが別に起ると云ふ餘地はあらずと思ふの、
 すが、現在の佛耶儒の三教で、此超自然の觀念發表方法の特色を見ますと、哲學的
 にはどうしても佛敎の一番よいのです。夫から又漠然たる様ではありますから、常
 識的に云へば儒敎の天とか、天帝とか云ふのも、中々穩和な考でありますから、實際
 はこれ位の所でよいのであります。次に基督敎の神と云ふ觀念の如きは、其人格非
 人格は暫く措き、兎に角吾人の活動を策勵するには、頗る有力なものであります。が、
 要するに超自然の觀念と云ふ點は一致し、又超自然と云ふ觀念でさへあれば、寫象
 の方法は別に彼此云ふには及ばぬのであります。夫ですから、一神敎とか汎神敎と
 か云ふ事は、頗る愚なもので、最早取るに足らぬ舊思想であります。万象即實在顯現
 の統一ある點から見れば、一と云ふも、可其顯現万態なる方面より見れば、多と云ふ
 も、可万象皆實在の顯現たる所を見れば、万有的と云ふも、汎神敎と云ふも、不可なし
 で、要するに一とか万とか數的に云ふ事は、至つて古い議論であるのです。夫ですから、
 超自然不可思議實在の觀念と云ふものは、大概儒敎位の所に折合うて置けばよ

いのであります。

夫から宗教は固より倫理以上、即超倫理の根底が必要ではあります。夫れとて、決
 して倫理を無視する譯のものではありませぬから、勿論倫理的要素もなくしてはな
 りませぬが、今佛耶の三教に就いて見ますと、此倫理的要素も既に其究竟のもの
 がちやんと備はつて居るので、例へば佛敎で慈悲と云ひ、儒敎で己の欲せざる所は
 人に施すこと勿れと云ひ、耶蘇敎で博愛などいふのは、最早倫理の極點であります
 から、此他に別に新なものを造るには及ばぬのであります。斯の如く、要素は立派に
 備はつて居ります。けれど、其應用の仕方が従前の様では、到底今日には満足が出来
 ぬのですから、其應用の方法とか制度とか云ふものを、漸次に改正すれば、夫でよい
 のです。全佛敎の如きは、諦めると云ふ點では、非常によい様に思はれます。が、其厭
 世的に流れる點は甚だいかぬのであります。又儒敎の如きは、其現世的なのは誠に
 結構です。又餘り現世的に過ぐると、多少退化的氣味のあるのは、大によくないの
 です。夫から基督敎でも、其社會的活動と云ふ點は、頗るよいのです。が、之れにも又種々
 の弊害もあるのですから、各々長所もあると俱に短所もあるので、孰れも、全然不合

理ではないが、又全く完璧とも云へぬので、之が互に其長所を吸収し同化せしめた時には、耶蘇教即儒教、儒教即佛教と云ふ工合になつて、よし名稱や形式は異つても其信仰の内容と實際活動の目標は全く同一に歸するので、實質的の統合融和と云ふものが生じて來るのです。勿論現在の各宗派や現在の信者が、直ちにそう云ふ工合になることは六ヶ敷ありましようが、教育と云ふ者の力によつて、大概同一の智識を得て居るものは、自然にそうならねばならぬものであります。

夫でこう云ふ工合に、現在の宗教を進化させて、其實質的の方面から自然と統一融和せしめて出來た新宗教が、將來を支配する宗教であると云ふことは、略望み得らるゝのであります。が、借ていよく、そうなるには、どうすればよいか、いつできるかと云ふことは、一寸豫測し難いのであります。若しも所謂宗教的天才でも出れば、存外早くまとまるであります。しかし、天才ばかり當にする譯には行きませぬから、先づ吾々で出來る丈の事は、やつて行かねばなりません。其の第一着手として、各教各宗派共、嫉妬と云ふ念を棄て、互に相助長して行くと云ふことが、必要なので、私共も籍は矢張基督教に置いてあるのですが、勿論基督教全部を信する

ものでもなく、又現在の儘に満足するものでもありません。夫で儒教は固より佛教でも、其理の在る點は大に尊信して居るので、基督信者であると同時に、儒教信者であり、佛教信者であると云ふのが事實なので、夫で又差支ないと思ふのです。所が或はどれか一に固まらねば信仰でない、と云ふものもあるかも知れませぬが、夫は形式的の信仰と實質的の信仰を混同した議論である。か左もなければ、西洋人の遺傳的になつて居る一神教以外に、真正の宗教なしと云ふ僻性から出た極めて狭い量見か、若しくは愚夫愚婦の注入的器械的信仰の上に就いて、云ふべき事で、多少考があつて自ら求めて信仰を得て居るものには、そう云ふ批難を加ふべき餘地はないのであります。

元來東洋人は、異宗教を調和し同化する、と云ふ長所があるので、此點は大に思想の發達進化を助け、社會の整理を爲すに、余程都合がよいのであります。そこになると、西洋人はどうも頑固で、一神教の他に真正の宗教なしと堅く執つて動かぬのであります。併し此頑癖は追々破れますし、又破らねばならぬのです。最早二十世紀には、こう云ふ頑癖を固持するの餘地は少なくなつたので、既に先年シカゴの宗教大

會と云ひ比較宗教學の發達と云ひ着々此頑癖を打破して世界宗教の調和統一の準備を爲しつゝあるのです。從來は國家と云へば必ず敵對の意味を有し實際に於ても又攻伐を本分として居りましたが近來は國際公法で漸次相近づき相助けると云ふ傾が現はれて來ました。夫と同じく宗教も異宗教は互に相反抗的態度に在つたのが漸次相近づいて人類の統一協合を求むる様になりつゝあるのです。併し習慣とか情力とか云ふものがあつたから西洋は矢張基督教でゆき東洋は佛教や儒教でゆくでしようが其將來の基督教たり佛教たり將儒教たるものは現在のものとは大に異なつて一層進化したものになり而も其内容は大略同一に歸するようになるであらうと信じられます。之は單に一時の臆測に止まるのではなく、史的考證に由つて見ても又現在の事實上の傾向より觀察して見ても是非そうならぬはならぬのであります……

どうもその生存慾の盛な青年などには基督教の方が同感を引くようです。有神論とか靈魂不滅論とか云ふものはどうしても生存慾の盛なものを動かし易く入らしめ易いようです。所が人が次第に老熟して來るとどうも基督教では不満足

を感じて來るのです。そうして生存と云ふことに倦怠して來たものは兎角佛教の思想がよく合ふようになるのです。

イヤ丁度今がその思想界の過渡の時代ですから總べてのものが動搖して一向落着かぬのです。どうしてもこう云ふ時代には、色々の醜態が暴發するものです。併し追々建設せられ統一が出来るでしよう……どうもその未だ教育の根本が充分堅固に立たぬようではいかぬのです。勿論今日の有様で行政上の處置としては宗教と教育とを明に區別せねばいかぬのです。併し私立學校や其他で宗教的の教訓を施すと云ふ事は固より必要なので、宗教を全く排斥しようとするのはいかぬのです。實際の事を云へば教育は矢張其根底を宗教に置かねばいかぬのです。尤も彼の教育勅語と云ふ者は、われは單に倫理的に止まるものでなく、一種の宗教的資質を帯びて居て、人心を支配する上に、大なる權威があるのです。我國の忠君と云ふ事は、理窟から起つたものでもなく、倫理の上から來たものでもなく、皇室と云ふ觀念は最早神實在と云ふ宗教意識の對象と同一な、不可思議的の權威を有するようになつて居るのです。それ故に彼の勅語を甘く解釋すれば頗る價があるのですが、

れを平凡に解釋したり、夫れかというて附會的にやつたりすれば、大に効力が薄く
なりませぬア……
如何にもその經驗的と云ふとは大によいので、私も學術上では大にコントを尊敬
しますが、そのコントの説には、大なる矛盾があると思ふのです。經驗的くと申し
ますが、其經驗的の議論に、直ぐ法則とかなんと云ふとを持ち出すのです。全体法
則と云ふことは、われは現象以上、經驗以外であるのです。から、矢張不可思議の方面
に踏み込んで居るのです。どうしても其不可思議と云ふことを、全然取り除いて仕
舞ふと云ふ事は、できぬのです。宗教の立脚地は、此不可思議の方面です。から、不可思
議を取り除いて仕舞ふとの出来ぬと俱に、宗教は何時までも滅亡するやうな事はな
いのです。此點をどうも誤解して居る者が多いやうです。私の説は、宗教は超自然的
要素があると云ふことが主なのです。から、この邊をよく明にして置いて下さい。夫
れ故くといやうです。けれど、經驗論者の誤解の點を擧げて、超自然と云ふことを繰
返して置くのです。

兎に角、近來その宗教を聞きたい、信仰を求めたいと云ふ傾向が大に現はれて來た

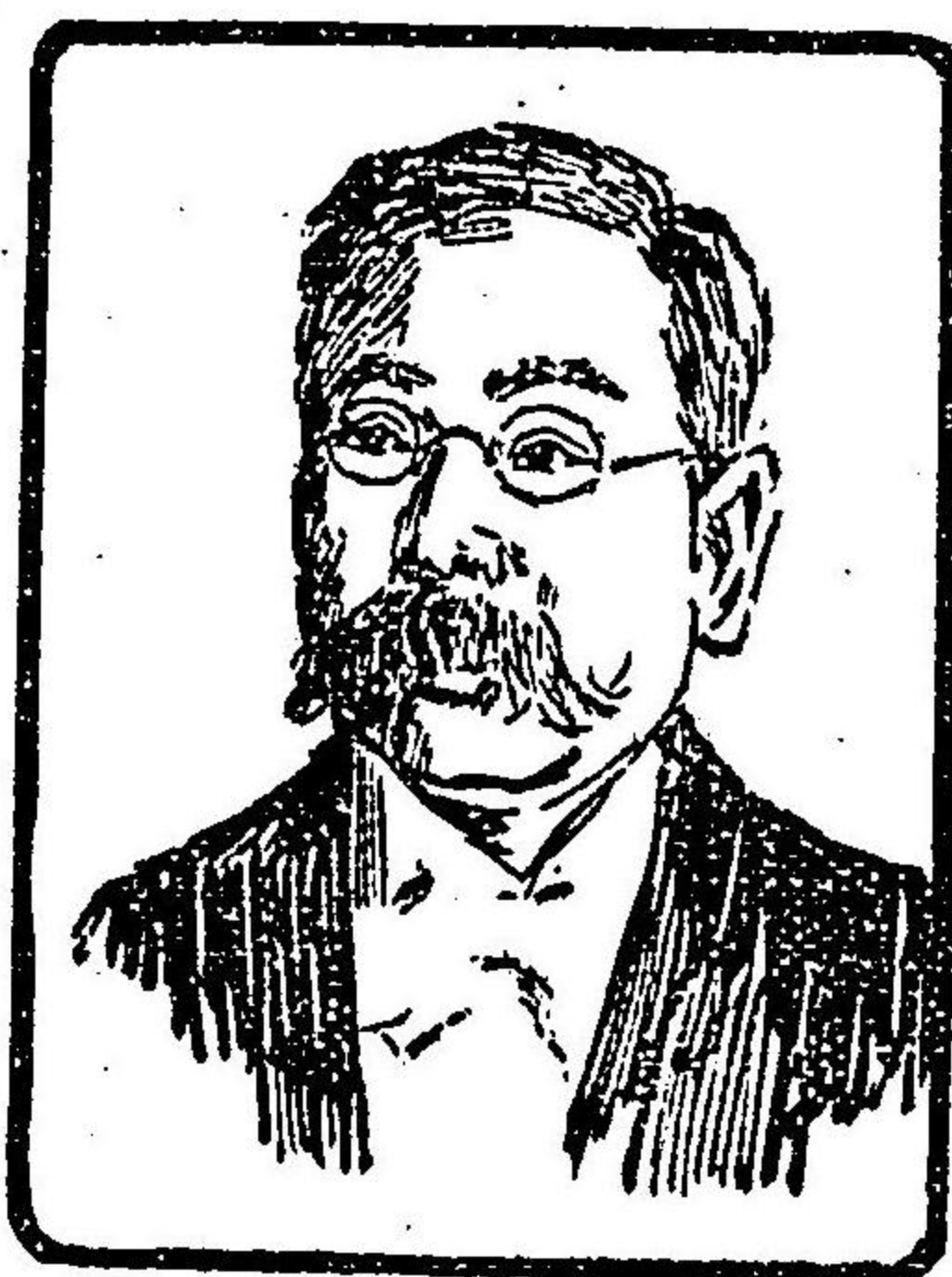
のは頗る好望な現象です。全体青年の方が却つて宗教と云ふものを希望すること
が盛なのです。一切の精神作用が活発なやうに、宗教的意識も盛に活動するのです。
どうしても青年の時代から充分宗教的に陶冶せねばいかぬのです。青年時代をお
かしのことにやり損ねては、仕方がないのです。青年に宗教的教訓は、害があるなど
云ふのは、未だ其一を知て其二を知らぬ、極淺薄な見であるのです。併し今の成立宗
教には、随分如何はしいのがあります。から、成丈注意に注意を加へねばならぬこと
は勿論です。

灌佛

佛生會編を抜きたるかしこ願
卯月八日牡丹の蕾數へけり
釋迦様は茶に酔ひけらし花御堂
生れ出てし佛の顔の黒さかな
階前の草に甘茶をこぼしけり
甘茶かけて佛倒せし念佛説
灌佛や胞衣を出てさる棕櫚の花
尼寺を見舞ふ卯月の八日かな
僧正の先そよきたる甘茶かな
あら彫の佛に甘茶灌きけり

木の端の母は老いけり佛生會
灌佛や焼け残りたる二王門
拜んては目につけてゐる甘茶かな
釋迦堂を飾りたてたる八日哉
灌佛や孫に曳かれて善光寺
灌佛や並ふ日宗是眞寺
餘花老翁雨天山や佛生會
灌佛や佛賣りたる門徒寺
灌佛や御骨迎へし京の寺
一人兒を亡くせし卯月八日かな

南柳



小崎弘道

イヤ私も御同様に、こうやつて獨力でやつて居ります。別に保護と云ふような事を受ぬかはりに、干渉も牽制もなく、自由にやつて居るのであります。……全体私が基督教を信するようになったのは、随分古い話で、御承知か存じませぬが、維新の際に、私の藩即ち熊本でも、洋學をやつて、有爲の人物を養成せねばならぬと云ふので、藩の費用で學校を建てまして、英國の或士官を雇ひ入れて、先づ頻りに語學をやらせたので、そして、此學校に入るのは、藩中の青年から、尤も有望な秀才と云ふのを、抜擢して、藩の費用で勉強させたので、第一期は至つて僅な人数で、第二期第三期と續いてやつと、彼此五六十名出來たのであります。私共も幸にして、其中の一人に撰ばれて居たのであり

ます。夫からまア段々勉強して居たうちに、其英語の教師と云ふが、至つて熱心な信仰家であつたので、生徒の中にも追々と聖書などを讀んで見ると云ふものが出來たのです。私は全體家が儒學の方ですから、決してそう云ふ方には手を出しません。でした友人など頻りに参考の爲めによいから讀んで見よと云ふので、到頭讀んで見ました。が色々疑惑も起り、煩悶もあつたのです。遂に確な所を發見してやつと安心することが出來たので、爾來今日まで、唯一の神を信することは、決して變改せぬのであります。之が尤も正しき信仰眞の教眞の道と堅く執つて動かぬのであります。夫から遂に同志の者が相集つて、互に誓約をして、吾々は政治とか軍事とか云ふとに従事すれば、随分相當の位置を得るであらうが、夫等の事はまだく下等な仕事で、且つそう云ふ事はやる人も澤山あるから、吾々は夫より多くの人が容易にやり得ぬ仕事、即ち精神界の方面に向つて盡力し、迷へる人心を覺醒して之を正しき眞の道に導かう、其の爲めには如何なる辛苦も、如何なる災難も辞すまいと云ふことになつたのであります。之れが私共の宗教界に這入る首途であつたのであります。所が此の事が、追々發表されて來ます。藩の方では大變に驚きまして、折角

手を入れて勉強させて、耶蘇坊主になつてはなんにもならぬ、又そう云ふとは天朝に對しても相濟まぬと云ふような騒ぎになりました。夫から到頭學校は閉鎖する吾々同志の者をば父兄に預け謹慎させると云ふ事になつたのであります。所が私は最早父がなかつたので、余り八釜敷云ふものもなく、母は勿論大層心配しましたけれど、なんにも悪い事をした譯ではなく、之から善い事をしようと思ふのであるから、決して彼此案じるには及ばぬと申しまして、母も大略理解し、別に六ヶ敷親族もなかつたので、私の方は先づ私の考通りですむことになりましたが、同志の中には随分大騒をやつたのがあり、横井君の如きは儒者の家から、さう云ふものを出しては、祖先に對しても、藩主に對しても、濟まぬ、殊に亡夫に對して、何とも申譯がないから、母公が自害すると云ふ次第で、夫から其叔父に當る矢張漢學の先生があつて、頻りに説諭して改心させようと思ふのを、横井が頑として動かぬので、叔父からは絶門されるなど、至極八釜敷かつたのであります。又同志の一人なる吉田と申す者は、父が丈夫であつたので、手打にすると云ふ次第で、大刀を引抜いた。吉田が道の爲めには止むを得ぬと云うて、首を差出した所が、父公も元來嚇して

改心させる積であつたので、まさか斬る譯にはゆかず、この馬鹿野郎と云うて、椽から墮落して奥に入つたと云ふことなのであります。夫から徳富などは、まだ極く年少であつたので、仕方なしに父の言に従うて改心すると云ふことになつて、庭で火を燃いて一切の聖書などを焚いて仕舞つたのです。金森君や海老名君等も、矢張さう云ふ風に騒いだのでした。夫から暫く立つ内に、世間は段々變つて來る。藩の方も余り八釜敷ないようになつたので、同志の者は脱走と云ふ姿で、京都にやつて來て、丁度新島さんが同志社を始めようと云ふ所で、夫から皆それへ這入りましたが、勿論創立の際ではあるし、一向不整頓であるので、之ではつまらぬから、東京に出て、今の大學當時の開成學校にでも入らうかと云ふものを、新島さんが頻りに留めて、夫から半分は生徒、半分は教師と云ふ工合で、色々規則を拵へるやら、漢學などの教授を受持つやらして、次第に整頓するようにしたのであります。夫から後に東京に出て來まして、あすこの靈南坂の教會堂も建てましたが、後に都合があつて、あれは他に譲りまして、復暫く京都に參つて居たのであります。所が先年私の讓つた人がなくなつたので、此の邊の信者が是非歸つて來いと云ふので、遂に歸つて來て、爾來

こうやつて居るのです。別に何處から保護を受けたと謂ふ譯でもなく、矢張多少の信者があつて、夫でやつて居るのであります。が私共の信者はどうしても青年や婦人が多いので、財権を握つて居る者は少ないから、會堂の建設とか維持とか云ふことは随分困難であります。

私はその自分の主觀界以外即ち客觀界に神の存在して居ると云ふことを堅く信じて疑はないのであります。私の堅く信ずる所、私の誠實を込めて祈る所に對して必ず感應するものがあるのです。勿論その感應と云ふものは自己の内界に活動する道徳心の作用と云へないこともないでしょう。が全體自分が自心に控うて、こう云ふ事はなすまいと云ふのよりは、こう云ふことをしては神に對して濟まぬ神は毎に我が行動を見ているから、惡事はどうしてもされぬと云ふ方が余程力があるものであります。夫で神の存在と云ふ信仰は、日常の行爲、道徳の上にも、非常な力を有して居ります。ですから、其の種々な下等の崇拜をやる所謂迷信的の信仰も、中々輕蔑することの出来ない點があるのであります。この神の存在と云ふ信仰が至て纖弱な婦人などにも、凜乎として犯すべからざる勇氣活力を與へて居るので、それで總べ

てのものゝ生命と活動とが生れて來るのであります。實に言ふに謂はれぬ餘い所があるのであります。外界に神が存在して居つて、我々の内界なる至誠と互に感通する事が出来るものであると云ふ事は、信すれば直ぐ分るのであります。が自己以外に幾多の自然物がある如く、その自然にも神の現れを示して居るので、彼の昔から、日本で鳴神とか神鳴と云ふ如きは、矢張その意味であるのであります。その神の一部分たる神の現れを種々の方面に認むるのが多神教とか、汎神教とか云ふべきもので、その神の本體を信しようとして云ふにはどうしても一神教でなくてはならぬのであります。一神教が高尚で真であると云ふことは勿論であります。が多神教的の崇拜でも、矢張全然捨てられぬ部分があるのであります。併し多神教的汎神教的の信仰は、夫が進歩して來ますと、到頭一神教的に統一されるのであります。夫は事實の上からも幾等も證明が出来るのであります。

如何にも私の申す神と云ふのは、勿論人格的なのであります。神と云ふことは宇宙の本體で、實在であります。から實在と云ふものは、絶對でなければならぬ。其絶對なる實在を人格的とするのは、絶對に制限を附するので、絶對を絶對たらしめずして

之を傷くるのであると云ふ説がおりますが實在を人格と視るとは、ロツチエが一番よく説明してあるのであります。全體事實の上に之を徴して見ましても彼の鐵物の如きは親和力とか重力とか云ふもの丈であります。夫が進んで植物になりますと、體外より食物を執るとか、生殖するとか、生長枯死するとか云ふ様に、生命と云ふものをもつて居ります。併し植物にも、鐵物の如き親和力や重力がないのではありませぬ。夫で植物は鐵物の性質の上に、尙一種の性質を附加したのであります。夫から又動物になると植物鐵物の性質を併有して居る上に、猶感情とか云ふような一種の性質を附加して來るので、夫が人間になると、理性と云ふものを備へて來るのであります。夫と云つても人間にも矢張り鐵物的植物的動物的の性質もあるのであります。丁度夫と同じに、人間以上の絶對と云ふものにも、人間と同じ性質が具備してあると云ふことは、決して絶對を傷つける譯ではないので、成程一方より見れば、人格的と云ふことは、制限を加へたようですが、人格的でないとも云ふことも同じ意味で、絶對を制限することになるので、絶對と云ひ無限と云へば、何ものも具備せねばならぬ。夫を人格的でないとも云ふのは、矢張り制限であるので、併し夫が人

間以上のものであるから、不完全ではないかぬのです。から圓滿完全なものとする。即ち人格の完成したものと見ることは、何も差支ない話であります。若し神が人格的でなくて、單に抽象的理法的のものでありましたなら、自然以外に活動の餘地がなくなつて、殆んど宗教の根底が崩壊する譯になりはしませぬかしらん。朝鮮や支那も、どうも困難であります。日本の民族は、腐敗し墮落しては居りますが、まだその眞の道を求むるに足る力があるのであります。即ち墮落の内にも、自ら反撥力を有つて居るのであります。若しも之がなかつたならば、日本は久しからずして滅亡しますな。左様さ、此の反撥力は、矢張り武士道のお蔭であります。徳川時代には、武士が四十万と謂ひましたが、四十万と云へば、全國民から見れば僅ではあります。此四十万の武士と云ふものが、當時は我國の生粹で、その力で國家も道徳も維持して居り、進歩發達の原動力ともなつて居つたのであります。全躰一國內でも、上流の社會と下層の人民とは、大抵迷信的で、不道義的、不理論的であつて、一國の風教を支持し、又之を發展させる健全な思想と云ふものは、何時も中等社會の少部分に在存して居るのであります。英國などでも、其富強道義を支持して居る所謂

紳士と云ふものは僅なもので、其上下には矢張つまらぬものが多いのであります。……教科書事件のような事が爆發して來るのも、われは矢張、この反撥力の發動であるのであります。わア云ふことは、腐敗の社會人心を廓清するに、大によろしいのであります。

兎に角最後の勝利は事實であります。宗教的の信仰を持つて居るものが、無信仰者に比して、どれ丈善良な結果があるか、又どれ丈危険が少ないかは、着々事實上に反證されてまいりましょう。又神の存在を信ずると多神的よりは、唯一的の信仰が他に比して、どれ丈効果があるかも、ちやんと證明されるで、ありましょう。私共は固より、自分の信ずる所が眞の理で、社會の大勢も亦自然、その方に向ひ來るもの否、來なければならぬものと信じて疑はぬのであります。

●「神人の同格と懸隔と」の一節

融 飯

吾人の宗教は還元主義の眞實におもひかして、唯主義の新天地なり。吾人は人を以てイデーデンの樂園より失墜せし者と視ずして、禽獸の域を脱し黄金世界に入らんと努力せる生物なりと視、蛇に誘はれたる者の裔と視ずして、曾て蚊等の群にありし身を起して天下を掌握せんと物むる豐大固なりと視る。吾人の宗教は諸の流にあらざして Higher aspiration の宗教なり。是れ吾人が神人懸隔の宗教に負ふ所なり。(「新佛教」三卷の七號)



眞洞

私共は、將來の宗教など云ふ事には、別に考はありませぬのであります。よし又あつたにしましても書生論即ち空論でありますから、これといつて有益なお話はないのであります。

佛教の各宗派は、現在の有様で、今後も連續してやつてゆけるであらうかと云ふのであります。夫は随分疑問であります。私共の考へた所では、現在の寺院僧侶即ち八萬の寺院十萬餘の僧侶と云ふものは、全國の面積人口に比しては、多きに過ぎると云ふ譯でも、あるまいが、兎に角今日では、多きに失するの弊があるように思はれます。それからは十分淘汰せねばなるまいと思ふのであります。勿論自然に淘汰されつゝあるもので、現に此の寺の如きは、以前は餘程盛なものでありましたが、一時

は全く破滅の姿であつたのを、私が幼少の時分の關係から九年ばかり前に住む事にして、前面丈の草などをやつと掃除して、人の住む所のようにして居るので、尤も住職ではないのでありますが、なか／＼こう云ふ寺では生活が出来ぬので、此所に在る之が前の地蔵様の賽銭であります。日々の収入が之れ位では、一人の生活も六ヶ敷のであります。全體今の寺院と云ふものは、生活が充分に出来る見込があれれば、争うて住むものが多く、生活が困難であれば住むものはなくて、自然に廢滅するので、各宗の寺院には、そう云ふのが段々出来るようになってあります。どうも妙に變るもので、昔は人があつて道場も出来、金も集まると云ふ有様であつたのが、今日では收入の多い寺でなければ住む者はなく、寺院を生活の資料にするようになって参りましたので、夫で又僧侶はどんな事をして居るかと申しますれば、葬式や年忌などに讀經すると云ふのが本務でありまして、葬式に僧侶と云ふものが立會ふのは、多少人心を慰める事は出来ましようが、夫にしても國家社會の方面から見れば、随分高い價を拂つて、僅の品物を購つて居ると云はねばなりません。單に外形の上から見ますれば、寺院が多く僧侶が多ければ、其宗派は盛なようであり、ますけれど、夫は

形骸の尨大な計りで、生命のあるものではありませぬから、寺院や僧侶の多きに過ぐるのは、孰れの方面から見ても、餘り感服の出来ぬ次第であります。夫から歴史上の事實から考へて見ましても、我國最古の佛教即ち華嚴とか法相とか云ふ宗派は、今日も形ばかりの命脈は存して居りますが、其實存在と云ふ程の事はないので、否、今日ではない、既に平安佛教の起ると共に、其生命は絶えて居るので、史上では南都北嶺と云うて、奈良朝佛教平安朝佛教が拮拮抗して居る様に見えますが、夫は習慣の惰力で外形上の存在で、眞の生命と云ふ者ではなからうと思ふのであります。夫と均しく、平安朝の佛教たる天台眞言、殊に眞言の如きは、今日でも随分形は大きくあります。實際の命脈は鎌倉時代の佛教の起ると共に、斷えて仕舞うて居るのであります。そうして今日の所で申しますれば、佛教全體が悉く外形上の存在で、生命活力と云ふものは、全く無いのであります。既に眞の生命はないと致しまして、新に起るものが全然異つた、他の教派でなく、矢張佛教なれば佛教である以上は、別に在來の寺院を破却するでもなく、僧侶は又互に相接するので、外形上は衰へながら連続して行くので、習慣の惰力と云ふものは、随分根強いものであります。

すから、今後僅少の時日で、現在の各宗派が、全然滅亡して仕舞はうとは思はれませぬ併し其内如何なる新事件が起つて、一切のものを破壊して、全く別種の新なる建設を爲すかも夫は分りませぬ。

全體何でもそうでありませぬが、宗教と云ふものでも、何所にか根が生へて居らねばなりませぬ。奈良朝の佛教が、皇室を中心とし、根底として發達し、平安朝の佛教が、政府を根底とし、其眞言の如きは、下流の社會にも根を延ばして、夫で以て大に活動し、鎌倉時代の佛教は、中流下流社會全般に亘つて、根底を植付けて居りました。今日の佛教は、政府からは追放せられ、教育界からは厄介視せられ、社會全般からは、翫弄視せられ、尤で眞の根底と云ふものがなくなつて、仕舞うて、浮萍同様になつて居るのであります。形は存して居ても、何等の働も出來ぬのであります。どうしても、今後の佛教は、社會の一方面に限らず、各方面に向うて、新なる健全な根を植付けて、云ふことが必要であります。夫と云うて、無暗に運動しては、却つて好結果を得られぬので、丁度彼の救世軍が、自由廢娼をやつたやうなもので、自由廢娼と云ふとは、眞に道理至極な事で、流石は自由を重する國に成立した宗教の美譽

である。感服せずには居られませぬが、又之を一方より見ますと、救世軍のやり方は、どうも一時の人氣取り、自己の勢力を張らんとする手段として、殊更にやつたと云ふ卑しい點もある。殊に廢娼の結果は、密賣淫の流行を盛ならしめたといふが如き、夫よりは不條理にせよ、何にせよ、一旦相互間に成立した契約を破棄し、信義と云ふものを無視するに至り、却つて道德上大なる新弊を醸すと云ふに至つては、軍功罪相償はずと云うてよいかと思はれる位で、どうも近時のやり方は、總べて投機的で、誠實と云ふことがないので、舊弊は打破しても、新弊を起していかぬように思はれるのであります。どうしても熱心を以て、先づ自己の職分に忠實に勉勵すると云ふ點から企て、行かねば、眞正の好成績は奏し得ないのであるのです。

私の經驗上、改革したなら宜敷からうと思ふ點であります。夫は第一、寺院生活と云ふものを廢せねばいかぬと思ふのであります。前にも申しました通り、寺院を生活の資料にするに云ふと、どうしても營業的に流るゝやうになつて、來て宗教家の尊嚴とか資格とか云ふものが保てず、従つて眞正な宗教的活動も出來ぬ事になるのであります。殊に今日では、各宗共に積弊があまりまして、最も平民的に成立した眞

宗が全く貴族的になつて仕舞ひ質朴で起つた浄土宗が榮華宗となり世事俗累に關せぬ等の禪宗が幫間的になつて世間から脱弄品の如く扱はるゝ様に爲りましたから、こんな有様では仕方がないので其流弊の中に在つて之を矯正するよりは、其弊渦の外に出で、新たな方面から之を刷正する方がよからうと思ふのであります。

は……實在寫象の方法即ち信仰の標準と云ふものに就いて、理論的方面からでなく、私の經驗上の信仰に由つて話せと云ふのであります。つまり教義の内容の事で一宗教か、汎宗教か、自力か、他力かと云ふ事に歸するのであります。夫は私はもろ彌陀教に限ると信ずるのであります。彌陀教程、貴賤賢愚の別なく何人の耳にも這入り易く、又情にも入り易いものはありませぬ。私は坐禪をやりかけて見たこともあり、又密教の事相と云ふものも少しばかり習うて見ましたが、あア云ふ事は、其機でないからでしよう。どうも私共には出來ませぬ。矢張彌陀教が一番都合が宜しいのであります。全體宗教と云ふもの、人と云ふものは、信仰の目標を自分以外に實在せしめて、之に向うて歸依すると云ふのが尤も有力なので、實在と云はうと真如

と云はうと、理想と云はうと、名稱は何と變つても、今日では、私の精神身體を支配して居るのは、矢張彌陀の救済と云ふ觀念で、此觀念を變ずると云ふことは、到底出來ぬのであります。何時か基督教の者に遇ひまして基督教のゴット神と云ふものを取つて除けたらよからう、そうすれば大畧佛教に同じくなるからと申したら、夫は到底出來ぬと答へましたが、成程私共でも彌陀と云ふ名は取除いても、又別な抽象的の名に代へても、彌陀の觀念信仰は、替へることが出來ぬのであります。

そうです。彌陀教には、どうも現世と遠ざかると云ふ弊害があつて、いかぬのであります。眞宗では、眞俗二諦とか、王法爲本とか申して、此弊を防がうとして居ります。これは後世に拵へたものであります。ようが、兎に角世間と遠ざかると云ふ弊は、是非共矯正して行かねばならぬと思ふのであります。

イヤ新佛教のようなもの、興つたのは、大によいことであり、昔は佛法僧と云うて、大に威張つたものであります。法を維持し、教を宣布するのは、決して僧に限つた譯の者ではなく、今日では、僧侶が却て俗人から教訓される様になつて來ました。つまりア佛教から云へば、一種の優婆塞宗であります。ア、そう云ふような

點から或は佛教界否宗教全體の根本的革新が出来るかも知れませぬ私は始終そ
う云ふ希望を囑して居るのでありますどうか成るべく自主自重してやるように
希ひます

左様さ爲政家は法律政治の力で以て萬事能くすべしと考へ宗教などを排斥する
傾があり教育家は教育の他に宗教をば要せぬと思つて居るらしくありますがど
うでしよう目下社會人心の腐敗墮落と云ふものは全く權力の在る者即ち政治の
方面と智識のある者即教育界の方面から起つて來て居るではありませぬか勿論
宗教界も大に腐敗して居ります宗教家自身から造つた不徳も澤山ありますが其
半は社會の方特に政治教育と云ふ上流の方面から影響を受けて居るのでありま
しようそこになると却て下等社會の職工などの方が遙にましで私は何時も床屋
で頭の掃除をさせますが彼等には頗る愛すべき點があるのであります相互の信
義とか隣保相扶くるとか云ふ美德が随分堅固に存して居るのであります兎に角
かように腐敗墮落した社會は決して一方面から矯正して夫で成功することは六
ヶ敷ありましよう政治も教育も宗教も相伴うてやらねばいけません特に宗教

は人心の根底を支配するものですから決して之を輕視してはいけません
でも先づ根本的に道義心と云ふものを發揮することに勉めねばなりません
どうです一時は宗教破壊を能事として居りましたが夫から甚しい懷疑に移りま
して今も猶懷疑中ではありますが併し多少建設的になつて兎に角信仰を求めた
いと云ふ傾が現はれて來たのは何より結構でありますなんとか孰れ一ツ新生面
を開く機運が熟して參るであらましよう

◎讚新佛教歌

香取秀眞

美ホトケノサカバトキケム御ヲシヘハミチトセヲヘテ今ニツタル後ニモツタル
志ナニツタヘカラヲアゴシテ千五百アキヲコニツタル美ホトケノミチ大キヒチリノミチ
美ホトケノヲシヘノノリハ世トトモニ大キヒチリガウツシ説キタリ世トウツリタリ
今ノヨラスクハントナラバ今ノヨノアラホトケノミチヒラクベシ法ヲトクベシ
サカノオシヘトクベキテラノホウシラハヲシヘヲトカズシニヒトハフリ美ハカモルノミ
ホウシラモ人ニシアレバスミノコロモヲステヨ髪タクハヘヨツマト兒ウマセ
ウヂタカリトロロキスラク世コ、ロヲキタメンタメトツトルモロモロハゲミタマハ子
ウツソミノコノ世スクフガニ法ヲトク人ラタフトクワレハウヤマフ吾ハタフトゾ



もの言

云ふ觀念です。宗教を利用すると云ふ事は別に悪いと云ふ譯でもないけれど、あの宗教を信すれば利益があるから信するとかいうて信仰の動機宗教の是非を利益の如何に由つて判定すると云ふのは頗る間違つた話であらうと思はれるので、又夫より種々の危険弊害と云ふものが生じて來るのです。こう云ふ工合に利益の如何を動機として信仰と云ふものを樹立するので、すから一時は非常に熱心に非常に堅固な様に見えても、一朝風が變り餘り利益を見出さぬときは忽ち冷却して仕舞うて其冷却の度の甚しいのは驚くばかりです。夫から又利益が動機になつて居

日本人の宗教と云ふものに對する觀念の中で、私の始終遺憾と思つて居ることが一つあるのです。夫は其宗教と云ふものを利用すべきものだ

るもので、すから夫から色々な迷と云ふものを生じて來て頻りに不動様や觀音等を拜んで見ると云ふ事になるのです。

成程そう云ふ觀念はどうして出來たか、なにか原因になつて居ると思ふかと云ふのですか、夫は私は大略こうであらうと考へるのです。克く佛教に方便と云ふ事を申しますな、あの佛教が眞正の宗教の何たるものであると云ふことを教ふるのは忽にして、重に方便を用ひ、方便の方面のみを説いて、唯一時自己の教勢を張らうとしたことなどが、尤も直接の尤も深い原因であらうと思ふのです。夫れから又佛教などが、餘り現在にのみ走つて、實利主義を唱へた結果も、原因となつて居ると思はれます。……全體信仰と云ふもの、宗教と云ふものは、利益以上に、必然的の關係から、發らねばならぬもので、丁度昔の武士が殿様に於けるが如く、利益の爲めに忠義をするのではなく、父祖代々の關係よりして、腹の中に在るうちから、最早君臣主従で、利益の如何は更に問ふ所なく、生れ落つるより、君家には忠義を盡さねばならぬと、ちやんと極まつて仕舞うて居る様に、信仰と云ふものも、必然的に起つて來ねば、一向信仰が信仰としての價値がないと云はねばなりません。然るに日本人の信仰

と云ふものは概して浪人的武者修行的ですな、よい抱へ主がわつたら倒かう知行が氣に喰はぬときは後足で砂を蹴かけて出て行くと云ふ有様で、どうも險呑な信仰の態度でありますなア……ですから此の間違うて居る點を根本的に革新せねば、眞正の信仰も立たず従つて眞正な宗教も行はれず始終あちこちとぶらついて居て、不動様や帝釋様などが矢張勢力をもつて往くと云ふ有様になるのです。一體その昔の僧侶などが自家宗教の教勢を張る爲り、祈禱や加持をして種々な佛様を拵へて、方便で以て愚民を籠絡したのがいかぬのですなア……全體日本人には、宗教心が乏しいとか、宗教的意識が發達して居らぬとか云ふものもありませんけれど、決してそうではないのです。之はずつと以前の事ですが、米國から或女の宣教師がやつて來た時に、私が案内をして、淺草の觀音にゆきました所が、あの御堂で暫く見て居る内に、一人の三十ばかりの女がやつて來て、何か一生懸命に祈請して居たのを、女宣教師が忽ち注目して、ア、あの女は救はるべき人間だ、誠がある、そうして熱情のあるものだ、充分眞の教を授ける丈の心のあるものだ、が、悲しい事には、相手が悪いと云はれましたが、私共は不斷見付けて居るから餘り感じませぬが、歐米人の

目には、奇妙に見えるでしょう。殊に日本人には宗教心はないものと思つて居る所にか、様な熱心のあるのを見ては、随分驚くでしょう。夫から後又或宣教師の來た時分に、他の者が案内して上野に行きましたら、丁度或る傳道師が、あの廣小路の傍で、路傍演説をやつて居たのに、澤山の聽衆が熱心に聽いて居たのを見て、案内者に演説の主意など尋ねて、其聽衆の熱心な有様の有るのを見て取つて、ア、日本人には心がある、誠の心がある、此人民に傳道が出來ぬと云ふは全く嘘だ、教へさへすれば、皆救はるべき人民だと云うたそうですが、兎に角日本人には、宗教心と云ふものは、實際随分盛なもので、又發達して居りますけれど、夫がどうもをかきな風に發達して居るので、即前に申しました通り、利用的に發達して居るのですから、遂に宗教と云ふものを善用し、或は迷信に陥り、或は一時的に止まりて、冷熱反復常なしと云ふ有様になるのです。

ハ、其利用的の惡弊を革新するには、どうすればよいかと云ふのですか、夫は久しい慣習で、最早全く痼疾になつて居るから、なか／＼急にはなほりませぬなア、併し一方には熱心に傳道を勉め、一方には教育の力に頼るより外はありませぬなア……

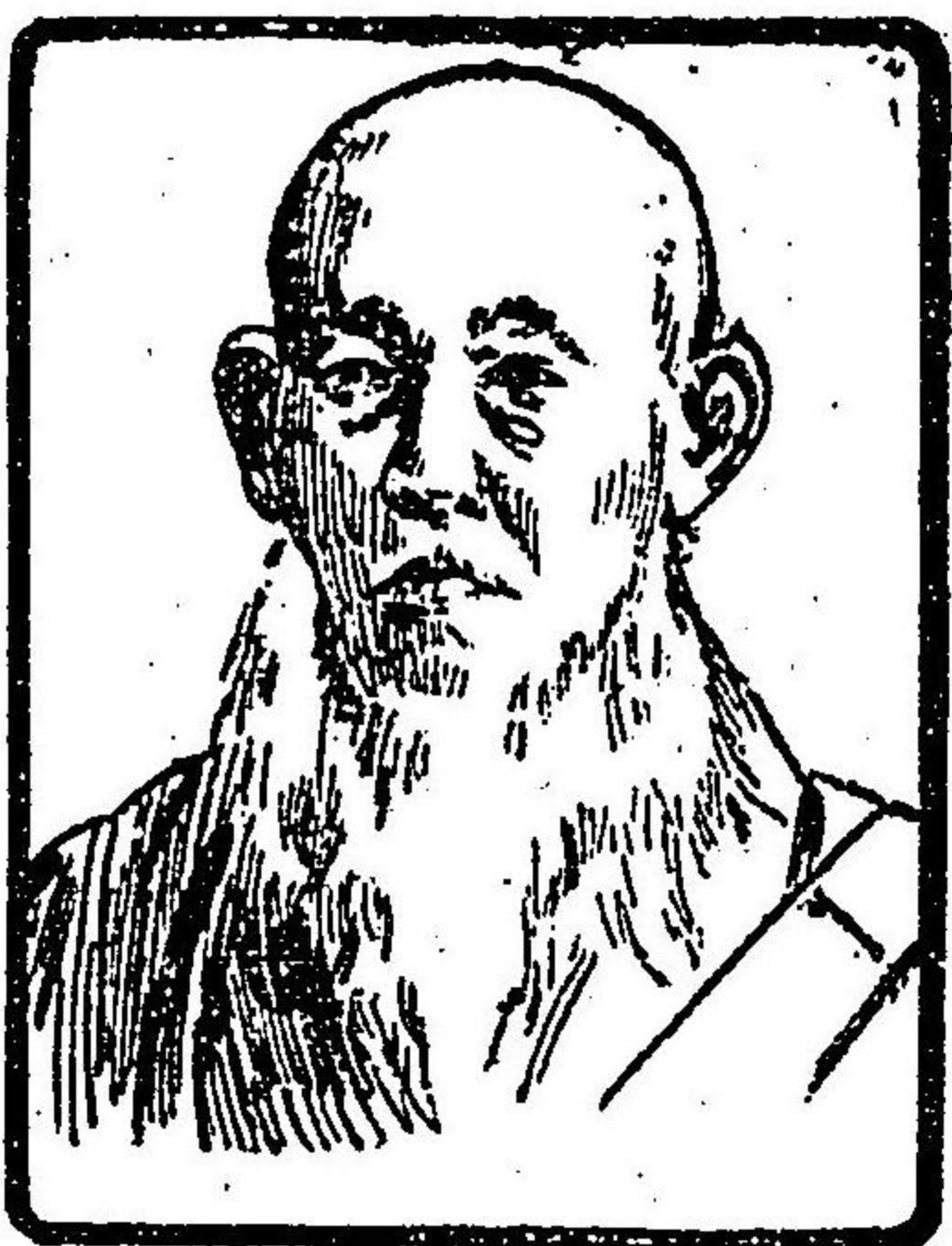
教育と云ふ事に就いて一寸お話しして置きたいのは、官公立學校は先づ別として、私立學校の方で、教育と宗教との關係ですな。私立學校でも、宗教の事を教育するのは、悪いとか危険だとか云うて干渉するのは、甚だ間違ひであらうと思ふのですな。ア所が文部省で随分有力な人の説に、私立學校では、宗教の事を教へても差支はないのだけれど、夫も其佛教とか基督教はよいけれど、天理教でも、矢張中學校を立て、居るが、あれに天理教を吹込まれてはたまらぬからと申しますから、私は夫もよいではありませぬか、文部省で中等教育の課程さへ定めて、夫を實行していつて、其課程に應じた力のある者に吹込む事のやり得るとすれば、天理教でもなんでも、些とも構はぬではありませぬか、若し夫が全然役に立たぬ者なら、幾等やつても、既に中等教育を受けた者が信ずる譯がない、既に中等教育を受けた者が、之を信ずることが出来るるとすれば、其宗教は排斥すべきものでない、殊に行政權を以て之を左右すべきものでないと申しました所が、君は基督教でありながら、天理教を許すのかと云ふから、勿論私は、私の信仰が自由で大切なる如く、他の信仰をも尊敬するものだ、由來宗教の善惡、信仰の正邪を判斷するのは、學者や、宗教家の權能に屬する

ことで、行政官即文部省などで、あれはよい宗教とか、あれは悪い宗教とか、あゝ云ふ信仰は正だとか、邪だとか云ふ如き批判を下すべき權能がないばかりでなく、そう云ふ批判を下すのは、取りも直さず越權で、憲法の信仰自由と云ふ保障を蔑視せる、違憲の處置と云はねばならぬだから、文部省では、教育の課程さへ定めて、夫が實行さるゝや、否やを監督して居れば、夫で澤山なのだ、その上に、宗教の義の正否や、學説の眞否まで、勝手に極めて、一方に學者、宗教家の自由權能を奪ひ、一方には、人民が信仰自由を束縛すると云ふ亂暴なことは、あらぬのだと申したことがあります……成程宗教にも善惡あり、學説にも正邪があります、現に私共の考へて居る、やつて居る事でも、大に間違うて居て、人を害ひ、世を誤るような事があるかも知れませぬけれども、私はよいと自信し、ある丈の熱誠を以てやつてゆきつゝ、あるのですから、責任は全く私にあるので、若し間違つて居れば、私は神に附せられます、神に恐入るのです、なにせよ、其人に責任を負はせ、其人のよいと信じて、熱血を濺いでやる事は、どうしても拘束せず、にやらせねばいけませんなア……全體政府が頻りに教育と宗教とを區別して、宗教を排斥しようとするのは、全く佛蘭西の眞似をして居るので、

御承知の如く、佛蘭西では、政教一致否、教權が政權を壓し、又天主教は、其教權を以て新教を迫害しようとするから、政府は共和政府を維持する爲めに、又新教は其迫害を免れん爲めに、頻りに天主教の教權を抑へて居るので、之は全く政界上から來たもので、決して眞の宗教に對する意見ではないのであります。夫で佛蘭西では、人民は學校で宗教の教訓がないからと云うて、日曜より他に一日休みにして、自分／＼の屬して居る教會に兒童を出して、宗教上の教育を受けさせて居ると云ふ有様で、之は小學校の事ですが、高等の學校では、時刻を定めて、各教場を各宗派の生徒に分貸して、其宗派に屬する者丈が一教場に集つて、説教などを聞いて居るので、學校課程の中には、勿論宗教教育を加へさせぬけれど、宗教々育は、矢張十分に行はれて居るのです。どうしても宗教と云ふ根底がなければ、只學校教育ばかりでは、到底正しい人間は出來ませぬなア……教科書事件の如きはとうです、われ等は、大抵明治の教育を受け、比較的智識の發達して居る上流の人間ですが、どうも其の頭の丸いように、頭の中まで角がなくて丸いものですから、餘り融通がきゝすぎて、わア云ふ事になるのです。日本の小鏡を見たように、丸い中にも四角な穴があつて、所謂武士道

的に多少稜角と云ふものがなければいけませんなア。夫は全く其の宗教と云ふものが動搖して、人心を支配する眞正の教が絶えたからです。もう文部省等でも、二十余年來の經驗で、大抵わかつて來そうなものですなア。ハ、勿論私共は基督の教が一番正しい眞なものとして居るので、併し佛教にも儒教にも、夫れ／＼道理はあつて、しようからなんでも熱心に正直にやつて、往けば、大抵同じような所に着くのです。まア十萬と云ふ僧侶があるが、随分大したものだ、四千萬人の中で、十萬人、是丈のものが一致して一番發すれば、どんな事でも出來ますがなア……左様さ、兎に角信仰を求めたいと云ふ考が起つて來たのと、どうしても舊信仰には甘ずる事が出來ないと云ふ傾向が大分現はれて來たのとは、何より頼もしい事です。佛教の方でも、新佛教のように改良進歩し、吾々の方でも、熱心に傳道したなら、其間に自ら人心の歸向する點も出來てくるだらうと思ひますなア。まア、十分熱心にやることですなア。如何にも日本のユニテリアンなどは、宗教であるかないか、一寸わかりませぬなア。勿論米國の方では、ちやんと儀式も宗教的にやつて、更に他と變りのないようにし

て居るのですが、日本のは、重に社會的方面に力を濫いで成る大宗教的の儀式などは避けて居るようですな。勿論、あれは中々よい事ですが、宗教と云ふものは、單に倫理的の行動丈の事に止まるべきものではありませぬからなア……何時か加藤博士の話であると云ふ話をききました。が、基督教と云へば、兎に角まだ日本に是迄ない思想でもつて來るとか宣布するとか云ふのは聞えて居るが、ユニテリアンの如き考は、昔から日本に在るもので、別に今更騒ぎ立てる程のものではないと申されたり。たそうだが、成程博士丈あつて、觀察の敏い點がありすなア……どうしても宗教は、倫理的社會的の以上、特別な點がなく、てはならぬもので、之がなければ宗教たる價値も効力もないのである。然るに、倫理的以上のものがなければならぬと云うて、是を無暗にあつかへば、迷信になつてくるし、迷信になるからと云うて、此點を除去しようとするれば、現今の學者の議論を見たように、極めて無味乾燥な淺薄なものになつて仕舞ふのみか、此點を除去しようとするから、遂に宗教は不用だなどい唱へ出すようになるのである。宗教と云ふものは、總べてを超越して、要不要以上の事で、人生必然的のものですからなア。



島地獸雷

全體その物の外形と云ふものは、場所や時代に由つて種々に變化すべきもので、丁度、戒行を主旨とする小乗教と肉食妻帯を構はぬ淨土眞宗のようなもので、同じ佛教でありながら、時所に由つて大した相違があるのだけれど、外形が違ふから、直ぐ其實相本義まで違ふとは云へぬのだ。禪宗と淨土門、自力と他力とは、其やうり方は大層な相違して居る。外形は雲泥の別があるが、孰れも實大乘の根本義を執つて、其上に成り立つて居るので、其根源は一向變りはないのだ。夫で宗教でも、殊に佛教の如きでも、之れから先き、其外形は時代に應じ、又佛教が歐洲や米國などに傳播するにすれば、其國々の風俗に應じて、夫れは多少變化はあつて、わらうが、佛教の根本の大主義と云ふものは、中々變りそうにはない。又決してかへることの出來

得るものではないのだ。全體眞理と云ふものは、一つなものであるのだ。だがその論じ方は、色々と違ふのだ。丁度佛教でも、同じ眞如の性徳を、主觀から論じて、是心是佛、是心作佛と云ふのと、客觀から論じて、常來普照、攝取不捨と云ふようなものだ。それで論じ方が違ふからと云うて、夫で以て、其根本の眞理が違ふと云ふ譯には、ゆかぬのだ。論じ方覺り方觀じ方は、違うても、兎に角、其眞理の全體本義を捉へ得て居れば、夫でよいのだ。夫が絶對不二と云ふ妙境であるのだ。

夫はそうだが、その茲に一つよく注意せねばならぬことがあるのだ。それは、その眞理は一つではあるが、此の眞理と云ふものは、之を見るもの、力量の如何に由つて、全部見えぬことがあるのだ。夫でその此大眞理の一部を見て居つて、夫を無上の珍と心得て居るものもあれば、又其半面丈を覺つて居つて、夫に至れり盡せりと、思つて居るものもあるのだ。夫が即ち、人で言へば、智愚の岐るゝ所で、教法では高下深淺の區別となるのであるのだ。佛教では、無始無終、生滅増減なき、宇宙萬物の妙體を眞如と名づけ、其本來固有、眞實如常なることを表象して居るので、此眞如所具の

作用、千萬無量の活動を名づけて生滅と云ふのであるが、此の生滅の萬有は、元來眞如の所具する性徳であつて、眞如即ち常住不生滅の妙體と、生滅の万象とは、決して前後新舊を分つべき境界のあるものではないのだ。眞如が万象を具有して居るか、ら決して單純無相の空理を根源とするものではないのだ。又眞如と万象とが、體相の關係を有して居るから、能所の分別體用の隔歴がないのだ。法界の眞理本義と云ふものは、最早此れ以上に論ずることの出來るものではないのだ。法界の眞理の極談だ、大聖寶驗の誠説であるのだ。眞理の全部を盡した説だ、そこに成ると、彼の耶蘇教などでは、萬物庶類の外に、造物主と云ふものを立て、能造所造を分別して居る。之は、どうも透徹せぬ考と謂はねばならぬ。こゝに云ふ説は、丁度佛教で云ふ眞如と生滅とを全く別々に觀て、各々其半面を採つて、之を本末、神人に配説したのである。のだ。全體一物であるべき者を、かやうに截斷して、能所に分けて、神と萬物との交渉が、隔離して、兩ながら、徳用を缺損する譯になるのだ。殊に神は無始であるが、萬物には、有始で、無始から有始を造作すると云ふやうな、法爾天然に具つた戲諧の話になつて、くるのだ。どうも、こゝに云ふ議論では、窮塞して、いかぬのだ。夫で外教の造物主を立

つる説と、佛教の事理圓具説とは、其優劣差異は明かであるのだ。どちらが合理であるか、どちらが満足なかと云ふ事は、誰が聞いても分るべき筈だ。そこで將來の宗教と云うても、道理に叶はぬ眞理に合せぬ所説が盛になつて、合理満足の所説が滅亡すると云ふ譯は、あるまいと思はれる。だから佛教所説の本義は、眞理の全般を明にした。千古不變の點があるからよしや、其外形に多少の變動を生ずることはないとは限らぬとして、其本義は決して變るものではないのだ。

夫からその眞如性徳の、無始無終寂然不動なる點を指して、法身の體と名づけ、此性徳が、無量萬差の徳用を具有して、酬因感果の事相を現はすのが報身の相で、此の萬差の徳用を明にするのが智で、性徳の本源は平等で、此平等の本義を體して、萬物等濟の働を起すのが慈悲で、悲智の二徳は一切萬徳を惣括して居るものだ。此の悲智の徳用は、萬差の法と平等の體とを象りたる者で、體相圓融の一切萬物には、孰れも此の性徳が具有し居らねばならぬのだ。夫が即ち一切衆生悉有佛性と云ふ、深甚の義理になつて來るのだ。そうして、又此性徳が隨縁して、漸次に進趣發動する點が即ち進化發達で、草木國土悉皆成佛と云ふ、深妙の道理も出て來るのだ。夫でどんなも

のでも、如説修行、如理進趣すれば、成佛せぬことはなく、物として眞源に歸せぬことはないのだ。迷悟不二とか、佛魔平等とか云ふのは、此邊の消息を云ひ現はしたのだ。此の意味を主觀に説けば、聖道門となり、客觀に従へば、淨土門となるのであるが、之れは只其の入理の階路、入道の門戸を別にするまでの話だ。この通りに一切萬物が、皆こう云ふ靈徳を具有する點から見ると、所謂汎神教で、又萬物の外に造物主と云ふもの、本體と云ふものを別立せぬ所から見れば、無神教であるのだ。無神教と云うても、唯物論のやうな無神教はいかぬのだ。又有神教でも、萬物の外に不思議な神を立つること、即ち因果自然の大法の上に神を立つることは、全く妄見なのである。から、悉有佛性と云ふ側から見、又生滅萬差の諸法の本體たる眞如の性徳を、悲智の活動と見ると、この汎神教でなく、到底安立満足の出來るものではない。そうして、此の汎神教の立場から見れば、法界悉く我が體、三世悉く我が性で、煩惱生死は、即ち是菩提涅槃で、法界總べて悲智の活動、盡十方無量光明土と云ふことにもなるのだ。此れ迄達観すれば、厭世とか、樂天とか、現世主義とか、未來主義とか云ふ戲論は、形なしになつて來るのだ。それから又、悉有佛性の理で、自力進修と云ふことも、勿論よ

い。が。一。切。衆。生。萬。物。皆。一。つ。の。妙。體。眞。如。の。性。德。の。活。用。と。見。れ。ば。此。本。源。に。投。入。す。る。他。力。攝。取。と。云。ふ。こ。と。は。本。體。と。現。象。眞。如。と。萬。物。と。の。離。れ。ら。れ。ぬ。關。係。で。他。力。攝。取。を。離。れて。自。力。進。趣。と。云。ふ。義。は。成。り。立。た。ぬ。と。も。云。ふ。こ。と。が。出。來。る。の。だ。

要。す。る。に。此。宇。宙。廣。大。の。物。體。は。全。く。悲。智。二。德。の。活。動。す。る。所。で。あ。る。か。ら。此。大。能。者。を。尊。重。し。我。人。は。此。の。大。能。者。の。一。部。分。一。支。體。に。し。て。全。體。の。大。能。事。を。輔。翼。贊。助。せ。ね。ば。な。ら。ぬ。も。の。で。あ。る。と。云。ふ。と。を。よ。く。覺。悟。し。て。殊。勝。に。立。働。く。の。が。一。番。よ。い。の。だ。

夫。が。佛。陀。教。の。骨。子。で。大。乘。佛。教。を。傳。持。す。る。も。の。は。皆。此。の。精。神。が。な。く。て。は。な。ら。ぬ。の。だ。こ。れ。丈。の。覺。悟。こ。れ。丈。の。精。神。が。あ。れ。ば。そ。れ。で。別。に。な。ん。に。も。八。釜。敷。穿。鑿。も。議。論。も。い。ら。ぬ。の。だ。(本。稿。氏。の。校。閲。を。經。す)

●「理窟と信仰」の一節

境野黄洋

世人は宗教的信仰といへば、何か超自然的のものにて、世事經營の外に無限を慕ふ向上的傾向を満足するもののみ思ふか如し。斯る超自然的宗教は、やがて厭世教とならずんば止まず。一燈の食一瓢の飲、陋巷にありて、孀然として樂みを改めざりし顔回は、決して厭世的人にはあらずして、獨り天命に安んじ、泰然として憂へず、しかも孔門の諸子と共に、道を行はんかために天下に流浪したる、現世流の人なりしにあらずや、余は彼の如きを名けて信仰あるものといはんとす。然るを後世誤て、世事俗事を斥けて、世外に清貧を樂むを賢人君子の理想とするに至りしは愚なりといふべし。清貧は老莊亞流の墮落せるなり。孔門の七十子は、世事經營のために東西に奔走したりしなり。吾等は新信仰を願回流ならしめんと願ふ、吾等が、老莊流に親しかりしは吾等の取らざらんとする所以なり。(「新佛敎」一巻の五號)



植村正久

イヤ御照會に對して、御斷りしたように、見掛の通り、丁度雜誌の發行やなにやで、大層忙しく、來月は早々旅行するので、其下旬になれば大分閑が出来ますから都合がよいのです。併し折角のお出でですから、三十分位で宜敷なら、今お話を致します。別に順序を立て、纏まつたお話は出来ませぬから、何なり御質問下されば、夫れに應じて卑見を述べましょう。

ハ、全。體。の。宗。教。意。識。と。云。ふ。も。の。は。ど。う。し。て。も。そ。の。神。秘。的。と。云。ふ。よ。う。な。部。面。が。加。味。し。て。居。る。も。の。で。單。に。理。性。丈。の。も。の。で。は。な。い。の。で。す。夫。で。宗。教。と。云。ふ。も。の。は。理。性。の。要。求。し。理。性。の。満。足。す。る。丈。で。は。い。か。ぬ。の。で。す。理。性。の。要。求。す。る。所。は。宇。宙。人。生。の。

解釋であるから、哲學や、其他の科學で之を満足させる事が出来まいやうが、人間には單に理論則ち解釋丈では満足の出來ない點があるのです。夫から又實行と申しましても、國家社會や、人間相互の義務とか云ふような事を行ふ倫理道德と云ふもの、換言すれば人間が人間らしいことを行ふと云ふより以上に、猶希求して止むことの出來ないものがあるのです。夫で、宗教と云ふものは、哲學以上、倫理以上の者である。と云へるのです。勿論、哲學や、倫理が不必要だと云ふのではない、又宗教の中には哲學も倫理もあるのですが、哲學より異つた倫理よりも以上に、宗教の根底があるのです。夫で、こゝに云ふ理論的に解釋の出來ない高遠の根底に立つて居る者ですから、神秘的だとか云ふような事に申すようになるのですが、兎に角吾人の精神作用と云ふものは、科學的に單純に解説し去るとの出來ないもので、其解説を超越して居る精神作用の中樞本源が、即ち宗教意識とも云ふべきものでありまして、夫から又宇宙と云ふものも、中々科學的説明の及ばぬ點があるので、外界に於ける宗教の客體とか云ふべきものは、此科學的説明と超越して居る本體であるのです……佛教でも、あの觀音經ですなア、あれがその一番宗教的意識を巧に寫し得たもので

あるように思はれるのです。わゝ云ふ主意で觀音を拜すると云ふことは、その宗教意識の餘程發達したものと云はねばならぬのです。阿彌陀さまを拜むとか云ふやうなことは、まだ觀音經のそれに比しては、遙に迂遠漫散な信仰とでも云ふべきものです……そうです、全體汎神論と云ふものは、夫は哲學であるのです。即ち理論上の事です。夫で汎神觀が宗教として現はれる時には、いつでも多神教になるのです。所がその多神教が一段發達すれば、どうしても一神教にならねばならぬので、又宗教的意識は、是非共それを要求するのです。ですから汎神論は理論としては眞に巧なものですが、宗教としては殆んど價のないもので、結局多神教となるより外、仕方がないので……基督教でも、舊約聖書の中から、その汎神論の意味は澤山あるのです。併し汎神論を尤も巧に説いてゐるのは、夫は佛教の方でしょう。夫で佛教は、理論として、哲學としては、頗る發達して居るものでしょう。しかし理論の上から信仰を得、安心立命の地を定むるのは、餘程困難であるのです……どうしてもその汎神論を多神教にせまいと思ふ時は、その理想的とか云ふような、單に主觀的になつて仕舞ふのです。所が宗教は主觀的丈ではどうしても薄弱であることは、極めて

見易い事實なのです。……ハ、よくは存じませぬが、そう云ふ風になると村上博士の彌陀を理想化すると云ふのは、それは即ち宗教を主観的丈のものにして仕舞ふと云ふことになりはしませぬかなア。そうなればそれはいかぬ筈ですなア。……如何にもその一切を主宰する唯一の神がなくてはいかぬのです。佛教の方でよく云ふように神を立てるとか、佛を建てると云ふのを云ふのですが、あれはいかぬのです。人間の方から建てて居るのではないので、客観界に必然的に存在して居るのです。……そうです。勿論人格的であるのですが、夫が吾々を人格と云ふ如き、不完全の人格ではないので、完全な圓滿な人格的であるのです。不完全な吾々と同一な偏頗な人格的と云へば、わるい。知らぬが、完全な人格と云へば、何にも不都合はないのです。又夫れから吾々の宗教意識は、そう信じられるので、夫が一番堅固な信仰で、安心である。とを自覺して居るので、併し一神論とか、神が人格であるとか云ふとは、まだまだ末の議論であるのです。若しそれ丈なれば、色々な議論が其間に起りました。又一神論よりは汎神論の方がよいなど云ふものも出て來ました。……が、私共は今一步を進めて、基督そのものを直ちに神とし、唯一神の顯現實在の活現と信ずるので

全躰その日本では、從來佛教が國教と云ふような姿で、人心を支配して居たので、夫から又佛教は理論としては餘程發達して居るのですが、實際に於ける國民の信仰と云ふのは、非佛教と云ふべき點が多く、全く迷信ばかりと云うてもよいようなわんぱいで、動物崇拜とか、自然物崇拜と云ふような、下等な多神教が流行して居るので、夫から又是等迷信的崇拜をやらぬ者は、其信仰と云ふものが甚だ散漫で、宗教意識と云ふものが遅鈍で、一向活動して居らぬのです。夫がその一方には、國家社會の發達せぬ理由、即ち發達の原動力の乏しいのと、一方には、人心の腐敗墮落する根源であつたので、夫で今後はどうしても、その一方には、種々の迷信を排斥して之れに代はるべき信仰を興へ、又他方には、無信仰や、信仰の散漫して居るものを統括してやらねばなりません。夫をするには、どうしても、一神教でなくはいかぬのです。迷信的崇拜を排斥して、その代りに、單に理窟を信せよと云うても、夫では決して成りませぬ。夫から又民心の統一を圖るには、一神教が尤も都合がよいと云ふことは、幾多の事實が之を證明して居るのです。……どうしても、佛教よりは基督教

の方が信仰が堅固なようです。従つて活動力も盛です。……夫から又事實の上
 に就いて見てもどうも基督教の方が品行の點でも智識の點でも優等なものが多
 いのです。なア基督教も日本では目下餘り振はぬのですが、夫は外形上のことで、基
 督教的思想と云ふものは、深く社會の中樞を占めて居る人士の頭に浸潤して來
 て居るです。

それ○之○れ○で○す○な○ア○觀○音○經○で○し○よ○う○こ○う○云○ふ○工○合○に○説○く○の○は○餘○程○他○の○お○經○よ○り○も
 宗○教○意○識○の○發○達○し○て○居○る○の○で○し○よ○う○佛○教○の○方○で○は○こ○う○云○ふ○點○は○餘○り○尊○ば○ぬ○の○で
 す○か○ハ○成○程○大○道○長○安○と○云○ふ○人○が○そ○う○云○ふ○こ○と○を○や○つ○て○居○る○の○で○す○か○そ○れ○は○一
 つ○會○う○て○話○を○聞○き○た○い○も○の○で○す。

ハ、如何にもそう云へば、海老名君あたりの意見には、多少違ふ譯になるでしょう。
 ……要するに私のは基督の神格を信するのですから。

我徒は獨斷を排斥す乃汎く現代の名士三十餘家を訪ひ其の將來の宗教に關する意見を叩いて茲に此の書を公にす
 我徒は自由を尊重す乃強ひて同一典型の下に人を律するに忍びず敢て各種の信仰を開展し善く大方の擁護に任ず

將 來 の 宗 教 終

の方が信仰が堅固なようです。従つて活動力も盛です。……夫から又事實の上
に就いて見てもどうも基督教の方が品行の點でも智識の點でも優等なものが多
いのです。基督教も日本では目下餘り振はぬのですが、夫は外形上のことで基
督教的思想と云ふものは、深く社會の中樞を占めて居る人士の頭に浸潤して來
て居るです。

それ○これ○です○な○ア○觀○音○經○で○し○よ○う○こ○う○云○ふ○工○合○に○説○く○の○は○餘○程○他○の○お○經○よ○り○も
宗○教○意○識○の○發○達○し○て○居○る○の○で○し○よ○う○佛○教○の○方○で○は○こ○う○云○ふ○點○は○餘○り○尊○ば○ぬ○の○で
す○か○ハ○成○程○大○道○長○安○と○云○ふ○人○が○そ○う○云○ふ○こ○と○を○や○つ○て○居○る○の○で○す○か○そ○れ○は○一
つ○會○う○て○話○を○聞○き○た○い○も○の○で○す。

……如何にもそう云へば、海老名君あたりの意見には、多少違ふ譯になるでしょう。
要するに私のは、基督の神格を信ずるので、……

將 來 の 宗 教 終

附 録

我徒は獨斷を排斥す乃汎く現代の名士三十餘家を訪ひ其の將來の宗教に関する意見を叩いて茲に此の書を公にす
我徒は自由を尊重す乃強ひて同一典型の下に人を律するに忍びず敢て各種の信仰を開展し善く大方の撰擇に任す

◎達磨波羅氏を訪ふ

縦横

僕のキラヒな標井義肇君から電話がかゝつて、ダルマ・パーラ氏の來朝したこと、それが駿河臺の浩養館に居ること、を報せて呉れた。さうして其次手に更に言葉を添へて、同氏が前年神智學會などに關係して居た頃とは違つて、餘程考が『新佛教』的になつて來て居るから、早く行つて會つて來玉へと、左ながら早く行かねば、ダ氏が解けてしまつて、食へなくなりでもするかのやうな注進であつた。

夫れ面白いといふので、半分は其の新佛教を聴くつもり、半分はこちらの新佛教を聴かせるつもりで、早速自轉車を駿河臺に歩かせた。一寸斷つて置くが、僕は病氣以來醫者から自轉車を疾走させることを堅く禁じられて居る、だから「飛ばせる」など、小意氣なことを言はない

で、「歩かせる」といつたのだ。

初の意氣組はこの通りえらかつたが、さても事志と違ふとはこんなことでもあらうか、駿河臺の上り口で高楠博士に會つた。矢張り之からダ氏を尋ねるところだといふから、幸ひと一所に連れて行くことになつた。之がそも、僕の軀軻不遇のいはれで、博士とダ氏とは、今より十三年前、ダ氏の熱病に罹つた時の話から、梵文の經典やら印度の歴史やらに話し及んで、ツリピータカがどうの、ディーガニカがかうのと、一面向白くもない話になつて來た。僕はツリピータカとは、ロビダスの弟で、矢張エバミノンダスの配下に屬した者で、いもあるかと思つたら、お経だと分つたので、聊か面喰はざるを得なかつた。

二時に約があるといつて、高楠博士は歸つてしまつたから、僕は先づ武藏の國は大森の住人なる由を名のり、簡単に我徒の運動を叙して

さて、ダ氏の所謂新佛教を説かれんことを希望した。僕はダ氏と手紙の取りやりは屢々したが、面會は今度が二度目である。前には今から十年前、芝の堀内静宇氏の寺で逢つたので、其時は學校から歸途友人に誘はれて行つて、黙つて一時間ほど座つて居た。いけであつたが、今日色々話した末、とうとうダ氏は其時のことを思ひ出した。櫻井君が、印度人は世界第一の記憶のよい人種だといつたが、成程と思つた。

ダ氏は先づ、此度日本へ來た理由を擧げた、一は商業工業上の目的の爲で、之は今此に語るを要しない。二には印度佛教徒大會の特派員として、亞細亞全洲の佛教徒の大結合を謀るといふ使命を帯びて居るので、之には同會の總監、スマンガラ僧正の信任状をもつて來て居る。こんなことも今特に書き立てる必要はない。

「此等表むきの用向の外に、特に信任すべき佛教徒にのみ語つて、其同意を得て新運動に着手

したいと思ふとがある。自分はパーリ原文の經典を精讀して、眞個純粹の佛教なるもの、何たるかを知り得たのである。眞に佛陀の説いた教は之より以外にない、之より以外のものは、凡て後世のまぢりもので、いはゆるがみくねつた不正の佛教に外ならぬ。」

「純粹なる佛陀の教には、迷信もない、儀式もない、宗教は現世の人類の爲に盡すべき一の活動を意味するものである。寺院の中に默座し、合掌し、低頭し、鐘を叩き、經を讀むが如きは、抑も末の末なるもので、佛教の精神は斷して此の如き邊に存するものでない。」

「といふやうなものは、パーリ語の并ナヤ經、ピタカ經を通讀して、初めて知り得べきことで、今日多くの僧侶や信徒は、殆ど之を讀まない。偶々讀んでも、僅に其の一部を讀んだばかりで、滔々皆佛教の本旨を誤り解して居る。」

「ピタカ經中のチュラワガ、マハワガ、并ブ

ハンガ(?)等を讀むと、衛生のと、衣食住の問題がくはしく説明せられて居る。デイガニカヤ、マデマニカヤ、サミヤツタニカヤ及クダカニカヤ等をよむと、倫理、心理其他の哲學上の問題を論じ、又其の當時印度に行はれた諸の僞信仰を評論して居る。此等は是非とも佛教徒の熟讀すべきものである。」

「佛陀は、パーリ語を用ひて法を説いたものに相違ない。だから佛陀の本旨は、パーリ語の經文に求むべく、佛教を知らんと欲せば、必ずパーリ語を學ばなければならぬ。自分は以上の經文の大意を英譯して出版するつもりで、既に其の大部分は終つたが、残りは日本で完結する積りである。此の英譯は、錫崙の太守が、其の出版を引受けられて居る。」

それから日本には三ヶ月計り滞在すべきと、右の新信仰と共に、斷然神智學會と絶縁したことを話して、談漸く佳境に入つた頃、平井金三

君が來訪せられた。平井君の快辯に壓倒せられて、僕は轆轤不遇再び江湖に放浪することとなつた。併し平井君は大抵僕の間はんとする所を問ひ、語らんとする所を語つてくれたので、之はまた恕すべしであつたが、其の次に川上勳六等が尋ねて來たに至つては、もうとても堪らない。

川上君は、いはゞダ氏とは竹馬の友で、一見手を握つて「能く來たのう(川上君の口調を學んでいへば)」といふやうな始末、北京龍城の話を位から始まつて、それから印度のチャンチャラ村の薪屋の伯父さんは、今日も達者で居るか、アウンバラバ町の酒屋の娘は、もう嫁入したか、どこやらの寺の前に居た小犬は、何匹子を生んだか、誰やらの庭の芭蕉は大きくなつたらう、などといふやうな話で、流石の僕も辛抱しきれなくなつて、遂に暇を告げた。

●根岸庵を訪ふ

不可得

塵事の多忙なると、訪ひはぐれて何となく氣後れするまゝ、今日こそは訪つれんと思ひながら、いつもく等閑に過ごし、こと、早殆んと二ヶ年、しかも此間『日本』、『ホト』、『ギス』等の紙上にて、或は病革れりと聞きて痛心し、少しく怠れりと讀みて打ち喜び、大人の事は一日も忘るゝ能はざりしが、愈々一度帝都の地を去るに臨み、亦見ゆることを得るやも覺束なしと思はれし故、去月十三日、永く訪づれざりし正岡大人を、根岸の草庵に訪問せり。

例の怪しげなる狸横町とか、鷲横町とか云へる細長き路次をたどりて、十年病臥の宅を訪ひ、老母の君、妹君に會釋して枕下に打ち通れば、大人特有の挨拶なる、「ヤ、」の聲の二ヶ年前に比して、いたく力なきに胸先づつふれたりき。

豫て左千夫君より、相逢うて暫くは氣合そぐはず、もの云ふことも苦しみなりと、云はれし由を聞き居たりし故、我よりも談り出です、様子をもり居れば、瘦せ果て給へる眼の、かつきりと角立ち、碧梧桐君が秀真君の型像について、大人の眼は所謂鳳眼にて云々と書かれしことの又更に適切に、げにもと感じたりき。やがて、

「君の宗教上の考も、去年『佛』を話す土筆の袴剣きながら」と日記に誌した時より、餘程違つたねエ。『新佛教』を折々見るが、此頃は祈禱などは入らぬやうな考か、フウウの頃はそうで無かつた様であつたが……」

「曉鳥と云ふ真宗の坊さんが時々来るが、僕は理窟は知らんが、善とか悪とか云ふことについては、あの様に平等に考へる方が氣に入るが……善とか悪とか云ふことは、解脱することについて論せねばならぬかしら、そう全く差別を離れるんでない……全く空になるのでもないだるって……」

「坊さんの妻帯問題は何うさまつたか、組織をかへねば不可んか、中々むつかしいだらうな。僕は人身攻撃は悪いと思はんがな、悪い……と云ふ奴が、得て悪事を働いて居るから……。僕などは悪事をしやうとも思はんから、倫理上の理窟はうるさい……善悪々々とやかましく云ふ奴の方が、悪い事を餘計にする様だ。」

余は大人のかく元氣よく話さるゝにつりこまれ、碧梧桐君に頼まんとて持ち來れる書畫帖に、大人にも何か願ひたし、強ひてにはあらねど、云ひ出でしに、「何か書いてもよいです」と云はれしが、直ちに眼をとちて眠るが如く、又開きてすぐ閉ぢ、餘程疲勞せられし様なりし故、是れでは云ひ出すのではなかりしと、非常に後悔し、いつそ断りをなして歸らんかと、とつおいつ思ひ居る間に、やがて畫の具と呼ばれ、その畫帖をとのことに、余はおづ／＼持ち行けば、仰臥

らうな。君はどんな悪人でも、念佛すれば助かると云ふことは信せぬか……主觀的に安心したいわけではいかぬ……せぬよりはよいか……其價値は十分認めても、外に害を及ぼすやうな、間違つた信仰心ではいかぬ？フウウ。」

餘程疲れ給ひし様なりしが、母君と呼ばれて藥を呑まれ、原稿用紙に、仰向けに臥ながら、『病床六尺』を半ペインばかり書き付けらる。此間余は御老母の示し給へる寫眞などを見つゝ、ありしが、「この頃おかげんは宜敷いのですか」と問ふと、「どうも悪くて困ります、今は興奮劑を呑んだのです」との御答に、覺えず悚然として打ち振へり。

「君はこれからどうするかね、一五坊から君の寺院の事は聞いたが、歸るとすると、説教の仕合せなども餘程違ふだらうな、そう急にはいかぬな、そう云ふつもりで氣永く眞面目に説教して居つたら満足だらうな、まだ野心があつて困

のまゝにて、青色の蝋蠟を一匹畫かれ、其わきへ少し大きく、「勇猛心」とかき、下へ小さく「臥病十年かまきりのごとし腕に筆を握りて、子規子」と誌され、そのまゝ筆を枕下へ投げて、又眼を閉ぢ給へり。

余は書きて貰ひし歎びよりも、大人を苦しめしことを恐ろしく思ひしが、靜に其畫と題字とを見れば、大人の瘦せ衰へながらも、尙一片の元氣鬱勃たるものあるを覺えて、忽然非常に力を得たる如く感じたり。曾て『加持世界』の記者に話されし如く、大人は日蓮上人を非常に好まると共に、日蓮上人に近似して居る大人の性格は、實に適切に此數字の上に書き出されたり。加之余は是れを以て、大人が余を策勵し給ふもの、如く思ひて、此上なく有難く感じたりき。

「君等が折々歌や俳句を作ると愉快だらう、僕はもう苦しくてたまらぬ、小説を讀んでも批評する積りで讀むから、穴ばかり見えてな……」

専門にすると眼のみが高くなつて、面白いと思ふほどのものが出来ぬから、人のも感服するのがなくならぬからな。

「愚庵もそう云うて来た、苦しいをりは、うめくより外はないと安心するのが悟りだと、愈々苦しくてたまらぬ時には、神も佛も念ずるいとまがないでな。」

余は長居して、大人を疲らせては本意らなすと、離れがたなき心地するを、十一時に至りて、辭して歸りぬ。

嗟病に臥して己に十年、而して此夏はとてもえ越すまじと自から思はれ、同人の氣遣ひしとも亦屢々なりき。今や大人の太厄なる夏も来りぬ、而して自らは苦しきのみ世に活くる慾望もなしと云はるれど、一度大人に知遇を得しもの、余の如きすら、たとへ病はいえずとも、大人の病の一日にても長からんことを願ふものを、嗟、天何を斯人の苦悶に一日の閑を興ふるに吝

なるや。

●訪問餘談

訪問子

(一)

釋清潭氏、常に自ら呼びて、山僧といふの癖あり、人亦之を諱名して、目して山僧といふ。訪問子一日氏と村上博士の居を訪ふ、座に上杉文秀氏あり、談偶ま佐々木祐寛氏死去の事に及ぶ。博士曰く「佐々木が死んで山葬といふとになつたそうだが、山葬といふとなんだか山へでも葬る様だ、山葬にも色々あるナ」と、三人之を聞き、相顧みて覺えず哄笑す。博士獨り其の何の理たるを解せざるものに似たり。

高山林次郎氏、近時頻りに日蓮上人をかつぎ、常に釋迦、基督と並稱するに至る。『太陽』に掲ぐる所の文中「たい見よ、釋迦基督日蓮の教は

古今を通じて渝らず」の句あり。大内青巒居士之を評して曰く「なんだか大人の傍へ小供が並んだ様で、まことに變だナ」。

村上博士『太陽』に寄する文中、「釋迦基督を始として、各宗派の高僧諸氏云々」の句あり。雲照律師讀んで此に至り、巻を投じて曰く「釋迦基督とは何だ、釋迦と耶穌とを一幅對にされてたまるもんか、こんな風だから、平常の心がけがはや違つて居る」と、浩嘆良久しうす。

雲照律師、談話中には「何々だどもそれはいけぬ」などいふ、「だども」といふ語屢出づ、越後辯に似たり。川合清丸氏は「御座ります」といふ様なる、極めてさちようめんの言葉遣ひ多し。談話中、最も面白きは井上哲次郎氏なり。椅子によりて斜に身をそらせ、獨逸語、英語等を交へて、壯快に辯じ去り、間々また一種の手真似を其の急所に挿み、一氣呵成、滔々説き去り説き來る、訪問子殆んど茫然として自失し、吾我を忘る。

のまゝにて、青色の螳螂を一匹畫かれ、其わきへ少し大きく、「勇猛心」とかき、下へ小さく「臥病十年かまさりのごとき腕に筆を握りて、子規子」と誌され、そのまゝ筆を枕下へ投げて、又眼を閉ぢ給へり。

余は書きて貰ひし歡びよりも、大人を苦しめしことを恐ろしく思ひしが、靜に其書と題字とを見れば、大人の瘦せ衰へながらも、尙一片の元氣鬱勃たるものあるを覺えて、忽然非常に力を得たる如く感じたり。曾て『加持世界』の記者に話されし如く、大人は日蓮上人を非常に好まると共に、日蓮上人に近似して居る大人の性格は、實に適切に此數字の上に書き出されたり。加之余は是れを以て、大人が余を策勵し給ふもの、如く思ひて、此上なく有難く感じたりき。「君等が折々歌や俳句を作ると愉快だらう、僕はもう苦しくてたまらぬ、小説を讀んでも批評する積りで讀むから、穴ばかり見えてな……」

専門にすると眼のみが高くなつて、面白いと思ふほどのものが出来ぬから、人のも感服するのがなくならぬからな。」
「愚庵もそう云うて来た、苦しいをりは、うめくより外はないと安心するのが悟りだと、愈々苦しくてたまらぬ時には、神も佛も念ずるゝまがないでな。」

余は長居して、大人を疲らせては本意らなすと、離れがたなき心地するを、十一時に至りて、辭して歸りぬ。
嗟病に臥して己に十年、而して此夏はとてもえ越すまじと自から思はれ、同人の氣遣ひしとも亦厭々なりき。今や大人の危なる夏も來りぬ、而して自らは苦しきのみ世に活くる慾望もなしと云はるれど、一度大人に知遇を得しもの、余の如きすら、たとへ病はいえずとも、大人の病の一日にても長からんことを願ふものを、嗟、天何を斯人の苦悶に一日の閑を與ふるに吝

なるや。

●訪問餘談

訪問子

(一)

釋清潭氏、常に自ら呼びて、山僧といふの癖あり、人亦之を諱名して、目して山僧といふ。訪問子一日氏と村上博士の居を訪ふ、座に上杉文秀氏あり、談偶ま佐々木祐寛氏死去の事に及ぶ。博士曰く「佐々木が死んで山葬といふとになつたそうだが、山葬といふとなんだか山へでも葬る様だ、山葬にも色々あるナ」と、三人之を聞き、相顧みて覺えず哄笑す。博士獨り其の何の理たるを解せざるものに似たり。
高山林次郎氏、近時頻りに日蓮上人をかつき、常に釋迦、基督と並稱するに至る。「太陽」に掲ぐる所の文中「たい見よ、釋迦基督日蓮の教は

古今を通じて渝らず」の句あり。大内青巒居士之を評して曰く「なんだか大人の傍へ小供が並んだ様で、まことに變だナ」。

村上博士「太陽」に寄する文中、「釋迦基督を始として、各宗派の商僧諸氏云々」の句あり。雲照律師讀んで此に至り、卷を投じて曰く「釋迦基督とは何だ、釋迦と耶穌とを一幅對にされてたまるもんか、こんな風だから、平常の心がけがはや違つて居る」と、浩嘆良久しうす。
雲照律師、談話中には「何々だともそれはいけぬ」などいふ。「だとも」といふ語屢出づ、越後辯に似たり。川合清丸氏は「御座りまする」といふ様なる、極めてさちようめんの言葉遣ひ多し。談話中、最も面白きは井上哲次郎氏なり。椅子によりて斜に身をそらせ、獨逸語、英語等を交へて、壯快に辯じ去り、間々また一種の手真似を、其の急所に挿み、一氣呵成、滔々説き去り説き來る、訪問子殆んと茫然として自失し、吾我を忘る。

雲照律師年已に七十餘、言なほ明瞭にして説いて倦むを知らざるに似たり。訪問子の十善戒寺に至るや、約するに數十分の面謁を以てす。既に其の談話の緒を開くや、甲となり、乙となり、縦横の辯、述べ終りて凡そ三時間。川台清九氏の居、床に觀音立像の畫幅を掲げ、其の前に日本刀の横はるを見る。顧みれば豆座中に散亂す。蓋し前夜節分なりしによる。以て其の人を想見すべきなり。

雲照律師の居は、上段の間にして、通常の座敷より高きと數尺。下段座敷は凡そ八疊許、雜僧給事の人、皆下に居りて律師の命を聽く。律師訪問子をして上に登らしめ、「太陽」を取りて之を朗讀せしむ。訪問子唯々、然れ共心密に閉口す。

至り、「廿年來釋迦教を弘通せんとする志、嘗て一日も其の節を變せず」といふに至り、言頗る毅然、稍慨然の態を帯びたり。

前號の「新佛教」先づ精神主義を攻撃し、而して其の發行の翌日、訪問子浩々洞に至りて清澤氏の意見を叩く。訪問子の志、固より將來の宗教を聞かんとするにあり。然るに浩々洞の兩三子、また來りて余の座を圍み、頻りに余に對して包圍攻撃を試む。人あり評して「訪問子の浩々洞の訪問は、言ひ譯の爲めならん」と、また人あり「訪問子浩々洞に至りて論戰を試みんとせり」と、皆固より慮なり。

已に浩々洞を訪ひ、また目白を訪ふ。人あり訪問子を評して曰く、「彼は厚顔の徒なり」と。訪問子自ら以て道に忠なるものとなす。

澤柳政太郎氏を訪ふ。氏多く文部省出勤時間前其の客に接す。午前八時訪問子の至る時、既に兩三來訪の客あり。氏の其の説を述ぶるや、兩拳

を並べて之を懷にし、座蒲團の上に座して身を少しく後方にそらし、其の面多少上に向ふ。説くこと一時間許、火鉢の火既に形なく、茶碗の茶冷えて水の如し。

元良勇次郎氏、咄に近く、問を設くれば始めて乃ち答ふ。一問一答、到底他の人々の如く、自説を述べ盡くして數時間の長きに及ぶ類の人にあらす。然れ共言皆親切にして、説また多く日常研究の結果より演繹せらるゝ所。氏の面貌に接すれば、唯何となく學者といふものに遇ひしが如き心地す。

問に對して、最も心地よく明瞭なる答を得たるものは澤柳氏なり。氏音聲極めて沈靜にして、疾呼氣焰を揚ぐる類の人にあらす。唯其の論斷は至て明晰、また往々「これは自分の獨斷でさめて居るのです」といふが如き言を挿みて顧みず。「將來の宗教は佛教である、耶蘇教はだめです」。「新佛教の様なもの、到底無益で効果

のない運動です。」「佛教を盛にするのは、古來の風を墨守するに在るのです」などと、忌憚なく述べ去る所、頗る痛快に感ぜらる。

清澤氏は非常に議論好きなり。嘗て東本願寺に宗教法案運動の盛なりし當時、訪問子氏を森川町の寓に訪ひ、甲より乙、乙より丙、議論愈進みて朝より晝に至る。氏乃ち饗する晝飯を以てし、終りて再び開戦し、日全く没してなほ止まず。

氏燈を點じて余に晩食を興へ、食後に至りて談なほ容易に盡さず。既にして興未だ去らずと雖、唯夜の漸く深からんとするを恐れて、僅に辭し去りたるにありき。或人曰く、「これ清澤氏の議論好きなるがためにあらす、汝の議論好きなるがためのみ」と。未だ必ずしも然らず。

清澤氏は洵に議論のし懇くき人なり。彼をいひ此をいひ、何時の間にか議論の迷路に誘ひ入れられ、訪問子爲めに殆んど窮態に陥るとあり。しかも歸りて之を論理的に叙するに、訪問子の

論なほ多くは正し。蓋し清澤氏の言、往々詭辨に類するものありて、人を迷はしむるものあるなきか。呵々。
井上哲次郎氏を訪ひ、談日蓮上人のことに及ぶ。氏曰く、「日蓮上人の説は、天台と眞言との二つから重に取つて居るようすな。最初眞言で剃髮をして、それから叡山へ行つて學んだのだから……」と。訪問子答へて曰く、「獨り加之、淨土宗からも多く得て來て居る所があまりましよう。『觀心本尊鈔』にも、七字の題目の袋に、万善万行の功德をこめて、鉢根の衆生の頸にかけしむといふ様なことがあつたようす。これらは丸で淨土門の念佛と同じ解釋です」と。氏倉皇『本尊鈔』を携へ來りて曰く、「どこにそういふことがありますか、一寸搜して下さい」と。余の此の書を一讀せしは、今より五六年前のことにして、唯終りの方なりしと思ひしも、終に見當らず、甚だ以て閉口したり。

前田慧雲氏甚だ訥辯なるが如く、低聲にして容易に人と語らざるに似たり。しかも一たび口を開くや、往々にして氣焰人を壓す。其の訪問子に向つて、佛耶兩教の接近を説くや、訪問子即ち更に問うて曰く、「先生がそういふ御考は、近頃になつて出て來たものではありませんか」と。氏此に於て昂然として曰く、「イヤ、佛教と耶蘇教とは一つにならなければならんといふとをいひ出したのは、日本では私が第一番です」と。訪問子呆然。
前田氏の居室は頗る佳趣あり。火鉢、鐵瓶、茶碗、菓子器等に至るまで、言ふべからざる古色蒼然たるもの、み陳列す。井上氏に至りては、面會所、書齋、客間、皆これと漢洋の書にして、周圍悉く書ならざるはなし。川合氏の日本刀を横ふと、皆異色なりといふべし。
井上氏、村上氏の人相を評して曰く、「村上さんの肖像が『太陽』に出ています、中々宜いんです。

實際で見た時は餘り構はんもんだから、きたない様な顔ですけれ共、寫眞で見ると、あの眼のあたりは、如何にも寛仁の情が現はれて居て、宗・教家として、あの眼は實に活きて居ます。有賀長雄と並んで出て居ますが、とても有賀は比較になりません。」

(二)

曹洞宗は臨濟宗に比較して、洒々落落々の風に富む、所謂「破れ禪」に墮落し易きかはりに、イヤに横柄の風なしといふが一般の定論なり。村上博士曰く、「あれは多分臨濟の方は、一ツ／＼に公案を授けるので、即ち楷子禪だから、一ツ通つたとか、二ツ通つたとか言つて、見識ぶるかんだらう」と。余も亦しか思ふ。

或人曰く、「鴻雪爪といふ男は、到頭神官になつて仕舞つたが、あれは本山へ出たいのが、出られない、それが不平なといふ所からあつた

のだ。どうも禪僧とも言はれ、坐禪でもしたといふものが、本山へ出たいの、紫の衣が着たいのといふ様な考があるといふのは、馬鹿げたわけだ。西有穆山なんといふ男も、本山へ出たのが餘ッばどうれしさうに見えるが、呆れたものだ。」
西有穆山禪師は、面山和尚の學統を繼承し、而かも其の禪風は却て天桂の風ありと言はれ、森田梧由禪師は、天桂和尚の學統を承けて、却て禪風面山の着實に似たりと言はる。村上博士曰く、「イヤ穆山和尚は中々學者だ、禪僧であれほどの學者は少い」と。穆山禪師は面山の面影を存すればなり。
或人曰く、「西有和尚が村上さんのことを、どうも村上は學者ぢやと感心して居ましたッけ」と。御互に學者だ學者だといふも奇なり。
高田道見氏に會して曰く、「これから西有さんを訪問しようと思ふのですが、會つてくれるでし

「ようか。」答へて曰く、「會ひそうなもんです、君の名も兼ねて禪師は知つて居らる、様ですから……何でも君のことを、わりや斷見外道だ、高田はわりや常見外道だと、禪師が評したといふとを聞きましてよ。」

酒々落々を以て跨る曹洞宗中、特に酒々落々を以て自ら居る穆山和尚のこと故、訪は必す會ふならんと思ひ、能山出張所に至りて案内を乞ふ。小僧出で來りて、「本日大學林に行かれまして……大凡四時過ぎには御歸りになります」といふ。越えて數日、再び時をはかりて能山出張所に至る。取り次ぎの僧曰く、「遠方から訪ねて來て呉れたのであるから遇うてやりたいが、丁度少し具合が悪くて今按摩を取つて居る所であるから、また來て呉れる様」とのことにて、首尾能く玄關拂ひを食へり。佛教雜誌記者が、按摩と輕重を争ふの力なきは是非なきとなり、など、胸の中にて考へながら歸路に就く。途中や

アと聲かくるものあり、見上ぐれば曹洞宗の一雜誌記者、車上より帽を脱して、やア！東亞佛教會の托鉢一件以來、特に名の著はるに至りし南隱禪師を、白山神社下の一寺に訪ふ。寺側に小庵を構へ、一人此の中に居を占む。爐上に炬燵をしつらへ、布團を投ひ、之によりて暖を取りつゝ種々の談話をなし、時々炬燵の中より鐵瓶を出して、急須に湯を注ぎ、茶を出してはすむ。其の様如何にも無心なるは面白く感じたり。西有穆山師の顔は、縦短き、四角な、ぞして頗るりきんだ、氣張つた風あり。身體も大に、肩も張り、音吐朗々、先づ豪爽の氣味を有す。渡邊南隱師は、豫想に反し、極めて濃厚なる小身なる、可憐の容貌を有する老體なり。聲も至て細く、語尾常に何々であるゾイ」と、輕くゾイといふ音を附し、時々何々であるゾイ」と、南隱禪師に會つて、先づ第一に閉口したるは、

日本の醜業婦が、海外に航渡するとより、維新前京都に於ける淫賣婦の狀態、及び當時の書生等が、之に戯れし有様を説き殆んど際限なく、「將來の宗教」といへる如き、まじめの語の口をさる緒を得難きに至りたりしにあり。師余を何と思ひて、首に斯る話をせしものか。抑もまた擲論したるわけなるにや。

鐵瓶を股ぐらより出しては茶を出すかと思へば歸りには玄關まで送り出て、ちやんと坐し、叩頭して別を告ぐ。何だか變つたところが、ある様なりと思ひたり。或人曰く、「南隱さんは、不斷の交際上のこと、佛法の話をすると、たゞ訪ねて行つた人と別にして居ると見えて、たゞ訪ねて行つた人は、大變丁寧にする様だ」と。

雲照律師を訪問して、其の談話中最も驚きたるは、「宗教はレリジョンといふ、レリジョンは神と一つになるといふとちや」といふ、レリジョンの講釋を聞かされた時なり。今の青年、雲照

律師よりレリジョンの講釋を聞かんとは、誰人も思ひ設けざるところなるべし。

雲照律師の、龍が竹によりて天に登つたといふ話は、面白(い?)と思つて聞きたりしが、南隱禪師を訪うて、「東京の人間は、今や非惡極まる、因果の理として、何等か天地の異變なきを得ず。しかも今日なほ事なきを得る所以のものは、全く僧侶中、間々なほ『金光明經』等を讀誦して、國家の太平を祈願するものあるの功德ならん」と言ふを聞き、また一種の面白(い?)を感じたり。

海老名正氏を訪ふ。氏は基督教界に於ける、自由思想を有する一派の領袖なり。余の其の門を叩くや、氏將に外出せんとするの時なり。余の至るを見て、強ひて家に入らしめ、余辭するに其の用事を妨ぐるを以てすれども聽かず、語氣既に百年の知己に似たり。然るに余の氏に面するや、一夜元良博士の宅に於てするもの、僅

に一回に過ぎず。今此くの如きを見て、余密に氏の記憶に服す。既にして座敷に入り、互に「禮終りて、氏突然余に向つて曰く、「どなたで御座んしたか……」と。余始めて、氏の人に接するの道、知ると知らざるに關らず、常に斯くの如きを見るを得たり。

余、氏に向つて訪問録を草せんとし、將來の宗教につき、氏の意見を聞くことを得んと請ふや、「イヤあなたが御自身でそれに御出かけですか、これは恐れ入りましたな」といふより、説き去り説き來り、時には佛教に關する余が意見を問ひ、談絶えずして既に午砲を聞く、しかもなほ甲となり乙となりて、容易に其の結末に至らず。大道長安氏を訪ふ。氏もと曹洞宗の僧、後禪と真宗他力の法門とを融合して、妙力の念聖解脱を目的とする觀音宗を開き、自ら新佛教救世教會といへり。余氏と早くより相知る。初め余、氏の妙力に對し、「佛教は元來中道宗にして、自

とも他ともいふべきものにわらず。唯此の中道は摸索すべきこと難きが故、或は自力といひ、或は他力といひ、各其の誘入の門を開きて中道に導くのみ。初めより非自非他の妙力といふが如きは、實際的宗教の誘入門としては無意義なり」との意にて之を駁撃したるとありき。今より思へば、これ已に十年以前のことなり。氏、余に問うて曰く、「あなた方は、夫婦の房中のことを何と御考へになりますか」と余も此の問には聊か避易せり。「左様ですな……何と、いうて……」。「私共はこれについて、こう思ふのですか……」というて、示されしは「救世の光」に掲げられたる左の一文なり。「房中の春色は、花と花と相綻び、蝶と蝶と相樂む、秘々密々、他の得て見るべからず、伴ふべからざる歎天喜地にして、(中略)凡そ姪慾泥中にありて、大清淨なるは、觀音の三摩地門なり。……世人多くは房中には佛教なしと誤認す

恰も盲者の太陽を見ざるが如し、感ひべき哉。」

(三)

雲照律師が、七十餘歳の高齡にして、意氣の盛なるは驚くばかりなるが、特に近時月刊の雜誌等に注目して、能く之を讀み居らるゝは、また頗る感心すべきことなりと思ひたり。或る一雜誌記者、また律師の教を聞かんとして講を請ふ。律師時に僧園の徒に向つて書を講ずる最中なり。末注末疏數部を前に列ね、彼を見、此を開き、説き去り、説き來りて熱心また他を顧みず、而して聽講十數の徒、皆頭を垂れて華胥に遊び、一人の耳を之に傾くるものあるなし。記者之を見て、茫然また噤然。大内青嶺居士の口くせば、語尾に「あるのである」と繰り返すことなり。「そういふことは、決してないことであるのである」「それはまことに面白いのである」といふが如し。

居士また自ら、自己を私、即ち「ワタクシ」といふべきを、一種異様の發音をなして、「ワチキシ」といふが如く聞ゆ。近時「加持世界」に居士の談話の概略を掲げ、冒頭「わちきしは」と書き出したるを見て、覺えず失笑したり。南條文雄氏を訪ふ。氏の面目は、實行と、平凡と、謹慎との三なりといふべし。宗教は實行の外に何もなし。自分は平凡の他力念佛の説教の外に、別に説を有せず。少しは言ひたいこともあれ共、今日の身分にては謹慎して言はぬなりと。これ氏の缺點にしてまた氏の長所なるが如し。人或は氏の無能爲すなきを説くものあり、然れども氏が若し無能ならずして、仕事師なりしならば終に俗了せん。氏にして理窟ッばき心の者なりしならば、圭角稜々を免れず。氏が濃厚篤實、人をして春風に對するの感あらしむるもの、まことにこの缺點即ち長所あるによるなり。

坪内雄藏氏を訪ふ。曰く、「そういふ御注文なら、最初から御断りをするのでした。遠方態々の御出で、まことに御氣の毒なるも、これは堅く御断りを致します」として、断じて宗教上の意見を公にせずと言はる。百方辨解すれども容れられず。此に於て、落膽して將に辭し去らんとす。氏はそろ／＼懐中より四五枚の圖表を出して曰く、「何、全く私も宗教上のことを考へて居らぬのではありませぬので、固より世に公にすべきものでありませぬが、此の問題を決して忽にして居らぬといふしるしまでに、御覽に入れますのです」と、乃ち圖表を説明して漸く微に入る。余則ち其の一葉を與へられんことを乞ふ。博士直ちに快諾す。

坪内博士の居は、さすがに少しく異色あり。座敷は全く「へりなし」の疊にて、床脇に並べあるものは茶の湯の釜と樂器なり。

海老名正氏曰く、「何、私共の教會も、新佛教

で御使ひ下されて差支ありません。何時でも私共の方で使はん時には、御貸し申します。然し佛像を安置して禮拜をするといふ様なことになれば、私は構ひませんが、私一箇ではかりきめるわけにも行きませんが、そうでさへなければ構ひません。」

村上博士曰く、「君は朝晩の勤行をするか？」

せん？ 矢張りこれは、宗教家としてはする方が好い。どうもこれをせんではいかんと思ふが手」。

(四)

醫學博士片山國嘉氏は、極めて温厚篤實で、また極めてまじめなる佛教信者なり。其丸く肥え太りたる圓滿なる身體に、洋服を着けて、膝も崩さず端然として、時々微笑を漏らしつゝ、諄々として説かるゝ所は、先づなつかしき人なりと評すべし。

片山氏の佛教に對する意見は、科學と佛教とは能く調和す、即ち科學的宗教は佛教なりといふを根底とするもの、如し。其の耶穌教を信せざる理由如何を問ひしに、氏は「私は無神論者でありませぬから手」と言はれたるは、一言にして盡されたる返答と思ひたり。

耶穌教の人を訪ひたる時は、「親切なものだ」と思ひたり。よし少し「御上手なものだ」といふ意味を與には有つて居つても……佛教者を訪ひたる時は、往々にして「イヤな奴だ」と思ふことあり。何だか謙遜した様な、諷した様な、嫌味を並べ、それから最後は「イヤ雜誌などに御書き下されては甚だ困りますヨ」。雜誌の種取りは眞平御免だと言はぬばかりの御挨拶に遇ふことと往々これあり。

鳥尾得菴居士を訪ふ。音羽の幽邃閑雅なる邸宅。陸軍中將で、おまけに禪宗の御悟り流で叩き上げたといふ主人のこと故、餘程用心して、一喝

などを喰はぬ様にせねばならぬと、今日はフロツクコートの出で立ち嚴めしく(でもあるまい)謹んで參上仕つたが、「イヤ川合(清九氏)からかねて承はつて居りました、さア先づこちらへ」といふ意外の丁重な御挨拶で、あゝよかつたと胸を撫で下したり。

「誠に新聞や雜誌などいふものは、唯一時ちよいと人の話を聞いて書く、それが人の益にたればよいが、却て人の害になることがある。例へば耶穌教の教理を悪く言へば、耶穌教の人でも、そりや面白くない。其の教理は取らぬけれ共、其の人を悪むのではない。それに其の人を怒らして仕舞つては、益がなくて害のみである。全體あなたがおんなことを聞かうと言ふのは、私にはちつともわからん」とひねらる。さア御座つたナと、少し體を立て直して、我等の運動は金と勢力と時間とを消費してやりつゝ、あゝまでの運動であること。我等は御布施で活き

て居るものでも、雜誌の嵐で食つて居るものでもないこと、こんな運動が面白半分や洒落で出来るものでないと、我等はなほ年少にして、經驗少きものなれば、我等の主張と共に、世を指導すべき思想界の先輩の意見を公平に世に紹介するは、極めて必要なることを澄々(?)と説き去つたりしが、兎も角も自分の溜飲はこれで下り、居士も亦これにて多少顔を和げられたるを見たり。

「あなたは大内青巒を御存知ですか、アそうですか、あれは中々學者ですよ。私は禪の方をやつたので、佛教の研究と言つても、禪に關係のある本を讀んだ丈で、教相やなんかの方のことは、餘り知りませんです。居士また言へり。客を延見する居士の室は、西洋間にして一脚のテーブルの周圍に、幾多の椅子を並べ、其の周圍にまた數枚の熊の皮などを敷きつめたり。居士の談話中、言語往々聞き取れぬ所ありて、

稍困却したり。これは聞きなれぬ爲めなるべし。其の言語中特に耳につきしは、それ以上は缺如して置くのです。」「それから蓋し缺如して置くの外はない。」「など、缺如といふ語多く出でたこと、ウタク／＼として餘裕あり」といふ語を繰り返されたるは、漢學に深き居士の言としては耳立ちたり。

居士の談話は、別に本文の方には掲げぬつもり、掲げられては困るといふ様でありし故、必要の節々を左に擧げん。

「耶蘇教が國家に害があるとか、ないとか言ふ點は別としても、我々は其の教理を信ずることが出来るのです。之を信ずることの出来るといふ理由は、神があつて世界を造つたといひ、無上の力を神に與へ、それから耶蘇は神の子であるといふ様なことを言ふのは、道理上わからんことである、どうですかあなたはこういふことが信せられますか。……そうでしょう。我々が宗

教を信ずるのは、無暗に信ずるのではない、道理に訴へて信ずるのであるから、道理に合はぬことは信ずるわけに行かぬ。」

「佛教の方でも、佛に無上の力を與へて、世尊とか無上尊とか言ふから、耶蘇教の神と同じではないかと思ふだらうが、中々そうではない。佛は出世間の人で、其の無上の力と言ふのは、出世間の上の力なので、世間の力を言ふのではない。そこを間違ひてはならぬ。」

「何でも物は平易に見て、道理上明瞭なところを信ずればよいのである。丁度眼の前に斯る物がある、誰が見てもそうだと承知の出来る所から、判断して行かなければならぬので、平易に見てわからん様な所は、蓋し缺如して置くのである。」

「佛の出家して説かれたことは、何であるかと云へば、生老病死の四つを脱して、成佛するといふことの外はなし。成佛といふことがなかつ

たら、それは佛教ではない。然し佛も出家のはじめから、こんなことを説かうと思つて修行したのではない。自分が生老病死に苦しめられて居る、其の苦に堪へずして修行をしたので、此の四苦といふものは、今現に誰にでもあることである、平易に考へてわかり切つたことである、何時まで經つても此の生老病死がなくなる時節があらうとは思はれぬ。生老病死のある以上は、佛教は無くならぬ。」

「道理がわかつて信ずるのであるから、他力の念佛で、信仰ばかりで成佛が出来るといふのも、あれはそうばかり言つても、それはいけぬのであらう。法然とか親鸞とかいふ人が、念佛によつて成佛の出来る道理を見出して、人に教へたので、矢張り其の道理がわからねば成佛は出来ないのである。」

「禪で以て佛と同じ様な悟りを開くといふことは、そりや中々上根上機のものでなければ、到

底出來んことであるけれ共、然し下根のもので、修行をすれば必ずそれ相應の利益を得らるゝものである。……昔の祖師といはるゝ人の悟つたといふのは、ありや佛の成佛したといふのと同じであるかといふのです。それは同じであるわけでありませう。

「佛敎は八万四千の法門とも言ふ位で、機に應じて説かれたものであるから、最初より宗派が分れる様に出來て居る。それであるから、時勢の必要とか、説明の仕様とかいふことから、新しい宗派がいくらでも出來るのは當り前である。『心地觀經』を本として、一宗を立て様とすれば、それでも一宗が立つ。『圓覺經』を本として、一宗を立て様とすれば、それでも一宗が立つ。昔から宗派の分れたのは、此のわけによるのであるから、あなた方の様なやり方も、自然出て來るのも必要でありませうナ。」

御出で下さい。雜誌の種などは困りますが、話丈ならば何度でも御出で下さい。」
居士は其の話の力の這入りし時は、「そうでしょう」と一々念を押して、談話を進むは、甚だ聞き手に取りて親切に感せられたり。
(五)
島田三郎氏の宅は麴町にあり、竹邨兄の先導にて始めて、氏に面することを得たり。取りつぎの書生、其の擧作すべて丁重なるは、他に多く見るを得ざる所と、先づ玄關にて第一に感服したり。
九段招魂社の共同椅子に腰打ちかけて、「今日はどういふ順序で話を聴くつもりだ」との竹邨兄の問、「先づこれからこう、これからこう、斯様斯々斯くしかく、だ」「成程それならよからう」と、大凡胸算をきめて行きたる積りなりしも、扨座について愈取りかゝつて見れば、何の

ことはなく、前の陣だては丸て打ち崩されたり。勿論話を聴くつもりなりしも、反對に話を聞かれない行きしが如き態度となり、おれはどういふわけ、これは如何なる次第と、さきからく質問に遭ひ、やつと切りぬけて、扨てこちらより問を發すれば、答は唯一言二言の簡單で、明瞭、しかも其の答が種々になりてまた向ふより問はるゝといふ次第、當日の談話は凡そ三時間の長きにわたりしも、氏の質問の方、質問者の問より多きこと幾倍、さすがの訪問子もこれには参つたり。

「今日の話は大抵覺えて來たか」「イヤ君が覺えて來るだらうと思つて大方忘れた」「僕はまた君に半分依頼して居つたので、何だかわかつて居らんよ」「何せ向ふの質問が多いので、陣立が崩れる順序がわからなくなるといふ始末で、これぢや丸でものになりそうでないよ」「困つたなア、何とかよい加減にまとめてくれ給へ。」

これ歸途兩人の問答の概要なり。
氏の談話は極めて沈着にて、且つ明瞭、しかも言々甚だ丁重なり。イヤ私共は全く外道の方で、といふ發語、縷々千言萬語、引用し來る所は多く、儒書にて『史記』には斯う、司馬溫公は斯う、物徂徠は斯う、熊澤蕃山は斯う、吉田松陰は斯うと、談話の間に、古人の文を自由に挿まるゝには、訪問子多少閉口の氣味ありたり。
氏の大鉢の意見は、ユニテリアニズムにて、基督教を土臺とし、其の他の諸敎の眞理をも併せ取るといふにあるが如し。「世界萬物の原始といふことを考へ、それから物あれば則ありで、此の秩序といふことを考へて來ると、どうしても神があるかと考へる方が道理に合ふと思ひます」と。氏の基督教を信するは、この普通の有神論の考に基くが如し。
海老名正氏曰く、「三宅雄次郎君が講壇に立ち、小崎弘道君が講壇に立ち、植村正久君が講壇に

立つことが出来るなら、誰人か講壇に立つとの出来んといふ筈はないはわりませんか。小崎君などは、二三年の間、聴衆の顔が見えなかつたと言ひますから子。
余は今更日本思想界に於ける、儒教の影響のなるに驚けり。島田氏の基督教は、余は疑もなく儒教的基督教なりと見たり。海老名氏も神道の基督教など、言はれたることあれ共、余の見所にては、同じく儒教的基督教なり。而して余は自白す、余自らの信仰は恐くは儒教的佛教なり。儒教にも短所多々ありと雖、比較的穩健にて、常識的なる、現世的なる、他に比を見ること稀なり。之に基督教、佛教の深遠なる思想と、宗教的要素とを調和して、日本特有の脚色を施さんとしつゝ、あるものは、今日宗教家一般の傾向にあらざるべきか。これ余が諸家訪問中に感したる所なり。
澤柳政太郎氏曰く、「若し科學者が科學三昧に入

つて、宗教を要せんと言ふものがあつたなら、
「そういふ人には無理に宗教を信せしめる必要がない」と。宗教を要する人あり、宗教を要せぬ人あり、これにて満足すれば議論はなきなり。我等は一切の人類は、皆宗教を要すと思へばこそ、苦勞もするなれと思ひたり。
大道長安氏曰く、「新しいことを仕様といふのは、なか／＼六かしいものです。私が此の佛教改革のことを始めたのは、明治六年からで、弟の大道禪瑞といふのがあつて、外一人と都合三人で、これでは到底仕方がない、命を捨てなければならぬ」と言つて、そこで禪瑞が東京へ出て商賣をして、金をつくといふことになつたのが、抑ものはじまりでありましたよ。」
「それから明治八年から、此の『觀音經』を研究しまして、愈曹洞宗を脱して獨立したのが明治十七年、それから今日までに私の手からばかりも、一萬二千といふ金を出してやつて居ります

が、其の割に少しも眼にたつ様なことは出来ないのであります。」
「何でもはじめから四年目と、九年目が厄年で、四年目頃には、もうはや段々世間でも珍らしくなくなつて構はなくなり、こちらでも言ふことも大抵種がつきる、それに内部の方でも、仲間が熱心がなくなつて飽きてくる、分離するものがある、さアこゝが一番大切で、何でも一人になつても、撓まず御やんなさい、そうすればまた何とかかなります。それから九年目です。あと、はもう二年三年で、多少盛衰の交代があります位のものです。」
「御互に國のため、法のためにするとある、それに矢張り外から刺戟を與へて置けば、また多少舊佛教も却て奮ふ様になるものです。どうぞ命を捨てる氣でやつて戴きたいものです。」

●續訪問餘談

第二訪問子

第一訪問子が、内外多端、訪問を繼續する餘假なき爲め、臨時代理を命せられたる第二訪問子が、第一着に往訪したのは佐治實然氏で、昨年十一月八日の事であつたが、豫て佐治氏より、午前八時までにと云ふ條件を附せられて居た故、駒込より麻布まで、二里十何町と云ふ距離を、徒歩主義を實行せねばならぬ訪問子は、必死の戰場へでも駆け向ふ心地で、前夜より夫れ／＼準備をして置いて、未明の五時と云ふに起き出で、火をおこす、顔を洗ふ、茶漬を四五杯かき込ひと云ふ順序で、六時前に彌々發程したが、指ヶ谷町から安藤坂を降つて江戸川に出ても、中々夜が明けぬ。はて不思議な事もあると獨語しつゝ、四谷見附の近傍まで往つたら、やつと明

けたから、或饅頭屋の時計を覗いて見たら、丁度六時であつた、夫で始めて一時間取違へた事が分つた。夫から佐治氏の宅に着いたのは、七時少し過ぎてあつたが、表は未だ開いて居らぬ故、勝手口から潜り込んだ所が、丁度氏は今寢床から寢衣の儘で這い出て揚子を遣はうとして居た所であつた。まア玄關から上れと云ふので、廻つて玄關に行くと、氏は余程簡單に顔を洗つたものと見え、直ぐに出て来て、客間らしい奇麗に取片付けてはあつたが、其一隅に小机が在つて六七の手紙と新聞等が載つて居るのを見れば居間らしい所へ引き入れて、寢衣の儘で一應挨拶を済し、茶を入れ、夫から羽織を着直して、徐々話に取掛つた。……訪問子は、ア、なか／＼如才のない人だと思つたが、勿論悪く感ぜらるゝ筈はなく、矢張り好い方の氣持であつた。氏の談話は四時間の長きに亘つたので、訪問子は膝の痛いには閉口至極した。……訪問子が氏の人

物に就いて妙に感じたのは、其初對面の者たるに關せず、自己の經歷中、善い點も悪い事も遠慮なくさらけ出して、委細万端陳べ立てた事で、余り多く其例を見ない所である。夫から氏の家庭は、氏の理想を推知せらるゝ如く、氏の理想其儘を現はして居る、其靜肅で規則正しい所、庭園の掃除から、器物の排置方、さてはお茶の出しかたまでが、氏の所謂數學的になつて居る。氏が子の頭は全く數學的であると云うたのは嘘ではない、誰れでも一度氏の家へ足を踏み込めば、氏の數學的と經濟的人物であると云ふ事は直に分る。併し間には、往々極めて寛裕な所も見える、思ふに夫は全く佛家に生長した影響であらう。……氏は談話をしながら朝飯を喰べたが、氏の食物より其咀嚼方に至るまで、極めて細心注意せらるゝのは驚く計りで、併も夫が決して訪問子の前に殊更になすものでない事は、初め勝手口に潜り込んで、其清麗なのを瞥見し

たのと照應して、優に保證するに足るのである。……氏は自ら受動的方面で成功したと云はれたけれど、其人物は矢張り能動的の方ではあるまいか、其負けぬ氣象は、數學的談話の中にも折々鋒芒を閃めかして居る。……第一訪問子が巖本善治氏を訪ふことが三回、遂に面會を得なかつたと云ふので、第二訪問子も、緊禪一番、五回までは訪うて見ようと云ふ考で懸つたが、同じく三回目に漸く面會を得たが、氏の多忙である事は、全く氣の毒に感ぜらるゝ程で、訪問子の面會した時は、比較的閑な方だと云ふに關らず、彼此四組計の用談者が詰懸けて居て、氏は晝飯を喰ひかけながら、之に應接して居るのであつた。夫で訪問子も、何となく濟ぬ氣がして、長談し得ないで、約四十分ばかりの談話で辭し去つた。知らるゝ如く、氏は相貌魁偉威風堂々たる男であるが、其舉止の沈着なる、談話の緩徐たる、宛も貴族的である。但し

其の時機が來たと信じた時には、私でも何かやらぬとも限りませぬ、と云つた時は、意氣頗る昂れるべく見えた。……氏の意見は一種の偉人出現論であるが、其偉人と云ふのは、熱誠と云ふ資格が尤も主で、否寧熱誠即偉人論で、夫子自ら其候補の一人たるを辭せざる底に見受けたは僻目か。……氏の家は庚申塚明治女學校構内で、校舎より距る二丁計なる後の松林中に在るが、其構造は極めて粗で、先づ例すれば、田舎の百姓の物置小屋に疊を入れてあると云ふべき有様で、其來客の多いと、小兒方も澤山有るやうで、之を先きの佐治氏の家庭に比すると、極めて亂雑であると云ふ事が出来るが、其の亂雑の中に、自ら私氣蕩然として一種云へばからざる情味の掬すべきものありて、更に陰鬱の氣なきは、殆んど其の例を見ざる位である。氏の有名なる夫人は曾て近かれたと聞いたが、今は第二の夫人であるが、將親戚の

お方であるか知らぬが、三十計の極めて質素で極めて沈着な婦人が、來客や、小兒方に對して、甲斐なくして斡旋して居られたのを目撃した。そして訪問子は、取廻しの好い落付いた婦人がなければ、安全な家庭は作られぬと云ふ感を感じたと同時に、流石に氏は女子教育者であると感じたのである。

訪問子が、何所でも同一な質問を受ける事が二つある。之に對して訪問子の答も、終始一貫して居る、否違ふべき理由がないのであるが、一寸參考の爲めに茲に附記して見よう。……第一は新佛教は重にどう云ふ人がやつて居るか、と云ふ質問で、訪問子が答は何時も……杉村……境野……田中……高島……夫からと云ふ順序である。所が折々は其人物の質問や、批評が始まるのである。……由來訪問子は、極めて眞面目な男で、殊に問題が問題であるから、何時も至つて嚴肅な態度を執つて談話をして居るが、此先

輩の批評、人物論の時丈は、どうしても、眞面目に話をする事が出來ぬのみか、全躰人物の批評と云ふ事は(縦令史上過去の人でも)、余り好まぬと云ふが訪問子の癖である。併し全く知らぬとも云へぬから、諧謔的にお茶を濁して置くのだ。……第一境野と云ふが先づ俄鬼大將、否書大將兼驅大將で、頻りに驅つたり、書いたりして居る。……夫から杉村と云ふ男は、どうも達磨臭い様な點もある極めて奇抜な、恐いように至つて優しい、間違ふと拳骨の一つ位何時でも喰はさうと云見暮をして居るが、其癖甚だ涙脆い親切な感性的な男である。……次に田中は聖人の剝製が、君子の卵とでも云ふべき濃厚莊重な男だが、いざ議論となると、意地の悪い檢事宜しくと云ふ躰裁だ。……高島の如きに至つては同志會中唯一の交通機關で、之れなくんば同志會は何等の活動も出來ずして、殆んど木偶に幾からんか。……第二は雑誌發行の部數、收支、

會の經濟に關する事であるが、内村氏が「宗教の雜誌で、千以上出れば余程好いのです、夫から又こう云ふ仕事で收支相償ふと云ふ事になれば、夫は非常な成功です。全躰宗教などの事と云ふものは、營利的では往かぬもので、又利益も報酬もあるものではない。夫を知りながら、夫に安じてやるのは、一は一片の衷情止むを得ぬのと、一は又物質上で求め得べからざる一種の報酬があるからである。實業界はいざ知らず、精神的の事業には、他から金や保護を受けて成功するものは皆無です」と云はれたのは、知る人ぞ知る、兎角經驗のないものは話せないとも云ふべき感が生じた。……夫から更に進んで、同志會では、演説がしたいと思つても、中々お寺等は借りださせぬと云ふや、今迄床屋で鬚剃の姿勢で、背面へ四十度強の鋭角を畫き、仰身になつて、十燭以上の電燈にも匹敵すべく見えたる眼光炯々、口角泡を飛ばして、大聲怒號、

曲學阿世の無信仰の徒を叱咤しつゝ、ありし先生俄に首を低れ、極めて微音に「イヤそうでしょう、總べて社會の先頭に立つて革新の聲を放つものは、種々の方面からあらゆる迫害を受けるものです。イヤ満腔の同情を表します。……私にも澤山さう云ふ經驗があります」と、今昔の感にや堪へざりけん、豆大の一滴。

(二)

鎌倉に釋宗演、田中智學二氏を訪ふことになつたが、遠方の事だから、若しも留守を攫んでは餘り賞すべき話でないと思ふので、豫め先づ釋氏に照會して、其日取が定まつたらば、更に田中氏に同日在宅請求の通知を爲す豫算であつたのに、釋氏から十七日の最終便で、十八日午前中に出て來いと云ふ回答が來たので、田中氏へ通知の餘裕がないのみか、餘り平日から心掛のよくない訪問子のことゝて、夜十時頃から、慌て

足袋や下駄を買ひに行くと云ふ始末で、やつと準備を整へ、翌朝六時に出發、七時四十分新橋發の列車に乗組んだのはよかつたが、全躰圓覺寺に行くには、大船から下車する方が、道が近くて坂がなくてよいのに、矢張鎌倉迄乗つて、車夫には馬鹿にされ、時間と費用との上にも餘計な損をしたので、頗る瘡に堪へ得なかつたが、何人も大抵一度はやる失策であると云ふので、之も矢張平凡主義常識主義の實行であると思ひ直してやつと堪忍し、さていよいよ圓覺寺に着いたのは、九時半と云ふ頃であつた。刺を通するや、直ちに宗演氏の居間へと通された。室は六疊敷で中には小さな爐がある。椽も本椽ではなく、建具等も頗る粗末である。室の一隅には大きな机が据ゑてあつて、二二三の書翰や四五の古本が乗つて居る。又他の一隅には、餘り立派でない茶器が備つて居る。之が有名な臨濟宗大本山圓覺寺管長の城廓であると云ふ事は、禪の禪たる所

以、茲に在りとも謂つべき歟。暫く世間話をし居る内に、當所は早いのが例であるとして膳を持出して來た。麥飯に豆腐汁、珍客であるから特別に料理つたのだと云ふ、蕪餅と人參の煮付一小皿、それに宗演氏が手づから炙つた砂の多い伊豆海苔半枚と云ふ御馳走で、話しながら三椀をやりつけた。氏の話に、これはまだ頗る上等の賄で、所化の方は餘程酷いとの事であつたが、訪問子は、其昔高野山で茶粥に麥味噌を唯一の珍味として、經藏に籠居して居た事を思ひ合して、一種の感にうたれざるを得なかつた。兎に角禪家の生活は、淡泊で何の蟬もないのが何よりの御馳走である。訪問子は會て、西本願寺の故明如上人に御陪食を仰付かつた事がある、當時は洋食に葡萄酒と云ふ珍味であつたが、除り難有心持がせなかつたのに、今は沙の在る伊豆海苔が至極甘いのは、頗る不思議な口と云はざるを得ない次第である。

宗演氏は至て病身で、殊に寒い時は一層困ることであるが、身軀は病弱でも活氣は満々として、所謂枯禪者流とは大に其撰を異にして居る。悪く謂へば大分野心家だ、よく云へば頗る有爲の和尚だ。兩三日來、座禪工夫の結果知らぬが、話を聴に往つた訪問子を捉へて、頻りに新佛教の綱領や、時事問題の意見を聞かれたのは、丸で不意の逆襲に遇うた様であつたが、訪問子も左る者、決して之に避易する譯ではなく、或は同志會全躰の考として、或は自己一箇の意見として、滔々と之を辯じ去つたのは頗る御手際であつたが、さていよいよの段になりて、ハ、ソウ云ふ次第ですか、夫では愚禪其の考も大略一致して居ります、將來の宗教は先づそんなものでしようと思はれたのには、聊か面喰はざるを得なかつた。悪く見れば敵の糧に由つて戦ふ御手段、譽めて見れば敵の生磨を抜く喝棒、兎に角訪問子儘に

一本參つたに相違なきを保證す。訪問子は、現在の佛教家中に、三人の特異なる人物と、此人物が各々其自己所屬宗派の眞髓特質を、比較的善良な方面に發揮して居るのを認めた。其第一は島地老和尚で、其尊嚴なる長老風と、本願寺流の處世術とが、老人をして今に佛教界の大立物たらしめつゝある。次は黒田眞洞氏で、其學者風の眞面目なる上に、淨土宗一流の沈着な點が代表されて居る。其次は即ち釋氏で其豪傑的なる上に、禪流の洒落奇警なる點が紹介されてある。兎に角此三人物は、個性的に一塵の人物なる上に、よく其宗旨の特徴を表明して居るのである。彼の雲照師の如きも、其個性人物は、敢て三氏に譲らぬが、眞言宗の特徴を聊か妙な風に發揮して居るので、そこが即ち大に三氏に異なつて、一種特別の光彩を白日臺上に放つ所以であらう。要するに宗演氏は、流石宗演氏で、縱横兄等の

如何にも威服しそうな點がある。訪問子の往つた時に、丁度植村文學士も參禪して居つたが、其汚い衣を着て跣足で居た所は、なんの事もない矢張味増小僧である。午後一時頃圓覺寺を辭して、要山なる田中智學氏を訪うた。氏の居は扇ヶ谷の奥、即扇の要に當る山の半腹に在つて、三方岩壁に圍まれ、其幽邃清致、實に仙窟と云ふべき場所であるが、若し詩的趣味を解せぬ者に見せたならば、定めて鬼の岩屋とか、山賊の住家とでも云ふであらう。

刺を通すと執事が出て来て、主人は生憎風邪神經痛で寝て居るが、遠方から折角の來訪故鬼に角上がつて暫く休息して往けと云ふので、土つて茶を呑み、菓子を食うて、門下生や「妙宗」の記者等と話をして居る内、「新佛教」の紙上に、迂散苦齋と云ふ名で、日蓮宗の事が出て居る、あれは多分境野氏の筆であらうが、現在の日蓮宗と日蓮上人の本意とを混同して居る、大なる誤

解であると云ふ攻撃が出たが、訪問子は由來雜誌でも必要論説か、研究もの、他は讀まぬたちで、特に時事問題等は大抵知れたものだと高を括つて居るから、迂散苦齋が何人か、又どんな事が書いてあつたか、一向知らぬので、一寸閉口した次第であつた。

彼此十分も立つた頃、田中氏が今日が醒めた、折角の事であるから推して面會しよう云ふので、奥座敷へ通され、頓がて氏が出て來たが、如何にも病氣で苦しうに、血色も甚だよろしくないのて、頗る氣の毒に感せられ、可成餘談や反問を避けて、一應眞直に氏の説のみ默聽して歸途に就いたが、病中に拘はらず面會を得た満足と、推して反問を得なかつた遺憾とが一所になつて、なんだか嬉しうな、物足らぬような心地がしたのである。

氏の謂はるゝ如く、新佛教の綱領と、氏の主張する所と、其輪廓は大抵同一であらう。併し其

異なる要點は、結局教權主義と自由討究主義との別に在るので。教權主義から往つても、自由討究主義から進んでも、其歸着する佛教の根本義は同一であるとするれば、自由討究等と云ふ餘計な骨折をせぬでもよいと云ふのは、如何にも一應分りのよい説ではあるが、若し全然教權主義に由るとすれば、氏の嫌ひな祈禱等もやらすばなるまい。夫を或部分は教權主義に由て守り立て、或點は密に捨てよと云ふことは、純教權主義の頼むべからざるを自白反證したものであるまいか。

又氏の所謂釋迦の様な者は、世界に二人とないから、今の者が幾ら騒いでも追付かぬと云ふ事は、品格と思想とを混同した考へではあるまいか、釋迦の品格に就いては、吾人も亦世界に二人となふことを首肯する。全條釋迦のえらひのは、其思想よりも人格の方で九分九厘までもつて居るのである。氏は今の時代思想を甚だ軽く見る

けれど、此の時代思想と云ふ中には、既に氏のえらしとする釋迦は勿論、孔子や基督やソクラテス、カント等のあらゆる思想が、悉く蘊蓄渾和されて居るのであるまいか。果してそうであるとするれば、時代思想も亦甚だ輕すべからずである。此時代思想を軽く見ると、重く見るとは、退化主義と進化主義の岐るゝ要點で、一毫千里の差を生ずるのである。

由來宗教、特に佛教には、時代思想に由り、自由討究の結果として得た自己の意見に、教權の假面を被らす流弊が甚しい。馬鳴も龍樹も無着も、天台も賢首も、空海も日蓮も、皆夫である。今田中氏の如きも、其鋌に倣ふものとしか思はれぬ。併し今日、時勢が大分變つて居るから、最早教權の假面は潔よく打捨てた方がよくはあるまいか。法華經の中の未來記見たような文句が、偶然に多少日蓮の性行と暗合した所があるとしても、夫を擔ぎ廻して、日蓮復古主義など、

將來宗教附錄

騒ぐのは、餘り大人氣ない事ではあるまいか。吾人は現今我國の宗教界に於て、極めて意志の強固な人物を二人見出した。一は内村氏で、一は田中氏だ。二人共兎に角、主義的生活を爲して居る、極めて強硬な氣骨稜々たる人物で、其性行來歴、克く相類して居る。田中氏が病を推して客に接し、其論旨の要所に至るや、意氣軒昂、音吐壯烈、亦病の身に在るを知らざるもの、如き熱誠と云ひ、其信する所に向て勇猛進歩するの英氣と云ひ、彷彿として日蓮上人の面影が躍如たりと云ふべきである。兎に角氏等の如き頑強な人物は、今日の宗教界に要求の切なる人物の一種であるのである。氏の餘談に、『日本新聞』の佛敎家相撲の話が出て、氏は舊思想派に入られ、脇田堯惇氏を新派に入れてあるのは、なんだか譯が分らぬと云はれたが、其後段は吾人も疾く解釋に苦んで居た所である。若し夫れ輩を生やし洋服を着し、或は公然求妻の廣告を爲し、

或は洋食を喰ふに巧みなる所謂ハイカラを以て新派と爲せば、佛敎家中新派亦決して少なきにあらざるも、純粹に思想の點より論ずる時は、新にもならず、舊にもならず、全くゼロなもの十中その八九である。三時過、田中氏を辭し、同時三十九分鎌倉より乗車したが、恰も雪が降り出し、其大船で待合せて居る間は、實に烈しい吹雪であつて、頗る惡寒を感じた。此日は氣車が夫に後れて、やつと暮れ方に新橋に着き、夫から蕎麥屋で夕仕度済し、駒込に歸り着いたのは早や彼此十時頃であつた。氣車中の惡寒が彌々嵩じて來て、二日半程寝たので、鎌倉行が都合四日かゝつた動定になつた。實にこれ近來の大訪問と云はねばならぬ。

(三)

江原素六氏の邸は、麻布中學寄宿舎の構内に在

將來宗教附錄

り、訪問子が其門前に到つた時、數歩前に、受付然たる風采をして居る老爺が、ちよこゝ歩んで居たが、やがて江原氏邸の玄關より上つて、自分に下駄を仕舞ひ、將に奥に通らんとするの一刻那、訪問子が頼むと怒鳴た聲に驚いて振り返つた其顔を見れば、豈圖らんや江原氏であつた。今お湯に往つた所です、さアお上りなさいと、直ちに應接の間に伴はれたのだ。氏は清貧自ら甘すると云はれたが、清貧と云ふまでには至らぬが、随分質素な方で、縱令故らに搜しても、氏の家で奢侈品一つ見出すことは困難である。萬朝報に、一萬圓の金があれば、氏を御辭儀させることが出來ると書いてあつたが、氏は學校と云ふ飯を食ふ器械を持つて居るから、其事業の爲めには、己の節を犠牲に供するかも知れぬが、兎に角氏は比較的超物質主義に近い方だと云ふことは、大抵承認してもよからうと思ふ。

氏は政治家で、教育家で、宗教家である。そうして、孰れも現今の社會を尺度とすれば、先づ良好の成績を收めて居る方だ、吾人が常に職業的營業的宗教家を排斥して、僧俗無差別を主張する例證の一端として、氏の如きは比較的恰當の人物ではあるまいか。氏が大抵の政治屋は獲官の爲めに苦むが、私は官の米を食はぬ爲めに頗る苦心したと云はれた、夫は事實ではあるが、之等をや法螺の逆吹きとも云ふべきか。黒田眞洞氏の居は、赤坂臺町兵營前の高臺で、法安寺と云ふ、極めて小さなお寺だが、氏は住職ではない、僑居だそうだ。氏の容貌を一見すれば、氏の人と爲りは直ちに判る、其眼窩落ち、眉秀でたる相は、沈着でしかも嚴格であると云ふことが、直ぐに想起される。氏の居間は八疊であるが、其三方は全く書籍を以て蔽はれ、幾多新古の書冊は高い天井を壓して居る。そうし

て又廣い机の上にも、氏が日々研鑽を怠らぬことを證明し顔に、種々の本が並列して居る。氏の談話は極めて謙遜で、どんなことでも「であります」と断言することはない。必ず「でありましょう」と控へておくのだが、其寺院生活を不可とし、佛敎の眞生命は疾くに死んで居ると言はれた所は、氏の地位としては随分思切つた詞であらう。

兎に角氏は學問に於ても、人物に於ても、淨土宗第一流の人であることは確であらう。徳富猪一郎氏は、參與官以來、阿世家と云はれることになつて、近時は其議論も、大に鋒先が鈍つて來て居る、實に氏の爲めには惜むべしだ。氏は元來極めて精悍な方で、諂護など云ふことは、其天性許さぬ所であるけれど、新聞維持の爲めには、何事も曲げざるを得ぬのであらう。新聞記者と眞面目な話をする程、氣の利かぬ事はない、僅か四十分間許の談話中に、氏は三回も

立たざるを得ぬ急用が起つたのである。

氏は毎に社前の九州俱樂部を其應接所として居る、俱樂部は宛も氏の爲めに設けられたるの觀ありだ。

氏の宗教談は既に現はれたる如く、何も内容はないのだが、其話の順序は極めて甘いものだ、之を速記させれば、直ちに流麗なる大文章となるのである。そこになると江原氏などの談話は誠に閉口だ、あれやこれやを取雜へて話されるので、之を整理して、紙上に掲げるまでには頗る骨が折れるのだ。

基督教の古參株は孰れも獨天狗で、堅く執つて相下らぬが、その中で獨り、青山學院の本多庸一氏は、頗る圓滑に出來て居ると云ふことは、耳にして居た所であつたが、如何にもそうだ、其の胡麻鹽的の鬚髪と云ひ、其の丸々と太りたる容貌と云ひ、常にニコニコ顔なる所、お世辭的の詞遣と云ひ、圓滑と稱せざるを得ないので

ある。訪問子が刺を通するや、先生親ら玄關に出で來りて、さあお上り、どうも遠方から、さアこちらへ随分寒くてなど、書生式と云はうか、米國式圓滑流と云はうか、如斯にして始めて克くあれ丈な事業を整理して、やつて行けるのであると感心せざるを得ない。氏の談話は如何に突撃しても、大抵世間話で持ち切つて、居るの、何にも所信がないかと云へば、雲間の電光の如く時々其光芒を現はすことがある。其擒縱の巧なる、談話界第一等の老練家と云はざるを得ない。

氏の談に同人の田中治六君の事が出て、舍身居士の事かと問はれた。由來田中君はよく間違へられる男だ、島田三郎氏からは田中智學氏と間違へられ、本多氏からは舍身居士と仰がれた、そこで訪問子は答へて曰く、

「舍身居士は、三衣を着てお鉢を抱へて行く、釋迦式の高僧連れ、治六君は洋服を着て洋杖を

振つて行く、二十世紀式の平凡派だ、兩人共同時代の人はあるが、舍身居士は老人で、治六君は小供で、其年齢正に二千五百六十八歳丈違ふのである」と、聊一矢以て氏の滑脱流の談話に酬いたる積なるが、それ程でもなかつたか知らぬ。

(後で聞けば舍身居士のとは少し違ふさうだ。)

下らぬ事ではあるが、訪問事件に關して、訪問子の泣き言を聞いて貰はうか。夫は外でもない、訪問子が各大家の談話を聞いて歸つてから、之を纏めて筆記するに當つて、可成其談話の真相を畫き出さうと勉めて、君等とか、僕とか、云ふが如き詞は、先方の遣はれた儘に書いて置くのだ、之は一方には可成其人の品格を紹介しようと思ふ考へがあるからである、所が之を校閲にやると、君等をあなた方とか、僕を私とか直されるのである。之等は尤も小事であるが、其他多少参考になる世間話や、他の批評等は、大抵全部削り去られるので、折角の苦心も水泡に歸

することが多い、そうして之が平素淡泊なと云はれる人に多いのだ、夫で其天真爛漫たる態度も、或は殊更にそれを装ふのではあるまいかと疑うたことも少なくない、兎に角宗教家らしくらぬと云つてよくはあるまいか。

(四)

中島力造氏の風采性行は、今更事々敷之を紹介するの要がない、唯其餘談一二を挙げやう。氏は新佛教といふ名稱に就いて、種々なる方面から質問せられた。

「新佛教の内容は、所謂佛教に比して、頗る異なる點がある。結局一種の統合的時代思想であつて、佛教以外、孰れの宗教道徳にも存する精を蒐めんとする傾がある。故に新佛教と云ふ名稱は狭に失し、不相應ではありませぬか。」
「新佛教と云ふ名稱は、廣く同志を求むる上に於て、大に故障がありませぬか。人を躊躇せし

むるやうなことはないですか。」

「總て系統を引くと云ふことは、何等か免れ難い關係があるから、止むを得ず、多少枉げて古きを襲用するといふのがまア常ですが、新佛教は、思想の點に於ても、其他總べての點に於て、獨立獨歩のものであると聞いて居ますが、そうすると在來の名稱を用ひるのは、多少の損であつても、何等の利益をも發見することが出來ないではありませぬか。」

「眞宗も、日蓮宗も、其當時は皆新佛教であつたのですが、そうすると、新佛教と云ふことは、結局佛教内の一宗派と爲り了りはしないですか、新佛教徒は果してそれに甘するつもりですか、イヤ如斯は蓋し頗る不本意のことでしょう。」
訪問子は之に對して、思想の歴史的發達と、佛教の根本義を執るといふ二點から、いろ／＼辨解を試みた。

氏は又「職業的宗教家は必要である、蓋し宗教

家は種々なる智識と高尚なる人格とを有して居なければならぬから、兼業的では十分の成功は見られない、しかし其器でないものが世襲するやり方はいけないと思ふ。然るに若し世襲を廢し、眞の希望者のみを以てすれば、宗教家が減少するといふ恐があるといふものがあるかも知れないが、之れは寧ろ賀すべき事で、無能の人の滅するは、一方に眞正のものを得る所以であつて、左すれば有力のものも亦、比肩して教界に入るを望むに至るであらう。然るに今日は、有力のものは之と比肩するを嫌ふ傾がある。」と言はれた。

氏は我國の識者が、頗る輕卒に宗教や道徳に關する未定の意見を發表し、未だ久しからずして、忽ち之を變じ、爲めに幾多の人士を惶惑の巷に陥るの弊あることを痛撃せられた。

氏は、孰れの談話にも、必ず英、米、獨等の現況、實例を比較引證して、其論旨を確められた。

氏の談話は、沈着であつて、氣煽万丈底の壯烈なきも、趣味は津々として盡さざるものがある。浮田和民氏は、短身赭色風采の極めて揚らぬ人で、談話も亦餘り上手でない方だ。如何に高く買つても、田舎の收入役以上には見えぬ。訪問子は曾て、或演説に、一神論と汎神論との調和と云ふことを謂出した所が、同人間にも一向賛成を得ないのみか、却て種々の批難を蒙つたのである。所が浮田氏の談話は、其枝末は兎も角、其大體に於ては、全く訪問子の所見と符節を合するが如しであつた。茲に於てか其門を出づるや、再び、天下知己ありと叫んだ。そうして何時もお定りの蕎麥屋で喰ふべき晝飯を、牛肉屋に飛び込んで四十錢はづんだのである。

(五)

植村正久氏は、頗る正直な學者だ。そうして極めて正直な基督信者である。内村氏等の如く、

自己の所信所知以上に輪をかけて、仰山に吹聴するともなく、又海老名氏等の如く、圓轉滑脱、巧に他に迎合して、しかも其本領は捕提すべからしめるといふやうな傾はないのだ。其變り其所説には、余程頑固な點もありと云ふべしである。併し夫が即ち氏の氏たる所以であつて、滔々者流と其撰を異にして居ると云ふのであらう。氏は談話は極めて下手だが、熱實である、應對は甚だ冷淡であるが、一向不親切ではない。僕が氏を訪うた時は、ちやうど僕の眼疾が甚だよろしくなかつた時であつたが、氏はこれを見て、「どうも大層お眼がお悪いよう、今研散水をこしらへてあげますから一寸お洗ひなさい、氣をおつけなさいといひませぬ。イヤ之で洗ふと暫くはよいのです、さあお洗ひなさい、夫ではいかぬ、之が新しい半手拭です。」など、佛教の大家先生達には、一寸眞似の出來ないところである。要するに氏は、一見古の漢學者、若くは道學先

生とも云ふべきである。風采の温厚な所、質朴な所、頭髮少分の白を交へたる所、如何にも宗教家然學者然と稱すべしだ。氏は基督を神格視し、佛教經典中では、觀音經が最上乘であると云ふので、氏の所信は明かに推知されるのである。單に哲學的に解すれば、基督教には不備な點もあり、又佛教など程巧でない點があるのです。とは、他の獨尊者流に比して、頗る學者的であり、公平であると云うてよろしいのである。夫から氏は、訪問子に向つて、基督教を研究せよと切に勧められたが、こゝにも矢張り氏の正直な所があらはれて居る。小崎弘道氏は、基督教家中の先輩である。其半白の鬚、丸く肥えたる温顔、ニコニコ然たる眼付、確かに長老の資格ありと云ふべしだ。氏は極めて低音であるが、其談話はよく筋が立つて居つて、何人にもよく了解されるのである。氏が絶対の非人格論を駁撃して、人格説を主張

されたのは、聊理窟的ではあつたが、之が氏の得意のとするところなのであらう。氏も植村氏に均しく、兎に角基督教家中の學者であらう。植村氏よりは、多少變通の利く方であらう。氏の談話は、その十分の七は、所謂熊本組の經驗話で持切つて居つたが、夫は頗る面白く聴かれた。二時間餘の長談も、別に膝の苦痛を感じなかつた。之が氏の談話上手、説法上手と云ふことの一例として見てもよい。所謂熊本組の隊長横井氏や、先進金森氏は、中頭豹變し、其若輩たる徳富氏は、初めより變態し、今残れるは、海老名氏と氏との二人である。そうして共に基督教内の大家で、甲は英雄的で乙は君子的だ、氏が君子的なる丈、夫れ又海老名氏の跋扈する餘地が廣いので、氏にして少しもさむ所あらば、海老名氏或は頭が上がらないかも知れない。

高地氏が、如何にも尊嚴に、如何にも殊勝らし、其お難有的なるに拘らず、其思想には、頗る新しきものがあると俱に、折々余程奇抜な言を吐かれるには、大に感心せざるを得なかつた。氏の談話中、哲學館事件が出て、動機論の善惡、國家主義即帝國主義、國體論と動機論の關係等について、一家獨得の批評を加へられたるは、頗る意外に感じたる所で、大抵の倫理學者の言ひ得ざる所を明言した點もあつたのであるが、要するに氏の説は、動機論の解釋一つで、よくもなる、悪しくもなると云ふ事に歸するのであつた。第二訪問子の訪問も、其餘談も、茲に一先づ結了を告ぐるのである。元來は、曹洞宗の西有、森田二禪師、渡邊無邊氏、横井時雄氏の四名を訪問すべき豫定であつたけれど、孰れも不在或は病中で、急には面談の出來ない事情があるので、暫く中止するにしたりしたのだ。之で大略現今教界學界第一流の人物は網羅した積りである。

(明治三十六年五月上旬)

●中「正穩健の信仰」の一節

境野 黄洋

「味ふ」といふこと、「知る」といふことは分けて言へば、精神の二大方面といつてよい。一は総合的で、二は分析的で、何れを精神の本質と定めることは出来ない。二者調和して一箇の精神をなして居る。其の中で理性的、説明的である方の點より、人の實際生活は寧ろ総合的の方に多く依頼して居る。それ故理性ばかりたよりにして人生を解釋し様として居る學問は能論は、間違ひなので、認識ばかりを學問の本質としなかつた。言はず學問と宗教との分業が未だ明に成立たなかつた、即ち學問が實際生活に近接して居つた時代の哲學は、理性以外に餘程詩趣に富んで居る。近世の哲學でも、詩趣に富んで居る、哲學が永く生命を持つて居る、如何に經驗思想が盛になつて來ても、形而上思想の根柢は深い、是等は何から來て居る結果ぞと言へば、要するに人の本性の要求に基く者であるからであらう、人には理性以外に要求があるからであらう。(「新佛教」四卷の一號)

●「新道德の歸着点」の一節

田中 治 六

眞成の人格は區々たる外面的模倣の能くすべき所にあらず、深く天地人生の歸趣を察し、厚く己が天職を自覺し、頂天立地、内は猛烈不動の信念を持ち、自強不息の向上的奮勵心を有するものにして始めて能くすべし。所謂天上天下唯我獨尊なるものは是に於て在り。即ち道德の根柢は人格に在り、而して獨尊的人格は實に宗教的信念に淵源する所以を知るべし。抑々我徒の主張する信念は、迷信を排し卑屈的依頼心を去り、向上一路の光明を望みて進脩息まざるの大精神に外ならず。我徒が新道德を振作して社會を指導せんとの抱負は、全く之に依らずば非ず。之を是れ察せず、宗教的信念を置きて道德の振起を策するは、實に沙上に樓閣を建設するに同じ、焉んぞ其鞏固堅實なるを望むべけん。(「新佛教」二卷の五號)

●「病問預言」の一節

縦 横

世に慈善と名のつきたるものに碌なものばなし、慈善財團婦人慈善音樂會の類、畢竟其の名を美にして其實を非にするに外ならず、之が爲に迷惑し閉口するもの豈に少しとせんや。腕力を振つて人を脅迫して財を奪ふものを強盜といはば、美名を掲げて人を誘うて財を奪ふものを弱盜といはば如何にぞや。慈善と非慈善とは、是れ行爲の跡に就いて他が下すべき評議の語のみ、自ら名のり出づべき言葉ならんや、聖賢が聖賢の行をなすに、我自ら聖賢の行をなすというてなせば、金は儲かるべからんも、まこと聖賢の行たるべしや否や頗る疑はし、古人は陰徳は猶耳鳴の如しといへり、今の慈善は猶鼠の如きものか、先づ其聲を大にしてやがて一陣の臭風を傳ふればなり。(「新佛教」三卷の五號)

發行所 新佛教徒同志會出版部
東京市本町三丁目三番地
電話 二五三三
明聲堂

●中「正穩健の信仰」の一節

境野 黄洋

「味ふ」といふこと、「知る」といふこととは分けて言へば、精神の二大方面というてよい。一は総合的で、二は分析的で、何れを精神の本質と定めることは出来ない。二者調和して一箇の精神をなして居る。其の中で理性的、説明的である方の點より、人の實際生活は寧ろ総合的の方に多く依頼して居る。それ故理性ばかりたよりにして人生を解釋し様として居る學問萬能論は、間違ひなので、認識ばかりを學問の本質としなかつた。言はゞ學問と宗教との分業が、未だ明に成立たなかつた。即ち學問が實際生活に近接して居つた時代の哲學は、理性以外に餘程詩趣に富んで居る。近世の哲學でも、詩趣に富んで居る、哲學が永く生命を持つて居る、如何に經驗思想が盛になつて來ても、形而上思想の根柢は深い、是等は何から來て居る結果ぞと言へば、要するに人の本性の要求に基く者であるからであらう、人には理性以外に要求があるからであらう。『新佛教』(四卷の一號)

●「新道德の歸着点」の一節

田中 治六

眞成の人格は區々たる外面的模倣の能くすべき所にあらず、深く天地人生の歸着点を察し、厚く己が天職を自覺し、頂天立地、内は猛烈不動の信念を持ち、自強不息の向上的奮勵心を有するものにして始めて能くすべし。所謂天上天下唯我獨尊なるものは是に於て在り。即ち道德の根柢は人格に在り、而して獨尊的人格は實に宗教的信念に淵源する所以を知るべし。抑々我徒の主張する信念は、迷信を排し卑屈の依頼心を去り、向上一路の光明を望みて進歩息まざるの大精神に外ならず。我徒が新道德を振作して社會を指導せんを抱負は、全く之に依らずば非ず。之を是れ察せず、宗教的信念を置き去りて道德の振起を策するは、實に沙上に樓閣を建設するに同じ、焉んぞ其鞏固堅實なるを望むべけん。『新佛教』(二卷の五號)

●「病間瑣言」の一節

縦横

世に慈善と名のつきたるものに疎なるものはなし、慈善財團婦人慈善音樂會の類、畢竟其の名を美にして其實を廢にするに外ならず、之が爲に迷惑し閉口するもの豈に少しとせんや。腕力を振つて人を脅迫して財を奪ふものを強盜といはゞ、美名を掲げて人を誘うて財を奪ふものを弱盜といはんは如何にぞや。慈善と非慈善とは、是れ行爲の跡に就いて他が下すべき評議の語のみ、自ら名のり出づべき言葉ならんや、聖賢が聖賢の行をなすに、我自ら聖賢の行をなすというてなせば、金は儲かるべからんも、まこと聖賢の行たるべしや否や頗る疑はし、古人は陰徳は猶耳鳴の如しといへり、今の慈善は猶屏の如きものか、先づ其聲を大にしてやがて一陣の臭風を傳ふればなり。『新佛教』(三卷の五號)

明治三十六年六月一日印刷
 明治三十六年六月四日發行

定價金七拾錢

新佛教徒同志會代表者

編輯者 高島圓

印刷者 水谷景長

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博進社工場

東京市小石川區久堅町百八番地



發行所

東京駒込小石川原町三番地
 新佛教徒同志會出版部

賣捌所

東京駒込小石川原町三番地
 東京本郷四丁目五番地
 鷄聲堂

小野藤太 中田治六 高島圓 野哲 共編
 出版近きに在り

新佛教綱要

四版六約二百五十頁定價郵稅未定
 言一文致總ふり假名

第一章 時勢の趨向	第二章 新信仰の要求	第三章 新佛教の發表	第四章 新佛教と舊佛教	第五章 新佛教と新宗教
第一篇 起源	第一章 佛教の根本義	第二章 自由討究	第三章 迷信の勦絶	第四章 社會の根本的改善
	第五章 宗教的儀式制度	第六章 保護干渉の排斥	第二篇 宗教	第一章 宗教とは何ぞや
	第二章 宗教の必要	第三章 智識と信仰	第四章 中正穩健の信仰	第五章 宗教と倫理
	第六章 宗教と教育	第四篇 世界	第一章 一神論	第二章 汎神論
			第三章 一神論と汎神論	第四章 超物質主義
			第五篇 人生	第一章 現世主義
			第二章 常識主義	第三章 生死問題
			第四章 個人と社會	第五章 理想と活現
			第六章 進脩不息	第七章 僧俗無差別
			第八章 時事問題	

發行所 東京駒込小石川原町三 鷄聲堂書店
 發行所 東京駒込小石川原町三 鷄聲堂書店
 發行所 東京駒込小石川原町三 鷄聲堂書店



發行所

東京駒込小石川原町三

新佛教徒同志會

每月一回

定價郵稅共一
 部拾壹
 錢半年
 分六十
 五錢一
 年分壹
 圓二十
 五錢郵
 券代用
 の節は
 一割増

本誌編輯員

伊藤左千夫 融 飯 小野 藤 加藤 咄 高島 咄 田中 治 境野 黃 結城 素 毛利 柴 杉村 縱 横

一日發行

發賣所

東京駒込小石川原町三

鷄聲堂書店

時代の精神に件ふ眞
 の宗教は新佛教なり
 有識者の要求する眞
 の宗教は新佛教なり
 青年の慰籍者たる眞
 の宗教は新佛教なり
 而してこの月刊雜誌
 「新佛教」は即ち新佛
 の宣布を司る者にし
 の自由討究を傳へし
 の大義に基き新信仰
 を鼓吹し新道徳を扶
 植せむとする者なり

鷄聲堂

は宗教哲學倫理教育政治法律文學技藝及その他いろくの書籍や雑誌を賣捌きます

鷄聲堂

は東京市中の重なる書店と特約してありますからどこで出来たものでも取次ぎます

鷄聲堂

は地方のかたぐいのためすべて書籍雑誌の定價の一割或は五分の割引を致します

哲學館及京北中學校教科書賣捌所
東京駒込小石川原町三番地

『新佛教』『東洋哲學』發賣所

鷄聲堂

鷄聲堂

は商業道德の頹敗に憤激して起つた者ですから誠實と勤勉とを虎の巻として居ます

鷄聲堂

は暴利を貪りませぬたゞ聊でも御客様方の便益を謀ることが出来ますれば満足です

鷄聲堂

は總て前金でなくては御注文に應じませぬ爲替は駒込支局宛郵券代用の節は一割増

文學博士 井上哲次郎先生著

(菊判三百頁餘)

釋迦牟尼傳

大歡迎 第八版
上製 價金八拾錢
並製 價金六拾錢
郵稅拾貳錢
郵稅金拾錢

釋迦の史傳として從來我國に行はるゝもの、其類の小説的のものに空想的のものも、學者の一顧に價ひする博士に感あつた世界的偉人の真相を知り、正確の材料多し、研究の結果終に此篇となる、其内此書の特徴を附記すれば博く歐米學者の釋迦に評傳を参考し、孔子、基督、マホメット等を併せて比較評論したる事と及び佛敎を學ぶもの、精細に其材研究法を示した伏し識者の一覽を待つ

發行所 東京市本郷四丁目 文明堂

海老名彈正先生編

新編三百頁

(六版出來)

耶穌基督自傳

大好評

上製 定價金六拾五錢
郵稅拾錢
並製 定價金五拾五錢
郵稅八錢

今や宗教を求むる聲、天下治く且つ之を求むるもの唯理論のみを以て満足せず、直に偉人の胸臆を叩き活ける光明と生命とに接す憾ひなく、此千古の宗教的天才を傳ふるもの、我邦亦二三の福音書の切抜に
まり、或は主觀的理想的考察に基く正確な叙述を、本書は耶穌基督の自傳に
基督の讚評に陥り、未だ歴史的考察に基く正確な叙述を、本書は耶穌基督の自傳に
督を猶太國に一個歴史上の人物として其時勢と周圍との關係活動を描
ものにして、釋迦牟尼傳と相俟、我讀書界の多年渴望を満たすも、謹て江一閱
井上博士の祈る

發兌元

東京本郷區四丁目五番地

文明堂

74
306